
タランティルスの例外少年

アセット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タランテイルスの例外少年

【Nコード】

N7043X

【作者名】

アセット

【あらすじ】

ロイは記憶喪失で、ある貴族に拾われた。貴族に拾われながらも、平民であるロイは所謂『落ちこぼれ』として学園で過ごし、いくつとになり、様々な不幸と出会う。

主人公最強要素がブレンドされているので注意。

ちなみに第一章と第零章とありますが、どちらから読んでもいいです。一応、理解出来るようになってます。

第零章はロイの過去の物語。ある少女との出会いの物語。

プロローグ(前書き)

よろしくお願ひします。

プロローグ

ある男がいた。それは捨て子で記憶喪失で不幸な少年だった。しかし、そんな少年にも僅かに幸せを見出せるものがあった。

それは強くなること。どんな不幸や理不尽をも弾きとばす圧倒的な力を手にすること。どんな蔑みや嘲笑をも吹きとばす絶対的強者になること。

これは不幸でも嗤われても落ちこぼれでも決して諦めずに最強を求めた少年の物語。

舞台は魔法と剣術とが生きていく為のステータスになるファンタジーの世界タランティルス。

彼はここで最強を目指すー

プロローグ（後書き）

頑張ります。

第一話 学園へ(前書き)

プロローグが説明だった・・・

第一話 学園へ

「今日も学園か・・・」

そうぼやいているのは、ロイ・カーレス。

つまり俺である。俺の紹介をさせてもらつたとある貴族のウチの夕飯喰らいという肩書きくらいしか無い。そこが世知辛いところではある。

しかしそんな俺にも生きる目的があるんだ。それは俺が捨てられた日の誓い。

それは強くなること。

何故強くなりたいのかつて？

そんな疑問には簡単に答えられる。それは捨て子だった俺を拾ってくれた人達や大切な人に恩返しをするためだった。

「荷物持ち。なにぼやいてるの！！さっさと学園いかないと遅刻するわよ！！」

そう怒鳴ってきたのは俺が厄介になっている貴族の家のお嬢様だっ

た。名前はアメリカ・
アイラス・センターハート。容姿端麗で優等生。黒髪の美少女である。この家に拾われなかったら、会うこともなかったであろう人種だと思う。

俺はお嬢様アメリカに

「学園の準備でおくれました。それでは学園へ向かいますよ。」

「ええ。じゃあこの荷物お願い。私じゃ重くて。まあ、落ちこぼれには荷物持ちがお似合いね」

アメリカお嬢様は優等生だが落ちこぼれの俺には割と冷たい。まあ、今まで学園に通っていなかったからな。それに俺の立場が平民ということも理由の一つだろう。

「はい。お持ちします。」

そういつてアメリカお嬢様から登校鞆を受けとる。お嬢様は守りた
い人なので、苛立ちはしない。それに俺を拾ってくれた大恩人の娘
様を無下にもできない。だから俺は学園でも家でもお嬢様の従者と
なっている。というか従者になれて嬉しい。

ついでに俺は記憶喪失でセンターハート現当主ラザイン様に拾われ

た以前の記憶がない。まあ・・・ほんの少しだけ、臙げに記憶はあるんだが、ろくなもんじゃなかった。だからこの立場も甘んじて受け入れている。

「じゃ、早く行くわよ落ちこぼれ！」

「はい、お嬢様」

そうお嬢様から声をかけられ俺はいつも通り学園に向かった。

第一話 学園へ(後書き)

唐突すぎたかな？拙作ですが、応援おねがいします。

主な登場人物（前書き）

登場人物紹介です。随時更新していくつもりです。ネタバレあるかな？注意。見ておいても問題は無いと思いますが。

主な登場人物

ロイ・カーレス

主人公。負けることを嫌う少年。寡黙で冷徹に思えるが心は暖かい人物。幼少期にセンターハート家現当主ラザインに拾われた黒髪の少年。15才の割には魔法や剣術を使いこなせていない落ちこぼれ。それは今まで学園に通えるような環境では無かったからである。実際は才能に満ち溢れている。努力家である。顔は整っている。ロイという名前は便宜上必要だから、自分でつけた。階級は平民。使い魔はサタン。

アメリカ・アイラス・センターハート

容姿端麗で優等生の美しい黒髪の少女。ロイには厳しいが他の者には優しい。ロイに厳しいのはこの世界でのステータスである実力がないという理由だけ。平民だからといって差別する人格ではない。ロイの境遇は知っているので若干応援している？凛とした少女で基本的に優しい。15才。階級は上流貴族。使い魔は炎龍。最近はロイに心を開きつつある。

ラザイン・アイラス・センターハート

人格者。徳のある人物。妻が亡くなって傷心中の時、心の傷を舐め合うようにロイを拾った。

た。現在のセンターハート家の当主。魔法や剣術をかなり使いこなせる。しかし魔法や剣術をあくまで交渉の手段としてしか極力使うとはしていない。ロイの修行をたまに手伝っている。平和主義者。42才。階級は上流貴

族。男。王国軍の中枢にいた経歴がある。

レーナ・サンホープ・セクターハート

故人。ラザインの妻。アメリアと似て黒髪の

美女である。ロイが貴族と認めた最初の人。多くは語られていない。

リーゼ先生

男の優秀な先生。本名は生徒達にも教えていない。リーゼは偽名ではないらしいが……

ともかく自分をオープンにしない人。イケメン。かなりの実力者。ロイに興味がある。

ケイル・ギュンター・リバイル

男。15才。ロイを馬鹿にしている。正確には

落ちこぼれ扱いをしている。実力はアメリアには及ばないが、中々の実力を持っている。中流貴族。使い魔は風龍。戦闘狂の気がある。

サタン・ホーリーナイト・イエスタデイ

悪魔と聖なるものの名を持つロイの使い魔。

使い魔の中ではトップクラスの実力。しかし、ロイの魔力量が少ないので、黒猫としての姿でしか顕現出来ない。本来は金髪の美しい美女。数千年の時を生きている。ロイを「主様」と呼び慕っている。ロイに仇なすものには基本的に容赦しない。

学園長

ロイの実力を不審に思う人物。学園に危険が及ぶならロイを排除しようとも思っていた。しかし、ロイの真っ直ぐな眼を見て考え直す。学園のためなら手段を選ばない狡猾な初老の女性。

トリフロス

王国軍の一個師団が苦戦する相手。白銀の龍。学園に侵入したらしいが……全てが謎に

包まれている。

エニア・シャンドル・セントラル

セントラル王国の第二王女。絶世の美姫と言われるほどの美少女である。父親が力に執着しているため、今までのくなく目にあってこなかった。エニア自身も学園に通っているが、休みがちである。おかげで、実力は低い。政治的価値の面からセントラル王には気にいられている様だ。孤独な少女である。

セントラル王

力を全ての基準と考えている苛烈な男。王としての器は完璧であり、頭も回る。力に執着し過ぎているのか、弱いものには容赦がない。平民などは死んでもいいと極端な思考をしている。しかし、強いものはどんな立場のものであっても、重用する。

ジュイス・レンティア・イサラーシャ

王国軍の騎士の序列八位。青髪の女性である。騎士道に厚い騎士である。主な得物は槍。魔武器はブリュセルス。王の直屬部隊に所屬している。

ティナヤセリア

最近はロイに好感を持っている・・・？

主な登場人物（後書き）

見ておいた方が物語がわかりやすいかもしれません。作者の文才が無い為に苦勞をかけます。少し更新しました。

第二話 護衛権の従者（前書き）

第二話です。会話文少なめかもしれないです。

第二話 護衛権の従者

ここはセントラル魔法学園。毎年優秀な人材が輩出される進学校である。なぜ俺がこの学園に通えているのかというと、お嬢様のおかげだ。詳しく説明させてもらうとアメリカお嬢様は貴族の中でも上流貴族である。上流貴族は一人だけ家から特別に従者を連れていくことができる。

これを「護衛権」という。

まあ、普通の護衛権で学園にきた従者たちは年配の人も多いし、実力が高い人も多い。ついでに説明させてもらうと普通の従者は学園には通えない。護衛権で来た従者たちは基本的に学園の外で貴族たちの要請があるまで待機している。

俺が学園生活を送れるのは実質ラザイン様のおかげだ。従者で平民な俺でも学園に通えるのは幸運なのだろう。クラスメイトからの待遇は厳しいが。

そんな事を思いながら、お嬢様と共に教室に入る。クラスは1 - Aである。

「おはよう。みんな。」

こう言ったのはアメリカお嬢様。

「おはよう。アメリカさん。」

クラスメイトから羨望の眼差しをうけながら
あいさつに返答されている。

一方俺は・・・

「よう。魔力の知識も低いし剣術の心得も全然ない落ちこぼれの平民従者君」

無論、落ちこぼれとは俺の事だろう。またケイルか・・・

「はい。おはようございます。ケイル様」

まあ、護衛権の従者だから、当たり障りのない返答しておく。どうせ平民だ・・・

「うわ。あれがアメリカさんの護衛権の従者だと思つと可哀想だよね」

「実力もないし、学もあまりないからな。なぜあんなのをなぜ護衛権の従者にしたのか・・・センターハート家の七不思議の一つだな」
七不思議・・・？そこまで言われるのか？

我ながら酷い言われようだな・・・お嬢様もこちらを睨んでいるように見えるし。まあこの世界はほぼ実力が全て。今までもろくな教育を受けていない俺の評価はそんなものか。

しかし、俺はいつの日か絶対に強くなってみせる。

目標がある奴は強くなれるというのがおれの持論だ。おれが目指すのは圧倒的な力。やるからには、最強を目指そうと思う。自分を磨くことが今の俺の唯一の娯楽だし。

そう思っているなか、俺は一人静かに呟いた。

「絶対に強くなって・・・人並みの幸せを手に入れてみせる。そして、センターハート家に恩返ししてみせる」

実力が上がれば平民でもこのタランティルスという世界ではのし上がれるからな。恩返しも何か出来るだろう。

俺は決意を新たにした。

まあ、気長に強くなっていくさ。

そのすぐ後、1-Aの教師らしき人物が教室に入ってきた。

第二話 護衛権の従者（後書き）

ある程度状況説明が終わったなら、会話文を多めにしたいです。

第三話 落ちこぼれとしての世細な日常（前書き）

頑張ってます。

第三話 落ちこぼれとしての些細な日常

「これからSHRをはじめる。学級代表。」

「起立。気をつけ。礼」

学級代表のお嬢様が先生の呼び掛けに答え、皆も

「「「礼。」「」」

と答える。生真面目なクラスだなと俺は思っていた。

いや、この位普通か？

まあ、そんなことはいいか。

しかし、今思ったがリーゼ先生ってすごい若いな。あ、リーゼ先生は担任のことだ。

あんな年で由緒正しいセントラル高等魔法学園の先生になれるなんて凄いなと思う。

俺が成長したら、手合わせして貰いたい。まあ、そんな積極性は俺にはないが。

「これで終わります。学級代表。」

「起立。気をつけ。礼。」

「『礼。』」

おっと、一人思案にふけていたら、何時の間にかSHRが終わってたな。

一人、礼をする時起立しなかった俺は不要な注目を浴びていた。

「落ちこぼれが態度まで悪かったらお終いだな」

そうこぼすのは中流貴族のケイル。魔法の実力は学園の一年生ではトップクラスだったな。

「すみませんでした。少し思案に耽っていて・・・」

まあ、俺は当たり障りのない返答をした。俺の階級は平民。貴族相手には敬語を使われなければならない。この敬語やらなんやらをマスターするのにかなり時間がかかった。従者の立場も大変だ。

「ま、おまえの事なんてどうでもいいがな」

そついつて嫌な笑みを浮かべながら教室を立ち去るケイル。この貴族・・・弱い奴にはとことん意地が悪いんだよな・・・自分と同格の相手は認めているらしいが・・・

こんな相手に、本来敬語など使いたくないが・・・まあ、無理を言

って学園に居座っているんだ・・・文句はいえまい。

それに俺が真に貴族と認めたのは三人のみ。いや、今は二人か・・・まあ、とにかく。俺は自分が認めた貴族にだけは心から敬いの気持ちを含めて敬語を言っている。

あんな中流貴族に心から敬語なんて言えないな。だから、あまり悔しくはない。

ん？そういえばなんでケイルは教室から出ってたんだ？

「今日の日程はSHRだけよ。荷物持ち。ということで、鞆をよろしく。」

とお嬢様から声が掛かる。

「わかりました。お供したほうがよろしいでしょうか？」

俺がいなくても大丈夫だと思うが・・・心配だ。もしこの方に何かあったら・・・

「あなたのお供？いらないわ。友達と帰るから。じゃあね、荷物持ち」

そうですか・・・

そしてお嬢様はスタスタ教室を出ていった。なんか寂しい・・・

心に寒風が吹きすさぶ。

はぁ・・・

入学間もないから授業らしい授業もないし俺も今日は帰るか。

セントラル魔法学園高等部で俺はやっていけるだろうかと俺はこの時不安に思っていた。

第三話 落ちこぼれとしての些細な日常（後書き）

お気に入り百突破！！

第四話 天賦の才さらには努力（前書き）

小説更新もなかなか大変です。

第四話 天賦の才さらには努力

俺はセンターハート家の屋敷の中庭でいつものように俺の恩人ラザイン様に修行をつけてもらっていた。

「脇が甘いぞロイ君」

「くっっ！」

そういつてラザイン様の剣術受けている俺。

ラザイン様は普段は人格者だが修行となると厳しく教えてくれる。本当にたまにしか修行してくれないからそこが残念だ。まあ多忙な方だし仕方ないな。

修行が厳しいのは俺にとっては嬉しいことだった。俺からラザイン様に頼んだことだし、何より俺が強くなりたかったからだ。

「しかし、ラザイン様の剣術は凄いです。剣筋が見えませんでした。」

「

「まあ、手加減せずに打ち込んでいるから当然だよロイ君。」

「しかし、君は凄いな。剣術と魔法を全く知らない半年前から凄い勢いで成長しているよ。」

「何せ、私の全力の斬撃を感覚的にでも防いでいるのだから。魔法に関しても初級魔法ならかなり使えるし本当に凄いなと思う。」

そう！そんなんです！俺は半年前から魔法と剣術を学び始めたばかり。

つまり、学園に入る僅か前に修行をはじめたばかりなんだ。

まあ俺はセントラルの中等部ましてや他の学園にも入っていないことが知られているから落ちこぼれとして見られているが、

ラザイン様曰く、俺には・・・

「天賦の才があると思うよ。君には。もし君がアメリカや他の貴族の様に幼少期から英才教育をつけていたら、その実力は多分アメリカを抜いていたと思う。」

そんな事をいわれたら、やる気が出てこないわけがない。

どうやら、俺は潜在能力とやらが人より高いらしい。素直に嬉しい。

「少しだけ希望も見えてきました。ラザイン様ありがとうございます。」

す。もう少し修行を続けてもらっても構いませんか？御多忙なのは承知しています。けれど、お願いします！」

「私は構わないよ。ロイ君。」

「じゃあ次は魔法の修行だ。」

「はい！」

（・・・しかし、ロイ君は努力を惜しまない天才型か・・・これは教えている私も楽しみだ！それに時折感じる闇の波動・・・正直得体のしれない力だが興味もある。彼はクロフォードにどこまで近づけるかな？）

ラザインは一人そう思っていた。

第四話 天賦の才さらには努力（後書き）

ラザインが空気になりそうな予感・・・クロフォードという人物は
後々登場。

世界観説明（前書き）

セントラル魔法学園高等部の在学期間は3年を想定しています。物語中に自然に入らないと思うので、書いておきます。作者の文才が無ければかりに迷惑をかけます。

世界観説明

この物語の舞台はファンタジーの世界タラントイルス。ここは様々な魔法に満ち溢れている世界。魔法の凶悪さの度合いつまりランクを挙げていくと、

初級魔法

中級魔法

上級魔法

最上級魔法

未開拓魔法

となる。

最上級魔法があるのにその上のランクの魔法があんの？って感じではあるが、これはタランティルスの住人が未だにその魔法の領域に踏み込めていないことから、未開拓魔法と畏怖を込めて言われている。

魔法のランクの見分け方は純粹に流れている魔力量の多さで分かる。

この世界の魔法は詠唱を必要としていない。しかし、その代わり払わねばいけない対価がある。

それは気力。つまり精神力。魔力も対価に含まれている。もちろんランクが高いほどその対価は大きい。

この世界の戦闘は魔力も重要だが、気力といわれるものも重要なよ
うだ。

これらの配分が戦闘では重要なのだろう。

次にこの世界のステータスに大きく関わる概念、剣術についての説明をしようと思う。

剣術は純粹に力と体力を消費するだけのものと思われがちだが、高度なものとなると魔法を発動する時にも使った気力を消費することになる。

武器は剣や杖を両方持つものが多い。

この世界には、魔武器というものが存在している。これもまた剣や杖といった形状が多い。この魔武器は中等部の頃に魔武器契約の魔法で取得するものだから、主人公のロイだけ現在魔武器を持っていないことになる。

次は使い魔についての説明をしたいと思う。

使い魔は高等部で習う、いや、習うというより契約するものだ。契

約の時出てくる使い魔の實力は契約者の潜在能力に比例しているという。

使い魔の詳しいランクは決まっていない。

人間に深い繋がりを持つ使い魔だが、詳しい事はよくわかっていない。何れ使い魔と対話出来る人物が全てを解き明かしてくれるのかもしれない。

最後に軍とギルドについての説明。学園を卒業した後にはほとんどの人がこの二つのところに「就職」という形で入ることになる。

軍は国の自衛や戦争の為に備えている組織。

ギルドは国中の依頼や戦争の予備戦力としての役割を果たしている組織である。

世界観説明（後書き）

大まかな世界観説明はこれで終了。大体タラントイルスの構想はこんな感じです。

第五話 この世界の魔法（前書き）

第五話です。どうぞ。

第五話 この世界の魔法

ラザイン様との修行の後の翌朝、アメリカお嬢様の荷物をお持ちしていつも通り学園へ向かった。

今日から授業が本格的に始まる様だ。半年間の努力のおかげで魔法と剣術の基礎知識ぐらいは覚えている。まあ、授業面においては心配は余りなかった。

ただ心配だったのは・・・

「そういえばあんた魔武器持ってなかったわよね？実技は大丈夫なの？」

そう。俺には自分の専用武器ともいえる魔武器がないのだ。普通は学園の中等部の頃に授業で手に入れるらしい。

「若干心配ではございます。お嬢様。しかし、リーゼ先生も私が魔武器を持っていない事を知っておられます。放課後にでもリーゼ先生に魔武器契約がしたいと言って契約してきますよ。心配ありがとうございます」

「誰が荷物持ちの心配なんかしてるのよ。誰が。私はただセンターハートの関係者である
あなたの失態で家の家名に傷を付けられたくないだけよ。わかった？」

おお。冷たい・・・お嬢様と話せただけでも僥倖か。

「わかりました。お嬢様」

「わかればいいの」

と、いった会話をしながら学園向かう俺。しかし、今日はいい日だ。ん？何故かつて？

お嬢様が俺と会話をしてくれてるからだよ！

お嬢様は普段はゴミを見るような目つきで俺を見ている。

今日は扱いがましな方だ。機嫌がいいのかな？まあ、俺にはあまり関係ないが。

そして授業1時間目。魔法理論の座学の時間。いきなり、俺はリゼ先生に授業中質問された。

「ロイ君。魔法を行使するときに安定するのは杖と剣どちらかな？」

このくらいは解る。

「杖です。理由は剣でも魔法を行使すること

はできませんが、杖と比べて、魔法の精度は落ちるからです」

ラザイン様との予習？いや復習？で学んだ知識だ。間違っではないはず。

「その通りです。だから、魔法主体で戦う事になるときは剣ではなく杖で戦うと良いでしょう。使い魔契約が終わったらずぐ模擬戦もあるから、この事は覚えておいてくれ」

と、リーゼ先生。

ていうか、模擬戦あんの？成績に入るよなあきつと。魔武器をまだ触ってすらいない俺には不利な気がする。今日放課後、絶対に魔武器と契約して修行しなくちゃいけないな。

「では、次にアメリカ君。魔法を行使するときの対価と言われているものは？二つ挙げてくれ」

おっとまだ授業中か。

「はい。魔法を行使するときを使う対価とは気力と言われているものと魔力です。魔法のランクが高いほどその対価は大きくなります。気力とは精神力と言い換えてもいいと思います。」

と、完璧な答えを返すお嬢様。流石。従者としての心得ばかりを教えられた俺とは違うな。少し嫉妬しちゃった。

「完璧、か流石はセンターハート家といったところだな」

と、リーゼ先生。

「さて、今日の新しい知識として魔法の詠唱について先生から説明したいと思う」

「皆は、絵本の勇者の伝説というお話などを読んだ事はあるか？きつとあるだろう。一人の勇者が国を救う話だ」

俺は読んだ事ないな・・・まあ、小さい頃は慣れない従者としての知識を覚えるのに必死だったからな。

「この物語で登場する勇者は魔法を唱える時に詠唱と呼ばれるものをしている。しかし、我々の世界の魔法は詠唱を必要としない。魔法と慣れ親しんだあなたは当然知っている筈だ」

俺も知ってるな。この世界の魔法は魔法名を唱えるだけで行使できる。

ただ・・・

「しかし、その代わり絵本とは違い魔力だけでは魔法を行使することとは出来ない。前述の通り気力と言われているものも消費しないとイケない」

詠唱はないが、気力は消費するってことだな。まあ、新しく習う事といっても皆もこのくらいの知識は有るだろう。

「ここからが注意して聞いて欲しいところです。」

リーゼ先生が声を潜めた。

「詠唱がないからといって魔法を行使し過ぎると、気力が無くなり気絶します。最悪、死に至ります。魔法名をいうだけで簡単に魔法を行使できるので、注意してください。これが原因で学園で死者が出たこともあります。まあ、魔法名を覚えても顕現させるまでは修行が必要ですが。」

魔法の使い過ぎ「死or気絶ってことか。
俺も注意が必要だな。」

「これで授業を終わります。学級代表！」

「起立。気をつけ。礼。」

あ、お嬢様は学級代表だったな。

まあ、とりあえず関係ないか。

みんなも礼をして次の授業に備えている。

まあ、今日は座学だけみたいだから、とりあえず乗り切れるだろう。

ああ。さっさと放課後になって魔武器と契約したいなあ。

第五話 この世界の魔法（後書き）

世界観説明を飛ばした人も理解できる様に頑張りました。気といわれるものはこの世界の戦闘では重要になってきます。

第六話 その名は気仙花（前書き）

第六話、どうぞ。

第六話 その名は気仙花

放課後―

「やっと授業がおわった・・・」

俺は一人そう呟いていた。

お嬢様には先に帰って貰った。というより、気づいたらお嬢様はもう帰っていた。まあ、今日の朝、放課後に魔武器との契約を先生に手伝ってもらおうと言っておいた筈だから、それで帰ったのだと思う。

まあお嬢様からは俺は単なる荷物持ちの従者程度にしか認識されていないからな。

魔武器との契約が終わるまで待っていてくれたりはしないか。なんか虚しい。

閑話休題。

話が脱線していた。今はリーゼ先生に魔武器契約の仲立ちを頼んだ

ところだ。リーゼ先生の反応は、

「うん？魔武器契約をしていないのかい？確か魔武器って中等部の時に・・・ああ！君がセンターハートの護衛権の従者、噂のロイ君か！」

反応がうざい。リーゼ先生はもっと凜とした先生だと思っていたのに。

「わかった。君の事情は知っている。協力しよう。」

「ありがとうございます。」

いきなり先生の雰囲気は凜としたものに変わった。男の若いながらも威厳のある表情だ。公私の使い方もわきまえている様だ。やはり素晴らしい先生だと思う。

特別準備室―

「ここが特別準備室だよ。ロイ君。君にはここで魔武器と契約してもらおう。覚悟はいいかい？まあ、覚悟なんてものは実はそんなに必要ない。それに特別な儀式や魔法を使う訳ではないしね。」

「そうなんですか？」

「そっだよ。ロイ君。魔武器との契約はそんなものなんだ。だからといって気を抜いてはいけないよ。一生支え合うものだからね。魔武器と人間は。使い魔並に重要なんだよ？わかったかい？」

わかりやすい説明だった。魔武器は重要。気は抜くなっただけか。

「わかりました。では、先生、魔武器との契約方法を教えてくださいませんか？」

「わかった。今、教える。実は魔武器との契約には特別な儀式、魔法、道具は一切必要ないんだ。これはさっきも言った筈。重要なのは意思の力。思いの力。精神力。いわば、気力。つまり、魔武器契約で使うのは気力なんだ。」

気力かあ。あんまり意識したことはないな。

「まだ説明を続けると、魔武器と契約するには念じるんだ。」

魔武器に関して、素人な俺はよくわからなかった。

「念じる？念じるとはどういうことですか？」

「わかりづらかったかな？念じるとは、ただ自分の心に働きかけるんだよ。魔武器よ・・・来い！ってね。簡単だろ？」

「確かにそれだけなら、簡単です。早速自分の心に働きかけてみます。」

「私はあくまで、仲立ちしかできない。まあ、危険もないし、全力を出してこい。」

「はい！では・・・いきます！」

その瞬間凄まじい量の光の奔流が特別準備室を覆っていた。

「くっ！マジック・ガード！」

リーゼは咄嗟に魔法を行使して自分の身を守っていた。

(なんだ・・・この気力量は・・・気力が具現化する程の気力量なんて・・・)

リーゼはそんなことを思い、光の奔流を見ていた。

光の奔流の中で―

「なんだ？この白い部屋は？」

いや、部屋というよりは・・・

「暖かい光の中みたいだな。」

ん？俺の見つめる先に一つの剣が光に突き刺さっていた。

「なんか神秘的ですらあるな。リーゼ先生もいないし。ここだけ世

の中と離されたみたいだ。」

まあ実際はそんなことなく、ただの比喻だけど。そう思いながら多分俺の魔武器であるその剣を握ってみた。

握った瞬間―

「うっ！何だこれ！頭が！頭が焼ける様に熱い！」

俺の脳にこの魔武器の情報が流れてきていた。

「はあ、はあ、終わったか・・・」

間違いないこの剣は俺の魔武器だろう。全身全霊をかけてだしたこの剣が俺の生涯のパートナーとなるだろう。

この青白い光芒を放つ美しい刀身をもつ剣の名はけせんか気仙花能力は気力を纏うことができ気力を纏ったら斬撃の威力が増加するようだ。さらに魔力とも相性が良く魔力も纏える様だ。

試しに光の奔流の中で魔力を込めてみる。さつき気力をかなり使ったから今度使うのは魔力だ。そうするとけせんか気仙花の刀身が青く輝き出した。

「良く切れそうな剣だなあ・・・なんか感動」

自分が落ちこぼれじゃ無くなったみたいだ。まあ世間からみたら、今まで学園に通っていない俺なんて落ちこぼれなんだけどな。

そして、俺はこの魔武器、気仙花のとおきのおきの必殺技の能力を試そうと思う。

その能力の名は「不可視の斬撃」。

簡単に説明すると、遠隔攻撃能力ということになる。詳しく説明すると、気力や魔力が纏っている斬撃を飛ばすことができる能力だ。しかも能力の名の通りその斬撃は見えることはない。つまり、見えない遠隔攻撃能力がこの気仙花にはあるということだ。

てか、強くな？見えない衝撃波飛ばせるんだぜ？皆もこれと同じような魔武器もってんのかな？

「学園が怖いと心の底から思ったよ・・・」

まあ、最強を目指している俺だ。怖いと思うが気後れなんてしてられない。

とりあえず、この気仙花の能力「不可視の斬撃」を試すことにした。

「オラア！」

と俺にあんまり似合わない気合いの声を出して回復してきた気力を気仙花に込めてその斬撃を横に薙いだー

特別準備室ー

(ロイ君遅いな・・・あの光の中で何が起こっているんだろうか?)

一人リーゼは思っていた。

ん？なんか光の奔流がモーゼの様に真ん中から裂けてくな。

その瞬間ブオオオンという音とともに特別準備室の壁が壊れた。

あれ？特別準備室の壁の一部が壊れたの・・・か？

光の先には剣を握っているロイが立っていた。マジック・ガードを解きロイに近づくりーゼ。

「その様子だと魔武器とは契約できたみたいだな。」

と、轟音に驚きながらも言うりーゼ。

「契約したのかはわかりませんが・・・魔武器を手にするのはできだと思います。」

「なら良かった。」

しかし、ロイは思う。光の奔流ごと特別準備室の壁を壊した「不可視の斬撃」。とても恐ろしい能力だなと。

(いつも平静的なりーゼ先生も少なからず驚いているみたいだな。ていうか、壁の修理代とかヤバイ。俺じゃ払えない。もしかしたらまたセンターハート家に迷惑が・・・そしてお嬢様から突き放した様な目で見られるのか・・・最悪な負のループだな)

ロイは結構真面目な事を考えていた。

一方、りーゼはこんなことを思っていた。

(やっぱりただの魔武器じゃないみたいだな。頑丈な特別準備室の壁を破壊する威力の攻撃を産む美しい刀身の剣か・・・ロイには落ちこぼれという認識しかなかったが、ロイは一体何者だ？あの気力量は学生が出せるものじゃないぞ。調査が必要・・・か？)

「そういえば、先生。魔武器をしまうのにはどうすればいいのですか？」

「あ・・・ああ・・・魔武器をしまうには魔武器よ消える！と念じるだけでいいぞ。」

「わかりました。」

魔武器よ消えると念じて俺は気仙花を消した。

「あと一つ聞きたいのですが、壁の修理代は・・・？」

不安そうなロイ。

「学園長に報告するが、センターハート家に迷惑がかかる事は無いと思うぞ。もちろんお前が修理代を払う事も無い。この学園は授業中に起きた事故で学園の物品が壊された場合生徒に弁償はさせず、学園が負担することになってるからな。」

「でも、先生今は授業中じゃな・・・」

「授業中ってことじゃなくよ。」

と、俺の言葉を遮りニツと笑いながら言うリーゼ先生。
本当に素晴らしい先生だ。

「ありがとうございます。俺はこれで帰らせていただきます。」

「わかった。明日は使い魔召喚ってことを忘れずにな。」

「はい。わかりました。」

リーゼ先生に背を向け屋敷に帰る俺。少し自分の力というより魔武器のおかげだが力が上がった気がして喜んだロイだった。

第六話 その名は気仙花（後書き）

魔武器契約の話でした。どうでした？リーゼ先生は様子見って感じ
です。

第七話 興味（前書き）

主人公は既に気力だけだったら、化け物レベルです。

第七話 興味

俺は学園から帰ってきていつもの様に従者としての業務を果たした後、夜の修行をしていた。ラザイン様がセントラルの街に出掛けていて、いないので必然的に俺一人で屋敷の中庭で修行をしている。

今日は魔武器に慣れるための修行しかしていない。そのおかげで気仙花を自分の手足のように振るえるようになった。

魔力の青き光芒と気力の白き光芒が中庭を走る。その風景は幻想的ですらあつただろう。

その修行を見ていたアメリアが思わず、従者の少年に声をかけてしまった。

多分、ラザインが街に出掛けていることもあつたからだろう。アメリアはともかくロイに声をかけた。

「ずいぶん長続きますわね。その修行」

「!?!?お嬢様?」

「なんですの荷物持ち?その驚き様は」

「いえ、少し驚いてしまつて。お嬢様が俺に声をかけてくれるなんて。何か従者としての不手際でもありましたか？」

「そんなものはないですわ。ですが、少しその武器に興味があつて。それはあんたの魔武器？」

「はい。そうです。俺の魔武器です。銘は気仙花といいます」

「気・・・仙花・・・」

「良かったら、触つてみます？」

その瞬間嬉しそうな顔をしたアメリカがいた。

「良いんですの!？」

「はい。お嬢様の頼みですから」

「別に頼んでなんていません。なんか荷物持ちの癖に生意気ね」

「すみません。お気に障つたのなら謝罪します。それよりお嬢様。気仙花をお渡しします」

とって気仙花を渡す俺。

「美しい刀身の剣ですわね。ですがさっきまで光っていませんでした？」

「それは、俺が魔力と気力を込めて剣を振るっていたからです」

「お、落ちこぼれのアなたが・・・魔力と気力付加の魔武器を！？嘘ですわ・・・私でも魔力付加の剣しか出せないのに・・・」

「嘘はついていません。お嬢様」

お嬢様に嘘つきと思われたくはないな。こんなところで、不信任を持たれたくはない。実際に剣を振って見せるか？

「ならもう一回その気仙花とやらの剣舞を見せなさい」

いや、剣を振るのはいい。今、俺もそう切り出そうとしてたからな。だが、お嬢様の言葉の剣舞をもう一回見せなさいって俺は一度でもお嬢様に剣舞を見せたことがあったか？

「もう一回とはどういうことですか？お嬢様に剣を振る姿を見せるのは初めての筈ですが？」

少し失礼かもしれないが聞いてしまった。

その瞬間アメリカの顔が林檎の様に赤く染まり

「別にあんたの修行姿が気になって話しかけたわけじゃないんですからね！？」

と言われた。

「わ・・・わかりました」

妙な迫力に押されタジタジになるロイこと俺。

「じゃ早速剣舞を見せてもらいましょうか」

と、アメリカ。

「わかりました」

まあ、断わる理由もないし、見せますか。大事なお嬢様の頼みだし。

「では振りますよ。お嬢様……いくぞ！気仙花！」

その呼びかけに応えるように気仙花は青白い光芒を浮かべながら美しくその刀身を揺らした。

「綺麗。……」

アメリカはロイが剣舞をやめるまでその幻想的な光景を見続けた。

「ふう。これで信じていただけましたか？お嬢様？」

「フン。落ちこぼれの荷物持ちのロイにしてはまあまあな魔武器ね。まあ頑張れば？」

そう言ってアメリカは中庭を立ち去った。

ロイは初めてアメリカに名前と呼ばれたことに歓喜に打ち震えていた。

俺は守りたい人と少し心の距離が近づいた気がして、中庭を立ち去った。

一方、センターハート家アメリカの自室―

アメリカは自室のベッドで横になっていた。

そして一人の荷物持ちの少年を思い浮かべていた。

（あの荷物持ち・・・私クラスの魔武器を使っていた？私は学年トップクラスの实力はあると自負している。でも何だかあの荷物持ちの魔武器と私の魔武器じゃ荷物持ちの魔武器の方が美しく強いと感じてしまった。）

「はあ。なんで私あんな奴と会話したんだろう？」

ここ数年間荷物持ちとは従者としての会話しかしてこなかった。いやあの荷物持ちが拾われてからまともに喋ったことはない。

（あの美しい刀身に惹かれたのかしら？あの荷物持ちは落ちこぼれだけ剣舞は美しかった。まるで幻想空間にいるみたいな美しさ。まあ魔武器が凄いだけね。きっと。）

アメリカ自身は自覚していないが、アメリカはロイに少なからず興味を持ち始めていた。

第七話 興味（後書き）

気仙花はかなり強い魔武器にしておきました。

第八話 使い魔か・・・（前書き）

使い魔との契約の説明回です。お気に召さなかったらごめんなさい。

第八話 使い魔か・・・

はぁ朝か・・・

俺は昨日、お嬢様と初めてまともに喋れた気がして少しテンションが上がっている。

早起きしてしまった。

まあテンションが上がっているといっても、落ちこぼれ扱いを受けている学園に進んで行きたいとは思わないが。

学園の制服も着たし、こちらの準備は終わった。後はお嬢様を待つばかり。

少し、待っているとお嬢様の部屋のドアが開くのが見えた。どうやら、お嬢様の準備も済んだ様だ。そう思っていたら早速お嬢様から声が掛かった。

「学園に行くわよ。荷物持ち。はい、鞆」

「はい。受け取りました。行きましようか」

「ええ、そうね」

今日は俺に対するお嬢様の物腰が柔らかい気がしないでもない。従者時代の俺はお嬢様と会話する機会もなかったから、お嬢様の事はあまり理解していないかもしれない。しかしそれを考慮してもいつもよりかなり良い感じだ。

昨日の魔武器が原因か？あんなのだったら、いくらでも見せてやりたいね。まあお嬢様には魔武器受けが良いらしい。嬉しい情報だ。

折角、護衛権の従者になったのだから公私共にお支えしたいからな。

「なに突っ立ってんの！早く学園に行くわよ！あんたが来なきや私の荷物もないじゃない」

「すみません。少し考えごとをしていて・・・」

「そんなこといいから、早く学園に行くわよ。なんたって今日は使い魔との契約の日だからね」

「はい。行きましよう」

今日は使い魔召喚の日かあ。一日掛けてグラウンドで行われるんだよな。魔武器と同様に一生を過ごす相棒だ。今日は使い魔召喚を全力で頑張るか。

俺たちは学園に着いた。すると教室の黒板に太字でグラウンドに来るよつにと書いてあった。

まあ向かうとするか。

グラウンドー

ここがセントラル魔法学園のグラウンドか。あまり見た事はなかったが、広いな。まあこの広さなら1学年全員の使い魔召喚なんて余裕で出来るな。

「1ーAはここだ！早く来い！」

と、リーゼ先生。

俺は急ぎ足で向かう。何故か俺とほぼ同時に学園に来た筈のお嬢様が既にグラウンドにいることに疑問を覚えたが、まあ些細なことだ。

「では、出席番号1番から使い魔との契約が始まる。使い魔との契約の魔法は先生達が行使するから安心してくれ」

どうやら、使い魔との契約が本格的に始まるな。使い魔は己の潜在能力に見合ったものが出てくるらしい。

もっといえば使い魔は自分の「将来」の可能性といっても過言ではないのだ。

嫌でも気合いが入る。といっても、俺が使い魔との契約の魔法を行使するわけではないので、なんか気合いが入りづらいが。

まあ全力で使い魔との契約に挑もう。それが、今、俺に出来る唯一のことだ。

第八話 使い魔か・・・（後書き）

ロイ（主人公であり従者）の使い魔はもう決まっています。潜在能力の具現化とか書いてしまったのでかなり強くなるかもです・・・

第九話 禍々しい扉（前書き）

ロイの使い魔がまだでてこない・・・だと・・・

第九話 禍々しい扉

まずは出席番号1番つまりはアメリカお嬢様からの使い魔契約だ。
何が出てくるか楽しみだ。

「アメリカ君。使い魔契約を始めるがいいかい？」

リーゼ先生が問う。

「はい。始めてください」

お嬢様も心構えは出来ているようだ。

「ではいくぞ。サモン・リンク！」

リーゼ先生が魔法を行使すると魔方陣が現れた。

「アメリカ君。現れた魔方陣に手をかざしなさい」

「わかっています。魔方陣に手をかざせば自分に見合った使い魔が
顕現するんですよね？」

「流石だなアメリカ君。その通りだ。私が説明を言う手間が省けたな」

流石お嬢様。使い魔契約は高等部の知識なのに、予習されていていらっしやるようだ。

「ではいきますわ」

そついつて魔方陣に手をかざすお嬢様。魔方陣からでてきたのは・

「グオオ」

炎龍だった。炎のドラゴン。かなり大きい。凄い強そうだ。

「「「うおお！凄いアメリカさん！こんな大きい使い魔と契約できるなんて！」「」」

みんながお嬢様を褒め称える。

まあ、使い魔のランクは詳しく決まっではないんだが、炎龍はと

ても凄い使い魔の部類に入るんだろう。流石はお嬢様。

俺はお嬢様を盲信している。何か悪いか？

閑話休題させてもらおう。

午後になった。みんなが次々と使い魔との契約を終わらしている。ていうか、お嬢様の炎龍の時も思ったんだが、契約の時に我に力を示せのないイベントはないんだな。つまり、使い魔に力を認めさせるイベント。そんなものがないから意外と使い魔契約はスムーズに進む。

まあ午前中にケイルが風龍を出してどや顔でこっちを見下していたのはかなり印象的だったな。まだ俺の使い魔も見えないのに。

まあ、ケイルの使い魔がドラゴン関係なものも意外だったが。ということ、ケイルもかなり強い部類に入るのか。

意外や意外。俺は今まで、ケイルをただの糞貴族だと思っていた。實力はあつたみたいだ。

一時期はウザすぎて敬語をやめようかと思っていたくらいだった。何故敬語を使うのかって？おいおい、忘れたのか？俺はあくまでお

嬢様の従者なだけだから、貴族様達には敬語を使う必要があるんだぜ？

俺は誰に説明しているんだろうか？最近自分がよくわからない。

そんなことを思っていたら、何時の間にか俺の使い魔契約の順番がきたらしい。俺は名前がロイだからかなり順番が遅い筈なんだけだな。

時が経つのは早い。

「おい。出席番号34番。早く来い」

俺はリーゼ先生の元に向かう。

「ではサモン・リンクを行うぞ？ロイ君？」

「はい。お願いします」

「準備は出来ているようだな。では、サモン・リンク！」

リーゼ先生が魔法を行使して魔方陣を顕現させる。俺は迷うことなく、その魔方陣に手をかざす。

ロイが手をかざした瞬間一つの禍々しい扉が魔方陣からロイの前に姿を現した。

第九話 禍々しい扉（後書き）

使い魔契約を引っ張りました。すみません。ストックの通りに出して行くと、無理やりなタイミングで終わるんですね。本当に申し訳ないです。

第十話 悪魔でもあり聖女の様でもある（前書き）

使い魔登場です。しかし、私も心理描写がまだまだです。

第十話 悪魔でもあり聖女の様でもある

「何だこれは？」

俺は思わずそう呟いた。使い魔は確か生き物の形を形どっている筈だ。先生の魔法が失敗したわけでもないだろうし、一体目の前の現象は何なのだろう？

ただ、禍々しい扉が目の前に立っている。やっぱりよく分からない。でもなんだかあの扉の先から俺を呼んでいる声が聞こえる気がする。幻聴だろうか？錯覚だろうか？俺の心に直接語りかけてくるような感じ。まあよくわかんないが。

よく分からんが、俺は決心した。俺は先生に声をかける。

「リーゼ先生。俺はあの扉の先へ行きます」

「ああ・・・わかった・・・」

どうやらリーゼ先生や他の生徒たちは呆然としてまともにリアクションが出来ないらしい

。お嬢様ですら目を丸くしている。まあ、使い魔契約で変な扉が出

てくるなんて今までの生徒たちには居なかったしきつと珍しい事何だろう。いやリーゼ先生も驚いていたからもしかしたら俺が初めて扉を出したのかな？

前代未聞ってやつか？

落ちこぼれの特権みたいな感じだな。嫌な特権だが。

そして、俺は禍々しい扉を開けた。

扉の先―

俺は扉の中に入った。一面真っ黒な空間。こんなところに俺の使い魔がいるのだろうか？

「いるぞ。儂はここじゃ」

声の方を見ると、其処には金髪の美しい聖女とでも表現出来そうな女が立っていた。

「お前が俺の使い魔になってくれるのか？」

「うむ。なつてやるぞ。だがその前に、お主と話す必要があったからお主を僕の精神世界に逆召喚させてもらったのじゃ」

「話す必要があった？なら直接こつちにきて話せばよかつたんじゃないのか？」

「残念ながらお主の今の魔力では僕を顕現させることはもつて数十秒じゃ。なんせ僕は使い魔の中でも「例外」の存在じゃからの」

「そうなのか？だから逆召喚？をしたのか。まあ、それには納得した。そういえば、お前の名前も聞いていなかったな。ていうか、人型の使い魔なんて聞いたことないな」

「うむ。それでは、話したい事前の前に僕の自己紹介からいこうかの？僕の名はサタン・ホーリーナイト・イエスタデイじゃ。人型なのは僕が使い魔の中でも「例外」だからじゃの」

「例外？人型ってことか？まあ名前にも突っ込みたいがな」

「名前はしょうがなからう。生まれ持ったも

のじゃからの。まあお主の例外についての質問の答えは人型というのもそうじゃし、魔力量というのもそうじゃらう」

「どついついことだ？」

「つまり、僕は他の使い魔と一線を画す使い魔ということじゃ。まあかなり強い魔力と気力と力がある使い魔と思ってもらって構わんぞ。えっへん」

えっへんって可愛いな。オイ。金髪の美しい美女に言われているから変な感じだ。まあ強い使い魔なのか？

「可愛いくて強いだなんて、褒めてくれるのか主様よ？嬉しい奴じや」

ん？口にしたつもりはなかったんだが・・・
喋っていたのか？俺。

「お主も人を褒めるなら口で言えば、いいものを・・・。安心せい。お主は喋ってはおらんぞ。ただ僕と主様の精神が繋がって主様の心が僕にただ漏れただけじゃ」

「マジで？」

「マジもマジ。大マジじゃの」

マジかよ・・・心読まれるとか拷問じゃね？

しかも意思があり喋れる使い魔に。さっきまでの強い使い魔としてのオプションがどうで

もよく感じるほどの事に俺は愕然としていた。

「なんじゃ。どうでもいいとは。俺はかなり強いんじゃないぞ。まあその俺を呼び出す事に成功したお前様もなかなかなものだと思うぞ」

「そうなのか？よくわからないが、そうだといいな。俺は強くなりたいからな。サタンが強い使い魔なら嬉しいし、頼りになるよ」

「主様は嬉しいことをピンポイントに突いて来るのぉ。初めて名前呼びしてくれて嬉しいの。俺は主がとても気に入ったぞ」

女性？からの初めての好意だな。落ちこぼれだから学園では誰も話しかけてくれなかったし。

「ん？待て。主様は歴戦の英雄かなんかじゃないのかの？学園の落ちこぼれ？主様が落ちこぼれだったら多分他の生徒達はゴミじゃの。ゴミ。俺が召喚されたのも久し振りだしそこまで力をもつ人間もおらんはずじゃしの。」

「ん？その歴戦の英雄ってのはどういう根拠からきたんだ？」

「うむ。ここから先は儂の話したいことと内容が被るじゃろ。先に話したいことの本题から話してもよいかの？」

「全然構わないぞ」

「もう。主様ったら本当に優しいのう」

なんだか俺、この使い魔にえらく気に入られてないか？

「さつきも言ったじゃろ。主様を気に入ったと。久し振りにしゃべれた相手じゃしの。儂が召喚されるなんて中々ないしの。久し振りに孤独とおさらばできるのだから、呼び出してくれた人を気に入るに決まっておろう」

「ついでにサタンは何年間孤独だったんだ？」

「ざつと千年位だと思っぞ？主様よ」

お前は千年もの間使い魔として誰の事を待っていたのか・・・

「お前は寂しくなかったのか？この暗闇の中にただ千年もいて」

「寂しいにきまって・・・寂しいに決まっておろう。誰もいない空間に一人でいるのはとても辛かった。主様がこなかったら、狂っていたかもしれんの。もし主様が来んかったら僕は・・・僕は・・・」

数千年の孤独を思い出していたのかサタンは泣いていた。俺は思わずサタンを抱きしめていた。

「サタン。大丈夫だ。俺はここにいる。これからは俺がお前の主だから。もう泣く必要は無いんだよサタン。俺はお前を孤独からも守れるように強くなるから。だから・・・だから・・・大丈夫だから」

「僕はもう孤独・・・じゃない？」

「ああ。孤独じゃない。これからは俺と共にいてくれ。お前が俺の使い魔だ」

「うん・・・うん。ありがとのお。主様よ。思わず感極まって泣いてしまった・・・の。主様が良かったらもう少しこのまま抱きしめていてはくれんかの？主様の温もりは何だか安心するからの」

「サタンが嫌じゃ無ければいくらでも抱きしめていてくれてもかま

わない」

そうして落ちこぼれの生徒と孤独だった使い魔は互いの傷を舐め合う様にしばらく抱き合っていた。

「うむ。あ、ありがとうの。主様よ。慰めてくれて。とっても嬉しかったぞ」

「ああ。あんな月並みな言葉でもサタンの心に届いたなら嬉しいよ」

「ぬ、主はあれじゃな。本当に儂にとってピンポイントに欲しい言葉をかけてくれるの」

「そ、そうか。まあ仲良く出来そうで良かったよ。サタンとはこれから心まで見透かされてしまう仲だしな。これからもよろしくな。サタン」

「うむ。こちらこそよろしく頼むぞ。私の主様よ」

俺たちはお互い少し照れながらも絆を深めた。

「で、主様には話したいことがあるのじゃ。儂が主様のことでとても気になったことをな」

さっきまでとは違い凜として高圧的にもどったサタン。

「ああ、さっきの俺を歴戦の勇者かなんかと勘違いした理由か」

「そうじゃ。そのことで主様に質問がある。伝えたいこともあるの」

「わかった。質問してくれ」

俺はサタンの質問に身構えた。

第十話 悪魔でもあり聖女の様でもある（後書き）

使い魔は戦闘でも重要になってきます。使い魔が気に入らなかつたら申し訳ないです。この使い魔ですが、かなり重要なポジションです。

第十一話 俺の資質（前書き）

メインキャラですよ？サタンは。いいですよね？

第十一話 俺の資質

「では主様よ・・・主様は15才くらいの少年に見えるのじゃが・・・実は何百年かの歳を経ているのかの？」

これがサタンからの質問だった。

「俺は見た目通り15才の少年、ロイだ。だいたい人間はサタンみたいにそんなに永くは生きられないだろう」

「いや、人間でも寿命を延ばす例外はあるのじゃが・・・」

「まあ、そんな寿命関係の事はいまは別にいい。何故俺が何百年の歳を経ていると思ったのかを聞きたい」

「それは主様の気力が人間ではあり得ない量をもっているからじゃよ。気に乱れもなかつ

たし・・・学生って事も真実なのじゃろう。

しかし、本当に驚いたわい。学生で儂以上の気力をもっている人間がいるなんて。やはり

主様も儂と同じいや、それ以上に例外的な存在なのかもしれない」

「今更ながら思ったんだがサタンって何者だ？最初はちよつと大きい妖精なんかかと思っていたんだが・・・気力を計れるましてや喋る使い魔なんて聞いたこともない。本当に何者なんだ？」

「僕はサタン・ホーリーナイト・イエスタデイ。悪魔と聖なるもの名を持つ例外な使い魔じゃ。そのくらいしか自分を語る言葉がないのう」

「そうか・・・よくわからないが心強そうな使い魔で良かったよ。サタンが何者でも関係ない。俺の使い魔ってことで十分だしな」

「ありがとう、主様よ」

そういつてサタンは俺に微笑んだ。

「で、質問は終わったんだよな？サタン？確か質問の他に伝えたいことがあつたんだつたよな？」

「うむ。主様よ。伝えたいことは僕の現実世界での顕現についてじゃ」

「つまり、お前の召喚についてだな。何か条件でもあるのか？」

「条件とは少し違うのじゃが・・・実は僕は
使い魔の中でも召喚するのに、莫大な魔力が

必要なんじゃ。つまり、僕が主様に言いたいことは、僕が現実世界
にいる時はこの姿では

なく、力を抑えた姿ではないと、今の主様の魔力量じゃ難しいんじ
ゃよ」

「つまり、力を抑えた姿じゃないと俺はサタ
ンを召喚出来ない訳か。具体的にはどんな姿になるんだ？」

そういえば使い魔召喚中は魔力と気力を消費し続けるんだよな。ま
あ、お嬢様の炎龍みたいな使い魔が常に側にいたら俺だって嫌だし
な。あれ大きいし。

「黒猫じゃ」

え？猫ですか？サタン様？大きいのは嫌とは思ったが、小さすぎな
のではないですか？

「すまんろう。魔法を極めた僕でも変化出来るのは、黒猫だけなの
じゃよ。まあ主様に魔

力を渡したり、魔法を教えたり、念話でいつでも会話出来るから使
い魔としては十分じゃ

る？何か猫としての姿に不満があるのかの？

そうか！分かったぞ！儂のこの美しい女性と
しての本体の姿が名残惜しいんじゃない！」

ちげえよ。サタン。違っただよ。

「違っのかのう・・・」

口には出していないが心が繋がっているから
俺のソウルボイスがサタンに聞こえてしまっていた。

「じゃ、何が不満なのじゃ？」

いや、人型の使い魔なら前代未聞だろうし、なんか扉がでたことも
なんとか収拾出来るかなって思っていたんだよ。しかし、蓋を開け
てみて実際に出てきた俺の使い魔が猫だったら・・・

「うむ・・・主様は学園では落ちこぼれ扱いだったかの？だとすれ
ばじゃ・・・」

落ちこぼれの名声に拍車がかかるってことさ！

「う・・・うむ。ごめんなさいなのじゃ」

「まあ、仕方ない事か・・・」

小さくてもサタンには妖精にでも変化して欲しかった。俺の魔力が少ないせいとはいえ・・・後の事を考えると辛い。泣きそうだ。お嬢様から呆れられるかも。

タランテイルスっていう世界は完全に実力主義だからなあ。猫って使い魔としての成績はどうなるのかな？気になるところだ。逆に前代未聞だろうしな。

笑い噺にもならない・・・

「まあ元気を出すのじゃ主様！本当の俺は最強の使い魔じゃぞ！」

「わかったよ。サタン。気遣いありがとな」

サタンが使い魔で良かった。心を見られるなんて最初はどんな拷問かとも思っていたが・

・・案外気楽にやれるかもしれない。敬語を使う必要もない初めての相手だしな。本当にお前と巡り会えて良かったよ。サタン。

「儂もじゃぞ。主様」

「んじゃお別れムードにもなってきたし現実世界にもどるか」

「そうじゃの。儂も猫になるとするかの。後
、言っておくが猫となった儂は念話でしか喋れんぞ」

「わかった」

「しばらく。この姿ではお別れじゃな。主様
。また会おうの」

「ああ。またな」

俺たちは離れ離れになるわけでもないのに、お別れをいつていた。次にあの金髪の美しい女に会えるのはいつになることやら・・・

そうしてサタンが光に包まれ、その後には一匹の美しい毛並みの黒猫がいた。

(この姿では初めてじゃの主様。改めてよろしくの)

これが念話か・・・どう返事すればいいんだ？

(心のなかで儂に話したいことを思い浮かべれば良いんじゃないよ。今みたいなの)

なるほどな。わかった。

じゃあここにもう用はないな。

(うむ。そうじゃの)

そうして俺たちはサタンがだした禍々しい扉から現実世界に戻ることにした。

第十一話 俺の資質（後書き）

サタンは強すぎるので条件を作りました。ダメですか？

第十二話 心構え（前書き）

模擬戦、ケイルフラグ回。

第十二話 心構え

学園I

俺はサタンに逆召喚なるものをされた世界から元の学園へともどつていた。

美しい黒猫となったサタンを連れて。

扉の外を見るとクラスメイト達の使い魔召喚はもう全員終わっているようだった。

俺の名前はロイだから、出席番号は後の方だし、サタンの精神世界？に数十分くらい居たから当然みんなの使い魔契約は終わってるか。

だからこそ、扉から出てきた俺たちは注目されていた。

まあ、実質最後になっちゃったしな。使い魔契約。

クラスメイトのみんなが、こちらを信じられないものを見るような目つきで見ているのがとても印象的だ。

きつと俺の使い魔が猫だからだよなあ・・・

そう思ってるなか一人の貴族の少年が俺たちに向かって口火をきつた。ケイルだ。

「あの落ちこぼれの使い魔見てみるよ。みんな。猫だぜ？しかもその辺に居る様な猫だ。使い魔にしては、心もとないとは思わないか？」

その声でクラスメイトのみんなにどつと笑いが起こる。

「やっぱりロイの奴って落ちこぼれだな」

「使い魔と契約出来ないからって野良猫でも拾ってきたんじゃないかねえの？」

ケイルを始まりとして、そんな声がチラホラと聞こえてくる。とても屈辱的だ。お嬢様と数人のクラスメイトが笑っていないだけじゃないか。

(ムカつくのう。こいつ等。焼き殺してしまおうかのぉ)

サタンも切れかけていた。

そんな中リーゼ先生の声が掛かる。

「ほら、お前たち！静かにしろ！今から伝達事項がある！予定表を見ているやつは知っているかもしれないが、明日は模擬戦だ。ルールは今のお前たちの全力で闘うことだ。ダメージが規定量を越える、即闘技場から離脱させる魔法をかけてやるから全力で闘ってくれ。もちろん、模擬戦は実技点に入るぞ。もし、負けても成績は入るからそこは安心してくれ。あと、正面玄関に対戦表を貼っておいた。見ておいてくれ。では、今日は解散とする！各々体を休めておく様に！まあ、使い魔との戦闘訓練ぐらいはしておいた方がいいかもな」

リーゼ先生がそういうと、みんなは俺の事など忘れた様に神妙な顔になった。そして、みんな使い魔を消し、教室に戻り帰り支度を始めた。

無論、俺もだ。サタンを心の中にしまいこみ我先へと正面玄関に向かう。早く明日の対戦

相手が誰か知りたいしな。お嬢様も向かった様だしな。

(主様はお嬢様とやらを随分と気にするのう)

そうサタンから心の中でツッコミが入る。

まあ、シカトだ。今は対戦相手が誰か知りたい。そうして正面玄関に着き俺は対戦表を見る。俺の対戦相手は―

何かと俺を馬鹿にするケイルだった。

俺はその時心から喜んだ。

(何故喜ぶのじゃ？あやつは学園でも中々の実力なんじゃろ？さつき僕もあやつ風の龍を見たが、中々じゃったしの)

ん？何故かって？サタン？それはな……

(うむ……)

お嬢様が相手じゃないからだよ！ふう良かった。例え模擬戦でも俺はお嬢様に指一本傷つけられないだろう。そしたら完封負けだしな。

（お嬢様とやらが随分と大切なようじゃの。主様は）

まあな。それにしてもサタンの念話から不機嫌オーラが漂っているのは、何故だ？

（自分で考えてみたらどうじゃ。主様よ）

教えてくれる気は無いみたいだ。まあ、いいか。それより明日の模擬戦か。ケイルは学園の1年ではトップクラスだし、俺の力が及ぶかは分からない。でも、足掻いてはみるか。今まで学園に通っていない俺ではどの程度太刀打ちできるかは不安ではあるが。

（主様なら大丈夫だと思うぞ。なんせ儂を呼び出したお人だからの）

その自信は何処から来るんだよ・・・

（さあ。知らん）

そうですか・・・

まあ、いい。もう今日は屋敷に帰るか。お嬢様も一人で帰ってしまった様だし。

そうして、俺は明日の模擬戦に備えるために屋敷へ帰る事にした。

第十二話 心構え（後書き）

模擬戦はロイがやらかします。

第十三話 サタンの魔力（前書き）

サタンのポテンシャルがやばいです。

第十三話 サタンの魔力

俺はセンターハート家の中庭で明日の模擬戦の為に修行していた。

今はもう薄暗い夜。少し寒い気もするが、修行をしていると、体を動かして暖をとれるので、あまり気にならない。

明日の模擬戦は使い魔アリ、魔武器アリ、魔法アリ、剣術アリ、その他戦闘に関する事ならなんでもアリの勝負だ。

俺は魔力量の関係でサタンを呼び出すことはできないが（黒猫のサタンなら出せるがあまり役には立たないらしい）ケイルは使い魔の風龍を出せるので、明日の模擬戦はかなりヤバイかもしれない。だが、対策はある。

サタンはというより使い魔の全ては主人が呼び出していない時は主人の心の中で主人が使役してくれるのを待っているらしい。

サタン（黒猫サタン）は俺の心の中にいる時に真価を發揮する。

その真価が俺の切り札だ。対策でもある。その真価とは・・・サタンに膨大な魔力を貸して貰うことだ。サタンと俺は心と心が繋がっている。まあ、他の主人と使い魔もそうなんだが。

その心の繋がりを利用して、そこから魔力を貸して貰う事ができる。

膨大な魔力量を持つサタンの主人となれた俺にしか出来ない荒技だ。

サタンを召喚する事は出来ないが、この方法なら風龍にも立ち向かえると思う。

ついでにこの魔力の貸し借りを思いついたのはサタンだ。戦闘では役には立たないからこの方法を提案したらしい。

だから、俺は魔力の受け渡しの練習をしていた。

「サタン頼む！」

(うむ。では主様に魔力の一部を)

その瞬間俺に青い魔力のオーラが纏わりつく。

凄まじい力を感じる。これでサタンの魔力の一部なのだから、サタンは凄い使い魔だと思いきらされる。体が軽いき、今この溢れる魔力なら俺が修行して覚えた、初級魔法なんて無限に唱えられる気がする。

凄い切り札を考えてくれたよ。サタン。

(うむ そつじゃろ そつじゃろ)

ああ、ただな・・・

これめちゃくちゃ疲れる・・・サタンとの心の繋がりを利用した荒技だしな。他人の魔力が無理やり流れてきてる気もするし、何よりこの膨大な魔力を受け止めて自分の力に変換しなければならぬのが一番大変だ。

これは、本当に切り札の様だ。もうスタミナが切れる。これでは、今日はもう修行は無理か・・・

まだまだ修行が足りないな・・・

(うむ。まあ荒技だし仕方ないじゃろ。今日はもうゆっくりに休むとよい)

そういつて俺に魔力の供給を辞めるサタン。
その瞬間俺に纏われていた青い魔力のオーラが消える。

サタンの言つとおり今日は休むか。まだ修行が足りない気もするが・
・

(明日は模擬戦なのじゃろ？なら、体を休めるのも修行の内じゃよ。
主様よ)

ああ。そうだな。

それにしても俺の力でケイルに勝てるのか分からない。まあ、俺に
は切り札が二つある。

「不可視の斬撃」と魔力の貸し借りだ。それに俺の気力はサタン曰
く、規格外らしいし、いざとなつたらその気力を気仙花に載せて斬
撃を放つ方法もある。

まあ、負けるにしても少なくとも足掻けるだろう。

本音を言えば、センターハート家の従者として負けたくないが。

そんな事を思いロイは自室に戻り、睡眠をとった。

一方アメリカは―

アメリカはただ自室で心の中にいる炎龍と心を通わせていた。

まあ、アメリカの実力は学園の1年ではトップクラスなので、ロイみたいに修行する必要はないが。

「まあ、炎龍は喋れませんし、こんなところですね」

そう言い炎龍との心のリンクを切るアメリカ。

リンクを切った瞬間凄まじい力を中庭から感じた。

何ですの・・・この力は・・・

まるで金縛りにあつたみたいに動けませんわ。中庭を確認したいが、出来そうもありませんね。中庭といえば、あの荷物持ちも修行しているし、どうなっていますの？

まさか侵入者―父様も仕事でいないし、このタイミングを狙われたのかしら―

そんな思考がアメリカの脳裏をかすめる。しかし、それは杞憂に終わる。

直ぐに凄まじい力が消え失せたからだ。急いで自室の窓からアメリカは中庭を確認する。

そこにはただ疲れ果てたロイが居るだけだった。

（あの荷物持ちだけしか居ない？まさかあの荷物持ちがさっきの力を？そんな事はありませんわ・・・しかし、あの魔武器のポテンシャルは侮れなかったし・・・いやでも、使い魔は猫だったし・・・しかし、侵入者でも無さそうだし・・・あぁっもう分かりませんわ！）

様々な思考が浮かぶアメリカ。

（考えてみればあの荷物持ちはよく分かりませんわ・・・魔武器は一級品ですが、使い魔は多分最底辺。リーゼ先生もあの荷物持ちの

事を疑わしそうな瞳で見ているしやいましたし・・・結局、あの荷物持ちはよく分かりません)

(だけど・・・あの力は一体・・・)

ロイヤル謎の力を気にしながらも、眠りに耽るアメリカだった。

第十三話 サタンの魔力（後書き）

模擬戦でストックが切れます・・・不安です。

第十四話 透き通る心（前書き）

短めです。

第十四話 透き通る心

今日は模擬戦か・・・学校へ向かうとするか。

今日は闘技場で模擬戦なので、何時もより早く登校しなければなら
ない。

屋敷の玄関を見てみると、もう学園へ向かう準備が出来ているお嬢
様が立っていた。

「荷物持ち早く登校しますわよ」

「遅れてすみません。行きましょう」

いつもの様にお嬢様の鞆を持つ。今日は授業がないから鞆が軽い。
この鞆の軽さが俺に模擬戦を意識させる。

少し緊張しているな・・・俺。

登校途中、後ろからお嬢様の姿を見る。まるで太陽の様に美しいと
俺は思う。

お嬢様のような実力者は緊張も無いのだろうか？なら羨ましいかもな。

(主様よ。一つ進言しておくのじゃ)

なんだサタン？

(緊張とは大事なものじゃ。緊張していないものは少しの油断で死ぬ事もあるじゃろう。儂の持論じゃが、常に緊張している者が真の強者としての形だと思ふのじゃ。だから主様。その緊張は忘れない方が良くとおもふの)

ありがとうサタン。要は油断した者が負けるってことか。とても参考になったよ。

(うむ。儂は長く時を生きてきたからの。無駄なうんちくなど数千はあるから、礼など構わんぞ主様よ)

それでもありがとう。サタン。お前のおかげで、緊張がなくなってきたよ。

(それは、良かったのじゃ)

念話でそんな事を話しつつ、俺は学園に向かった。そして、学園に着いた。

荷物をお嬢様に預けて、俺は学園の闘技場へ向かう。お嬢様も御友達と合流して闘技場へ行く様だ。

俺は闘技場の扉前に立つ。とても重々しい扉に手をかけて、いよいよ闘技場の中へと入る。

もう緊張はあまりない。しかし、ある程度緊張感を残しておく。

戦闘前の心境には良い感じだと思う。

俺は妙に落ち着いていた心境でケイルとの模擬戦を待っていた。

第十四話 透き通る心（後書き）

もうすぐケイルとの模擬戦です。

第十五話 弱点（前書き）

ケイル戦です。

第十五話 弱点

お嬢様の模擬戦は語るまでも無く、お嬢様の勝利だった。対戦相手も不憫だ。

なんせ、中級魔法を連発されたのだから。高等部レベルだと中級魔法はまだ、数回くらいしか打てないはずなんだけど・・・

マジでお嬢様凄い！

と思う。鼻肩目無しに。

あれだけのレベルになるまで相当苦勞なさった筈だ。もしかしたら、もう上級魔法すら行使できてしまつかもな。お嬢様なら。

そんな事を思わせる試合内容だった。

闘技場の中から規定量のダメージを超えて、医務室へ転移される奴や降参する奴や勝って素直に喜ぶ奴。

多種多様だ。

だいたいの模擬戦は魔武器での初級魔法の撃ち合いや使い魔召喚での使い魔の使役が戦闘の中身の様だ。

こう他人の模擬戦を見てみると、今の俺でも初級魔法くらいは十全に行使できているから俺って落ちこぼれじゃなくね？

今まで学園へ行つてなかったからといって、落ちこぼれ扱いというのは早計だと思う。

初級魔法でも行使して取り敢えずは普通にみんなに認めてもらいたい。

まあ、ケイルとの模擬戦は全力を出す。

落ちこぼれの名誉挽回の為にもな。

もうすぐ、俺の模擬戦の番か。

とりとめの無いことを考えて時間を無駄にした・・・

さて、スタジアムに上がるかね。

(共に行こうぞ。 主様よ)

おう！サタン！

闘技場のスタジアム！

どうやら審判や審査員がスタジアムの周りを囲んでいる。

審判は担任のリーゼ先生だった。

リーゼ先生に規定量のダメージを越えたら医務室へ転移される魔法をかけられる。

横にいるケイルにもだ。

いよいよ、試合開始ってやつか。争いごとはあまり好きじゃないが・

本気でいく！

「では両者所定の位置へ」

リーゼ先生から声がかかる。

俺はスタジアムの所定の位置へ立ち、向かいのケイルへ視線を向ける。

「落ちこぼれが相手のようだなあ。ワンサイドゲームにはしないでくれよ？」

「ケイル様。こちらも今は学生です。だから、貴族の貴方でも本気で行かせていただきます！」

「ほお。言っじゃねえか。なら落ちこぼれの本気とやら貰おうか！」

「ではロイ対ケイル。模擬戦を行う。始め！」

リーゼ先生の始まりの合図で俺とケイルの模擬戦が始まった。

「じゃあセンターハートの従者さんよお。こっちから行かせて貰うぜ」

そういつてケイルは魔法の行使に入る。しかし、俺もケイルに魔法を行使させまいと距離を詰める。

ケイルの魔力の感じからして、放たれるのは初級魔法だ。しかし、直撃はヤバイ。急いで間合いに入る。だが・・・

「少し遅かったなあ。落ちこぼれ。魔力の充填が終わっちゃった。これで試合終了かもな？いくぜウインド・カッター！」

ほぼゼロ距離でこの風の小刃は避けられないか・・・

ならこちらのカードを一つ切らせてもらおう！

その瞬間ケイルの疾風でスタジアムに砂煙が舞う。

「もう終わりかぁ？落ちこぼれ。まあ、俺の得意な風の魔法をくらったんだ。落ちこぼれには耐えられないよなあ」

ケイルは笑う。

「何をおっしゃっているのですか？ケイル様？俺は無傷ですよ？」

「何！」

ケイルは魔力の残滓がまだ残っている俺の方を見る。

「そうか・・・分かったぜえ。少し驚いたが、その魔武器だな？」

「そうですよ」

そういつて俺はケイルに魔武器を見せる。美しき剣、気仙花だ。俺が無傷だったのも気仙花をだして気力を込めた斬撃でケイルの疾風から逃れたからだ。

「俺の風を凌いだんだ。それなりの魔武器のようだなあ。落ちこぼれにしてはよくやったと思うぜえ。こっちも魔武器を見せてやるよ」

そういつてケイルが見せたのは銀の杖。

「この杖の名は風翔^{ふうしょう}。こいつで魔法を行使すると風の魔法の力が上がるんだ」

「俺に魔武器の能力を教えるなんて余裕ですね？ケイル様？」

「フン。落ちこぼれの癖に俺の魔法に耐えた褒美とでも思っておけよ？話し合いはここまでだ。第二ラウンドと行くぜえ！」

そういつてケイルは魔法を行使する。

「ウインド・カッター！」

くそっ！さっきよりも風が速いし、威力も高い。

（落ち着くのじゃ。主様よ。儂がある。魔法に対しては千人力じゃぞ）

そうか。サタンがいたな。助かるよ。

（今から主様にあの魔法の弱点の場所を教える。そこにむかって主様も初級魔法を行使してくれんかの？）

わかった！

俺はウインド・カッターに向けて初級魔法を行使する。

「ファイヤ・アロー」

よし出来た！ラザイン様との修行の賜物だ！

俺はサタンに言われた通りにウインド・カッターに向けてファイヤ・アローを放つ。

「おいおい。落ちこぼれ君。そんなチャチな魔法で魔武器で強化された俺の魔法を貫けると思ってたのか？」

「あと少しで分かりますよ」

ファイヤ・アローとウィンド・カッターが風と火花を散らしてぶつかり合う。だが、僅かにロイのファイヤ・アローがケイルの魔法を押し始める。

「はあ？なんでだ？俺の魔法がただの初級魔法に負けているだと！
どっとうっ手品を使った？」

「別に俺の魔武器の能力ではないですよ？ただ俺は魔法を放つ時に工夫したんです」

「工夫だと？」

「貴方の魔法の弱点部位を狙ったんですよ」

「あの短時間でそんな事できる訳がねえだろ！」

「出来たからここに立っているんですよ」

「ああ・・・分かった。まあ、俺の攻撃を貫抜いたのは事実だしな。少しは認めてやるぜ。お前は中々倒しがいがあるそうだ！」

そういつて、風の魔法を連発いや、乱発し始めるケイル。初級魔法のようだ。

「これならどうだ？落ちこぼれ？この早さの魔法はさすがにさばききれねえだろ？」

確かに今からじゃ魔法を行使しても間に合わない。かなり早い速度でケイルの魔法が向かって来る。

この状況を打破するには……今の俺ではあれしか思いつかない。

(ほう。出すのかの？切り札の一つを)

ああ……それしかないだろ！

俺は気仙花に気力と魔力を込める。そして放つのは……

「不可視の斬撃！」

俺は切り札の遠隔攻撃を出した。特別準備室の壁を簡単に突き破ったこれなら……

ケイルの魔法も一掃出来る筈だ！

視えない斬撃と風がぶつかり合う。

「おい。落ちこぼれ。何しやがった？視えねえ何かに俺の魔法が……ぐっ！！」

「馬鹿な……俺の風の魔法を全て一掃しただけで無く、俺にまで頬にかすり傷を与えろとはな……本当に何しやがった！！」

「俺は貴方みたいに余裕じゃ無いんでね。種明かしする気は無いですよー！」

そういつて、すぐケイルの間合いに入る。

「敬語を使ってもばれてんだよ。おめえのその負けず嫌いなオーラ

はよお。良い加減その口調辞めたらどうだ？虫唾が走るんだよ！」

「そういう訳にはいきませんよ。ケイル様。センターハート家としてもダメです」

そんな事を言いながら、激しく剣舞をぶつけ合う俺たち。剣術は互角だが、ケイルの剣は咄嗟に出した練習用の剣。気仙花が相手では分が悪いようだ。

「剣術も中々やるじゃねえか？落ちこぼれ？」

「俺は武器に恵まれたようですね！」

そういつて俺はケイルの剣を弾き飛ばす。

「いいぜえ。認めてやる。お前は中々強い。学園の1年上位には入る強さだ。だから、少し手の内を出させてもらっぜ！」

今はケイルに認めてもらった嬉しさよりも、ケイルから溢れる魔力の方が気になっていた。

サタン・・・何がきそうだ？

（この魔力量では恐らく上級魔法は出せん筈じゃ。恐らく中級魔法を放つ気じゃ。しかし、あの銀の杖が魔法の威力を引き上げるから威力は上級クラスの魔法かもしれんのか）

上級魔法並の中級魔法が飛んでくるって訳か・・・

俺は中級魔法使えないし・・・いや、使えないというより、中級魔法を試したことがない。

（なら試してみるのか？中級魔法の名を儂が教えるから行使してみるのか？）

いや、魔法って練習しないと使えませんって・・・慣れた魔法じゃないと使えないからそれじゃ賭けだろ？

（また、不可視の斬撃を使うのかの？確かにあれなら打ち勝つことは出来るじやろうが・・・魔力、気力ともに消費が激しいから得策ではないのか）

そうだよなあ・・・まだケイルは風龍も召喚してないからなあ。不

可視の斬撃は温存しておきたい。

なら・・・

中級魔法とやらに手を出してみるか！

初見だが。

（主様の才能を信じるのじゃ！）

俺はそう決意し目の前の魔力に立ち向かう。

第十五話 弱点（後書き）

戦闘描写が難しいです。

第十六話 俺が望むのは夜

俺が今から試そうとしているのは、中級魔法のぶつけ合いだ。真っ向勝負だ。

これは賭けに近い。俺は中級魔法なんて唱えたこともないからな。まあ、初級魔法なら魔法名をいうだけで唱えられたが。

サタン頼む。俺に中級魔法の名を教えてくれ。俺はその魔法に賭ける。

（大丈夫じゃ。主様ならこの魔法を行使できる。いまから俺が主様に託す魔法は中級魔法と言われているなかでも俺が一番信頼していた魔法。それに、俺も主様の中から魔法のコントロールを手伝ってみるからもう。賭けになんてさせん。今から託す魔法の名は・・・

（ダーク・ナイト）

ダーク・ナイト・・・

わかった。俺もこの魔法を実現させてみせる。

協力頼むな。サタン。

(うむ。では、少しだけ儂から魔力を主様に渡すぞ)

「ぐっ！」

少し体が熱い。しかも焼けるように。

(これで魔法の成功率も上がるはずじゃ。体が少しきつい筈じゃが中庭の時ほどじゃなからう?)

ああ・・・確かにあの時ほどの疲労感はない。

(うむ。疲労感はあるじやろうが我慢してくれ。ダーク・ナイトは中級魔法の中でもかなり魔力の消費量が多いからう・・・)

ああ。わかってる。俺の為だ。我慢しよう。お前には本当に苦勞をかけるなサタン。

(お安い御用じゃ。儂は主様を全力で守るときめたからのう)

ありがとう。サタン・・・

じゃ行くぞ！

(うむ！)

「行くぜえ！落ちこぼれ！俺の中級魔法をくらえ！ウィンド・ストーム！」

ケイルが魔法を行使した瞬間凄まじい暴風がロイに襲いかかる。

これはヤバイな・・・人生で最大クラスの危機かもしれん。ダーク・ナイトとやらが成功しないと本当に不味いな。

俺はそう思いながら魔力を慎重に練る。

「どうしたあ？ビビったか？流石に中級魔法にまでは対応できないようだな？」

ケイルが何か言ってるが、無視だ。ただ魔力を慎重に練る。

そして、俺は唱える。俺の誇り高き使い魔が信頼していた魔法を。

成功するかはわからない。

暴発するかもしれない。

これは、賭けだ。

それでも、負けたくないから。強くなりたいから。こんな風くらい
跳ね除けるようになりたいから。

だから・・・

俺は唱える。闇の夜を名に持つ魔法を。

「ダーク・ナイト」

ロイがそう唱えた瞬間、圧倒的な暗闇が闘技場を支配した。

「なんだ？なんなんだあ？この魔法は？こんな広範囲に及ぶ魔法・
・初級魔法には無い筈・・まさか中級魔法を行使したのか？お前が？」

「さあ？どつでしようか？」

「フン。いけすかない野郎だな。まあいい、俺の魔法は負けられないかな。お前のよく分からん魔法など吹き飛ばしてやるよ」

そう・・・よくわからない。魔法は発動している筈なのに、明確な効果が出ていない。

まあ、暗くなっただが。攻撃ではない。

その間にもケイルの暴風が近づいてくる。しかし、俺の魔法は何もしてくれそうにない。

まさか失敗した？俺ごときが中級魔法なんて

無理だったのか？

ここで負けるのか？俺は・・・

（安心せい。魔法は発動しておる。取り敢えずあの暴風は余裕で防げるのう。流石主様じや。中級魔法を一発で成功させるなんて本当に例外じゃ）

成功している・・・？

サタンこの魔法の効果は・・・何だ？

（直にわかるぞ。主様）

サタンと念話している間にもケイルの暴風がもうもう目の前にー

その瞬間、闇が揺れた。

「なんだあ？空間が揺れている？何をした・・・！」

ケイルは信じられないものを見たように俺を見る。

暴風が俺のほぼゼロ距離で闇に飲まれ消えかかっているからだ。

サタン・・・もういつかい聞く。この魔法はなんだ？

（この魔法は魔法を拒絶する魔法。行使者に魔法が当たった場合それを自動的に消す魔法。しかも、この魔法は特別での。行使した後もしばらくはそこに留まり続ける。しかも、

魔力を込めた分だけ防御できる値も変わる。最上級魔法すら防げる可能性をもった魔法じゃ。ま、持続性がある絶対魔法防御というところかの。力を全力で使える時の儂だったらほとんどの魔法をこの魔法で潰せるの）

すげえ。そんな魔法を俺は唱えたのか。感慨深い。

「俺の魔法が消えた・・・何故だ！くそ！だが、お前は隙だらけだ！落ちこぼれ！いくぞウインド・カッター！」

初級魔法。そんな魔法は今の俺には効かない。

予想通りケイルの風は闇の前に消え失せる。

「なぜだ？まだ効果が終わっていないねえのか？何なんだ？くそ！」

そういつて魔法を連発するケイル。

しかし、その全てが闇に消えてゆく。

本当に頼もしいなこの魔法は。

「はあはあ・・・わかった。今のお前には俺の魔法は通用しねえみたいだ。おめえの魔法は確かにすげえ。だがな・・・」

「ここは・・・俺が勝つぜ！」

そういつてケイルは風龍を召喚する。

「これが、俺の奥の手・・・風龍召喚だ」

「確かに凄い風ですね・・・」

「まさかお前に風龍を召喚するとは思わなかったぜ。褒めてやる。だがこれが出た以上お前の負けだ」

「なら足掻かせて貰います。ケイル様」

「ぬかせ！」

俺とケイルの模擬戦が新たな展開を迎えた。

一方観客席では―

ケイルとロイの高レベルな模擬戦にアメリカは驚いていた。中でも一番驚いたのは……

このスタジアム一帯を暗黒に染めた魔法だ。

（あんな魔法……見たことも聞いたこともないですわ……やはり、あの荷物持ち。何か特別なのかしら……？）

ロイの闘いに困惑しているのは、観客席にいる全員だ。

先生達ですら、驚いていた。

なかでもロイが中級魔法を唱えた時にそれが一番強まった。

魔法はこの世界でのステータス。それも当然だ。

ロイは自分の評価が観客席でよくわからなくなっていることをまだ知らない。

第十七話 負けはならない(前書き)

模擬戦終了。ストックも終了かな？

第十七話 負けはிரらない

俺は風龍に向かい合っている。

なんて威圧感だ・・・

これが、ケイルの切り札か・・・

お互い使い魔には恵まれたな。

「ギャオー！！」

「なっ！」

風龍が吠えただけで凄まじい暴風が発生した。危うく、吹き飛ばされるどころだったが、ダーク・ナイトの防御のお陰で何事もなかった様に俺は立っている事が出来る。

どうやら、風龍の風も魔法に分類される様だ。今の風が魔法じゃ無かったら終わってたな。俺。

流石風龍って事か。

(臆するな。主様よ。主様はまだ気力も魔力も十二分に残っておる筈じゃ。主様ならあの風龍を超えられる筈じゃ。儂は信じておる)

お前にはいつも励まされるな。

(お互い様じゃろ?)

ああ・・・そうだな。俺等は一蓮托生だ。

(うむ。その通りじゃ。共にあの龍を越えようぞ!)

おう!

「風龍!お前のブレスをあいつにくらわせる!」

「ギャー!!!」

ケイルの命令で風龍がブレスの準備に入る。

使い魔契約から間もないのに、もう使い魔に命令出来るなんて、ケ

イルは凄いと思う。

俺なんて魔武器と使い魔が居なければタダの落ちこぼれだ。

素直に感心するよ。ケイルには。

きつと貴族として様々な努力をしてきたのだろう。

だが、俺も修行をしてきた。ケイルに負ける理由はない。努力の年月の違いはあるだろう。だが、負ける理由になっではないんだ！

俺は気仙花に気力と魔力を込める。多分、風龍のブレスを防げるのは不可視の斬撃だけだ。

俺の全てを賭けるつもりでこの技を放とう。
それが俺に出来る最善。

「いくぞ！風龍！ブレスだ！」

「ギャーーーーー！」

ケイルの命令と共に、放たれるブレス。ケイルのさっきの暴風よりも激しい風。きっとダーク・ナイトの防御では防げない。

俺もそれに対抗すべく、視えない斬撃を放つ。

「風龍のブレスが何かとぶつかり合っている？俺の初級魔法を全て打ち消した技か！」

その通りだ。ケイル。

後は、どちらの攻撃が打ち勝つか・・・

それに全てがかかっている。頼む・・・打ち勝ってくれ・・・

だが、俺の思いは虚しく風龍のブレスが視えない斬撃を通過し俺に迫る。

「ぐあああー！」

俺はみつともなく叫ぶ。ブレスが直撃してしまったからだ。不可視の斬撃でブレスの威力を弱くして、ダーク・ナイトの防御まで発動

しているのにこの威力か・・・

凄まじい痛みだ。ダーク・ナイトの防御が無ければ一瞬で医務室送りだったな。

俺はここで負けてしまうのか？

そんな思いが俺の胸をまたよぎる。

俺は負けないとあの日誓った筈なのに・・・

負けたくないんじゃないんだ・・・負けられないんだ・・・

俺は捨て子だ。きつと弱かったから捨てられたのだろう。推測にすぎないが。

俺は弱いという理由だけで人並みの幸せを失ってきた気がする。唯一の幸せはセンターハート家に拾われたことだった。

俺はいつも弱い。弱いから全てが俺の手から滑り落ちる。今の居場所だけはなんとしても守りたいというのに……

弱かったらまた……捨てられる……

また一人になる……それだけは嫌だ。嫌なんだ……

センターハート家の人は優しい。捨てられることは無いと思う。

だけど俺のせいで少しでもセンターハートの名に傷が付いたら……

この世界は弱いものにはどこまでも非情だ。弱いものは全て切り捨てられる。タランテイルスはそういう風に出て来ている。

だから、辛すぎる生活のせいで記憶を失った俺は誓った。

俺は強くなる……最強になる。もう、悲しむことがないように。弱い俺を支えてくれた人を守る為に……そして、一人にならない為に……

(主様の思いは伝わった。儂が主様の全ての望みを叶えよう。荒技じゃが耐えてくれの・・・)

そして、俺に莫大な魔力が纏わり付く。

「なんだ・・・なんだよこの魔力は・・・俺の体が金縛りにあつたみてえに動かねえ。何なんだよこの魔力は！」

ケイルは怯えている。風龍もその場から動けない。

「くそ！くそ！風龍！あいつにもう一度プレスだ！」

「ギャオー！！！」

風龍がプレスを出す。

俺は莫大な魔力と度重なる疲労のせいで既に意識朦朧だ。

そんな俺が咄嗟に風龍のプレスに対抗しようとして出したのは・・・

「俺は負けられないから……だから……ファイヤ・アロー」

初級魔法だ。だが……サタンから借りた魔力の全てを込めた。

そのお陰で、火の矢は火のフェニックスに姿を変える。

フェニックスとブレスがぶつかり合う。数秒
拮抗したが、フェニックスがブレスを軽々突き破る。

火のフェニックスがケイルと風龍を包む。

「ぐわわ!!」

「ギャオー!!」

二つの叫び声が聞こえる。俺は勝ったのか？目の前にケイルはいない。医務室に送られたのか……？

ダメだ。意識が朦朧とする。俺が勝ったのかはよく分からない。

だが……もう限界だ。

くそ・・・くそ！

勝ったのかわからない内に気絶かよ・・・

ああもうダメだ。

最後にサタンが何か言っている気がしたが、俺は気絶した。

第十七話 負けは知らない（後書き）

ロイの強くなりた理由は単純に一人になりたくないという気持ち
が強いです。幼い頃の大きな悲しみが孤独感を生んでいます。

第十八話 力への疑惑（前書き）

学園が動く・・・

第十八話 力への疑惑

ああ・・・よく寝た気がする。

俺は確かケイルと闘って・・・

どうなった？

（気絶したんじゃないよ。主様よ）

ああ・・・そうだったな。

俺は負けたのか・・・

（いや、主様は勝ったぞ。先生とやらや審査員やらが主様の勝利という形で模擬戦を終了させた様じゃ。まあ、当然じゃ。俺の魔力で丸焼きにしてやったからの）

俺が勝った・・・？丸焼き・・・？

やばいな。最後の方の試合内容が完全に頭から飛んでいる。

(それくらい疲労が溜まっておったのじゃろ。あの荒技も使ったしの。それに従者として・・・だったかの？そのストレスとかもあつたじゃろうし。それにしてもあの時の主様は凄い気迫じゃつたのう。先生とやらや生徒とやらが主様の魔力と気力に気圧されておつたぞ。いや、愉快じゃつた)

そうなのか・・・？思い出せない・・・

まあ、勝つたのならいい。どんなに不恰好な勝利でも俺は受け入れよう。

でも、少し安心したよ。模擬戦という問題も終わったしな。

ゴタゴタはあんまり好きじゃないしな。

「ふわあゝ。やばいな。また、眠くなってきた。どうやら、医務室に居るようだし寝ててもいいのかな？」

疑問形だが、俺は既に寝る態勢に入っている。

「あら。起きてたの？全身切り傷だらけだったのに、回復が早いわね」

・・・医務室の先生か？

「ああ、先生ですか。俺はもう帰れるんですか？」

寝たいとは思いますが、もう日も暮れている。先生に許可を取るのが面倒だから、寝ようとしたが、先生がここにいるんだ。さっさと帰る許可を貰って屋敷に帰りたい。お嬢様も、もう帰ってしまっただろうし。

荷物もてなかったな・・・

荷物持ち失格だ・・・

センターハート家には迷惑ばかりかけているのに・・・

お嬢様の役にちっとも立ててない。

はあ・・・

とりあえず帰りたい。早く帰る許可をくれよ。名も知らない医務室

の女医よ。

「実はあなたの事を学園長が呼んでいるのよねえ。怪我人には安静にして、欲しいのだけど・・・学園長があなたが起き次第学園長室に連れてくるようにですって。だから、ごめんなさい。学園長室に行って頂戴」

学園長？俺が何かしたか？

(わからんわ。何で呼ばれたんじゃろ?)

サタンにも見当が付かないか。

学園長室か・・・何か面倒だ。

まあ行くか。今日の模擬戦の話かな？

分かんが。

学園長室ー

入った。学園長に入った。大理石の豪華そうなつくりだ。装飾もたくさんされている。

学園長は確か・・・初老の女性だったかな？

「貴方がロイ・カーレス君ですね？模擬戦は拝見させていただきました」

「ありがとうございます。で、話の内容とは何ですか？」

この人、俺が相手でも敬語なんだ・・・学園長なのに。まあリゼ先生もそんなもんか。

「話の内容はですね・・・模擬戦のことですよ」

ああ、やっぱりか。でも、何故だ？

「何かしてしまったのでしょうか？すいません。貴族の規則には疎いもので」

「いえいえ。そういう事ではないんですよ。貴方の模擬戦で無作法はなかったですよ。ただ・・・あの闇の魔法はなんですか？」

学園長から凄まじい量の魔力が俺に迫る。

「うっ！」

俺は吹き飛ばされた。

「私は永い時を生きてきました。魔法も最上級やあらゆるところで知っています。ですが、あの魔法は何なのですか？あれは私も知らない未知の魔法ですよ？ただの学生には行使できません。正直怪しすぎる。貴方の経歴もよく分かりませんし。場合によっては私が貴方を・・・それがギルドや軍に追放しないといけません。一体貴方は何者なのですか？」

おいおい。サタン。なんて魔法を教えるんだ。学園長も知らない魔法なんて・・・

(それはのう・・・ダーク・ナイトは僕のオリジナルだから。このババアが知らないのも当然じゃ。それにしてもこのババアむかつくの。主様に魔力を向けるなど・・・この恥知らずが！)

その瞬間。俺から凄まじい量の魔力が纏わり付いた。

おいおい。サタン。なにしてんの？勝手に魔力を渡さないでくれるか？

「な・・・やはりこの魔力の量・・・学生の範疇を超えている・・・もしかして総量は私の私以上か・・・？」

学園長が結構苦しそうだ。サタン、魔力の放出を辞めてくれ。

（何を言ってる。このババアに主様は殺されかけたのじゃ。これくらいは当然じゃ）

それは、俺という不特定不安分子から学園を守るためだろ。仕方ないと思うぞ。というか、このままじゃ話しあいにならないしな。真面目に魔力を止めてくれ。

（そこまでいうなら・・・仕方ないの。ただ、主様に危機が再び迫ったら、俺も考えがあるぞ）

わかったよ。サタン。

そして俺から青いオーラが消える。

「学園長。俺は学園に危害を及ぼすつもりはありません。どうか信じてください」

（主様よ。頭を下げる必要はなかるう？）

うるさい。サタン。この場面に俺の学園生活がかかっているんだ。センターハート家にも迷惑かけられないし。

「どうやら、攻撃の意思はないようですね。分かりました。私も魔力を解きましょう」

「ありがとうございます」

「では、再度問います。貴方は何者ですか？明確な答えをお願いします。ついでに、学生やセンターハート家の従者という答えは受け付けません。ただの学生や従者があんな魔力をもっている訳がないのですから」

俺が何者か？そんなの・・・俺が知りたいな。

俺は何者なんだ？

センターハート家の従者？

ロイ・カーレス？

いや、これらの要素は俺が俺である証明にはなっていない・・・

名前にいたっては、自分で付けたしな。

振り返ってみると笑えるな。15年も無駄に生きてきたのに俺という存在を証明するものがなにも一つ無いなんて。

本当に笑える。

本当に・・・笑える・・・

俺は・・・

まあ、俺は自分が何者かも分からない。なら解答は一つしかないな。

「俺が何者か？ですよね？残念ですが、分からないのです。記憶が無いもので」

「その解答では私は貴方をー」

「話しを続けさせてください。俺は一つだけ。本当に一つだけ。俺は信じているものがあります」

「信じているもの？ですか？」

「はい。それはセンターハート家です。俺はあの家だけは絶対に裏切らない。俺はあの人に救われましたから。この学園にはセンターハート家のお嬢様がおられます。私はセンターハート家の縁者が学園にいる限り学園に危害は及ぼしませんよ。だから・・・どうか・・・俺を信じてください」

彼は悲しそうにだけど強く私のことを見る。懇願するように。

・・・そんな目をされたら、信じるしかないじゃないですか。

「分かりました。貴方の事を信じましょう。先ほどまでの無礼を許

して下され」

「ありがとうございます……」

「今日は長々とすみませんでしたね。ロイ君。今日はもう帰ったほうがよろしいでしょう」

「はい。分かりました。では。」

俺は学園長室から出る。

良かったよ。学園長と敵対しなくて。本当に良かった……

(うむ。そっじゃの)

ああ……

疲れた。

サタンの力の扱い方も考えないといけないのか？

ややこしいな。

とりあえずは帰るか。

そうして、俺は屋敷に向かう。

一方学園長は―

ロイ・カーレス君。深い悲しみをもっている少年。

「彼が学園に危害を加えるような人格ではないようですし、安心しました」

彼が学園に危害を加えないなら、私は彼を精一杯サポートしますか。

彼は平民ですし、いろいろ苦勞もあるでしょう。

誰かが、守らなければ。それが教育者としての務めだ。

（いろいろ苦勞が待っているかもしれませんが、頑張ってくださいね。ロイ君。）

一人そんな事を思う学園長であった。

第十八話 力への疑惑（後書き）

学園長がやらかしました。

第十九話 未だ未知数（前書き）

学園長に殺されかけるとは・・・ロイに同情。彼って不幸ですね。

第十九話 未だ未知数

俺は今屋敷にいる。従者としての雑務を終えいつも通り修行。

最強に近づけるのはとても嬉しい。そんな充実感があるから修行はやめられないな。

(その志しがあれば主様なら人類最強などすぐじゃろうな)

そんなことはないと思うんだが。サタンは人類舐めすぎだ。まあ、悪い気はしないがな。

(僕は人間を舐めてなどおらぬよ。ただの主様のような人を見ているとつい違和感を感じてしまうのじゃよ)

違和感？

(人間とはここまでの存在だったのかと。主様を見ていると主様以外の人間はゴミにしか見えんの。正直主様と他の人間ではそのくらいの差があるの。まあ、僕は人間じゃないから人間の価値観とは違うかもしれないが)

俺を褒めているようだが、俺はそこまで素晴らしい人間じゃないぞ？

俺より性格がいいやつなんてたくさんいるし、強いやつもたくさんいる。

俺なんかまだまだだ。

（我が主様よ。そういうことではないのじゃよ。強さとか明るさとかそんなものでは俺は人を褒めん。評価にすら入れん）

じゃお前の人間の価値観はなんだ？気仙花で素振りをしながら尋ねる。

（意思の強さじゃよ。どんな困難でも立ち向かう勇氣。それが俺の人間評価の価値観じゃ）

俺は意思の強さが多いってことか？

（多いどころじゃないのう。俺よりも上じゃ。おそらく世界最高の意思の強さじゃよ）

どう反応すればいいかわかんないな。まあ、俺の気力が多いのもそ

こに関係するのかな？

(恐らくそうじゃろう。最初は本当に驚いたの。こんな気力をもつ人が少年とは・・・みたいな感じで驚いたの)

サタン。褒めてくれるのは凄いいんだが、修行に集中するからしばらくは話しかけないでくれるか？

(うむ。分かったの)

俺はその日剣術を修行していた。様々な剣術がセンターハート家の指南書には書いてあったが、俺にはどうもしっくりこない。

自分だけの剣術を創ることも検討中だ。まだ型がない無骨な剣術だが何か掴めた気がする。

それだけでも収穫だな。

まあ、剣術に関してはおいおい考えるか。

(修行もひと段落ついたようじゃの。主様。唐突で悪いが、恐らく主様の方に向かってくる足音がする)

おお。サタンか。

足音？誰だ？使用人仲間か？いや、こんな時間に中庭に用はないはず……

じゃあ誰？

そうして俺は足音の主へと顔を向ける。

お嬢様だった。

俺に用でもあるのかな？あんまり家事を申し付けられないから嫌われているかと思っただが。

何かして欲しいことでもあるのかな？良かった。お嬢様に従者として見られてて。荷物しか持たせてくれなかったから、正直、落ち込んでた。

一応、従者としてはかなり完璧に育てあげられたからな。

ラザイン様に。

だから、お嬢様。

俺に何なりとご要望をお申し付けください。

(従者根性が染み付いておるの。さっきまでの美しい剣術が嘘み
いな心の変貌じゃ。流石主様じゃ)

褒めてるのか？けなしてるのか？

(褒めておるぞ！主様)

そうか・・・ありがとう・・・？

まあ、今はサタンの事はいい。お嬢様のご要望を聞かなければ。

いや、話しかけてくれるのを待つべきか。

何十年も待つてたんだ。待つことには慣れてる。

「あなたの今日の模擬戦について話があるの」

従者スキルがいらなそうな内容だ・・・

意気込んでいた自分が悲しい・・・

「模擬戦の事ですか？」

「ええ。そう。荷物持ち。あなたは本当に今まで学園に通ってなかったの？」

「はい。その通りです」

「なのにあんな空間を支配下に置く、ましてや火のフェニックスなんかなぜ出せるの・・・？」

「学園には通って居ませんでした、今まで必死に修行して足掻いてましたから。そのおかげです」

本当はサタンのおかげなのだが、使い魔のおかげといっても、説得力がない。

なんたって俺の使い魔は黒猫なのだから。

本当は金髪の美しい悪魔のような聖女のような女なのだが。

「努力であるケイルを倒したというのかしら？」

「はい」

すまん。サタン。大嘘だ。

そしてお嬢様あなたに嘘をつくことをお許しください。

「なるほどね。私はあんたの「努力」を知ってるから、まだいいけど学園のみんなはあんたの模擬戦の結果を見て困惑してたわね」

「困惑ですか？」

「そう。困惑。落ちこぼれの貴方がケイルに勝利したから当然ね。まあ、悪い方向ではないけどいい方向でもないわね」

「なぜ俺にそんなことを？」

「ケイルを倒したご褒美かしら・・・？それにあんた面白いしね」

「気にかけてくれてありがとうございます」

「っ！！気にかけてはないわ。あんまり勘違いしないようにね。荷物持ち」

「はい！」

「なんで笑顔なの・・・」

「お嬢様と会話出来て嬉しいからですよ」

「そっそう・・・変な従者ね・・・」

「顔が赤いけど大丈夫ですか？お嬢様？」

「うるさい！大丈夫よ！」

「すみません。気に障ってしまったようで」

「はあ。別にもういいわよ。まあ、あたしからは以上よ」

「はい。分かりました」

「じゃあ、おやすみ。荷物持ち」

「いい夢を。お嬢様」

お嬢様は中庭を立ち去る。

それにしても模擬戦の反応が困惑か・・・学園長の例もあるしなんかこわいな・・・

（主様なら大丈夫じゃろ。なんだかんだいってあの少女も主様を嫌っていないようじゃしの）

そう信じたいな・・・

なんか今日は疲れた。

模擬戦に学園長にお嬢様。

もう限界だ。

疲労が。

修行も切り上げて今日は寝よう。

(うむ。それがよい)

一方アメリカは・・・

「あの荷物持ちの実力が未知数だわ・・・」

本当によく分からない従者だ。

「まあ、今日の模擬戦で結構役に立つのはわかったし、いい事よね」

いい事？なんで従者が強いのがいい事なの？

自分で自分が分からなくなる。

「あの荷物持ちは私に新しい景色をみせてくれるのかしら？」

少し荷物持ちに期待してしまう。

あのミステリアスな雰囲気。

「実力はみとめるわ。荷物持ち。まだ面とむかっては言わないけど・
・応援してる。あんたを」

努力で強くなった荷物持ち。もしかしたら彼と私は似てるのかもし
れない。

第十九話 未だ未知数（後書き）

努力がアメリカに届く瞬間？でした

第二十話 俺は意外と運命に好かれているのかもな

模擬戦を終え、学園長との対談？を終えた翌日ーつまり今日。

俺は今、お嬢様の鞆を持ちながら通学途中様々な奴に奇異の視線を向けられていた。

昨日の模擬戦でケイルに勝ったからだろうか？俺はケイルに勝てた気はしてないが。

勝てたのは運が良かっただけだ。

なのに、この視線の数・・・

俺という人間を推し量ろうとでもしているのか？

好奇心溢れた貴族達だ。とても迷惑している。

それにこの視線は必然的に俺の近くを歩くお嬢様にも向かう。

お嬢様は何処吹く風というようにスルーしている。

お嬢様本当にすみません。

俺は昨日のお嬢様の忠告？通りなにか複雑な立場にいるようだ。

この俺への注目度からも分かる。

俺が目線向けるところから視線を逸らす奴や逆に見返してくる奴。

反応は様々だ。

俺は学園長から殺されかけたことを思い出す。

きっとダーク・ナイトを使ったのもこの注目度の原因なんだろうなあ。

学園長も知らない魔法を落ちこぼれと言われていた俺が使ったから当然か。

きっと学園での俺への評価は、ケイルに勝ったよく分からない奴という所だろう。

いや、怪しい奴か？

今までもろくに学園に通っていなかったのに、魔法を使えるなんておかしいらしいからな。

しかもケイルに勝つために凄い魔力をサタンから貸して貰ったことは学園のみんなに見られたしな。

うーむ、この視線の意図がやっぱり分からない。

ただの好奇心か？迷惑だ・・・

お嬢様の忠告？の通り学園生活を送るにあたって注意が必要かもな。

あーあ、めんどくさい立場になった。学園長みたいな反応をしてくる奴がでてこないといいが・・・

祈るしかないな。

俺とお嬢様は教室に着いた。そしていつも通り授業を受ける。

授業の内容は簡単だ。初級魔法の理解を深めるだけだからな。

実技も剣術の研鑽のみ。まだ魔法についての実技はしていない。

実技中は目立たないようにこっそり剣を振っていた。

俺個人で剣術練習した方が上達するからな。

しばらくの間、慎重に学園生活を送った結果、ある事がわかった。

俺を落ちこぼれ扱いする奴が減ったこと。これは嬉しい。とてもな。

だが・・・クラスメイトのみんなが俺と一定の距離を保つようになった。

ある意味孤独だ・・・

たまにお嬢様が話しかけてくれるのがとても嬉しい。

どうやら俺は根暗な性格のくせに孤独が嫌いなどうしようもないが
キらしい。

こんな距離を作られるなら、まだ落ちこぼれと言われ蔑まれていた
方が良かったかもな。

どうやら、とりあえず俺の事はクラスのみんなとしては様子見、保
留するらしい。

模擬戦で負けたケイルも同じような感じでクラスメイトに扱われて
いる。

多分、貴族同士何か気まずいのだろう。

まあ、少し寂しい気もするが、俺の目的はあくまで強くなってセン
ターハートをあらゆるものから守ること。

その目的を邪魔されないのならこの立ち位置もいいのかもしれない。

俺の近況報告はこんな所だ。サタンどう思う？

(うーむ。なんか悲しいのう。主様はあんなに頑張ったというのに・
・・儂も孤独は死ぬほど嫌いじゃからの・・・これも強者としての
定めかのう。運命は儂らを孤独にさせたいのかの?)

案外俺らは、運命とやらに嫌われてるのかもな。

なんか不幸だし。

(儂らは似たもの同士ということじゃの・・・強いが故に迫害を受
ける・・・)

迫害?そんなに酷くはないぞ。

(儂は孤独が何より嫌いじゃからの。儂にとっては孤独は迫害なの
じゃよ)

そうか・・・お前は・・・何千年も・・・あの暗い場所に・・・

(主様には、儂の様になって欲しくはないのう・・・)

サタンのように孤独にならないで欲しいってことか?

(うむ。そうじゃ・・・)

残念だったな。サタン。

(何がじゃ?)

俺はサタンに心配される程孤独じゃないんだよ。

ラザイン様やお嬢様。様々な人が俺を支えてくれているからな。

それに何よりお前がいる。

俺の心にお前がいる。

サタンやセンターハート家がいれば俺は孤独じゃないんだ。

だから、残念だったな。サタン。俺はもうすでに孤独じゃないんだ。

お前さえ居てくれれば・・・

大事な人達が居てくれれば・・・

俺はそれでいい。

だから、あんまり俺の心配はしなくても良かったりするんだぜ。サタン。

サタン？

（主様は僕をもう一人にしないか？）

契約したときにとっくに誓ったよ。お前を孤独から守ると。

（主様だけは僕のそばにいつも一緒に居てくれるか？）

ああ。当たり前だ。

（ありがとう・・・主様・・・僕が・・・僕が・・・主様を励ませ
うとしたのに、これじゃ逆になってしまったの・・・）

ああ、サタンだからお前は俺を孤独から守ってくれよ？

（もちろんじゃ！）

俺はどつやら、意外と運命に好かれていたのかも知れない。

第二十一話 サバイバル（前書き）

物語の構想は私の頭の中で出来上がりしました。あとは書くだけです。私の書く作品は暗くなりがちなので、直したいのですが・・・難しいです。

第二十一話 サバイバル

俺はいつも通り学園に向かう。お嬢様の荷物を持って。

「ほら、荷物持ちいきますわよ」

「分かりました」

最近はお嬢様は俺と簡単な会話くらいならしてくれるようになった。

同情だろうか？それでも嬉しい。

お嬢様と話す為の繋がりである荷物持ちという役職だけは手放したくないと思う俺だった。

いつも通りの朝。いつも通りの授業。

そんないつも通りの時間が割と平和に過ぎていった。

ただ今日のLHRに爆弾は投下された。

リーゼ先生の口から。

「来週はチーム対抗のサバイバル演習がある。みんな気を引き締めるように」

は？

サバイバル演習？

聞いてないですよ？

「サバイバル演習については、以前配ったプリントに明記してある。みんなサバイバル演習があったことまさか忘れてないよな？」

「はい。大丈夫です」

プリント・・・

知らないな・・・

それにチーム対抗・・・

サバイバル・・・

闘いになるのか？

むう。プリントがないから分からん。

それにチームはどうやって組むんだ？好きな奴と組めなんて言われ
たら困るな・・・

「チームはこの時間に発表する。なおチームの人数は5人。ひとク
ラス40人いるから8チーム出来る。サバイバル演習は一年全体で
行うから他のクラスのチームと闘うかもしれない。チームの結束力
は高めておいた方がいいかもしれないぞ」

「つまりチームが重要ということだ。ついでに、それぞれのクラス
でサバイバル演習の成績がトップだったチームは学園対抗トーナメ
ントにも出てもらう。一年生は5クラスあるから、5つのチームが
トーナメントに出れるわけだ。成績にも関わるからしっかりな」

サバイバル演習、つまりは1年5クラスでのチーム単位の闘いつて
事か。詳しいルールはまだよくわからない。

でも、味方はチームだけの戦いになるのか・・・先生の言うとおり
チームの結束が重要か・・・とことん俺に不向きだな。

模擬戦の数週間後にサバイバル演習とか闘いが好きな学園だなあ。

迷惑だ。

まあ、強くなれるきっかけになるかもしれない。

頑張るか。それ位しか俺にはできないから・・・

「ではチームを発表する・・・まずはキリユウ君・・・」

リーゼ先生のよく通る声がチームの編成を発表する。

先生曰く模擬戦や普段の成績などで実力が均等になる様にチーム分
けされているらしい。

5チーム程が発表された頃だろうか。

リーゼ先生から俺の名前が発表された。

「次のチームはまずロイ君！」

その瞬間教室の空気が微妙になる。

微妙としか表現できない。

俺と一緒にチームになるのは嫌なんだろうな。

距離を置かれたことだし、背中を任せる仲間が俺じゃ組んだやつらも微妙になるしかないだろうな。

さて、次の名前は誰かな・・・

「次はケイル君！」

よりによって・・・ケイル・・・

どうなることやら。まあ、あいつもみんなから距離を置かれているようだし、境遇は似ているかもな。

逆恨みされませんように。

次は？

「次はアメリカ君！」

よし！お嬢様が味方なら、思う存分やれる！
まあ、お嬢様は俺と組みたくないかもしれないが・・・

次は？誰だ？

「次はティナ君！」

ティナ・・・？ああ・・・あの女の子か。確か成績は中の中くらいか・・・うまくやれるか？仲間として。

ケイルとお嬢様はかなり強いがバランス取れてんのかな？このチーム。

1年トップクラスだぞ。

まあ、俺が気にすることはないか。

さて最後のチームメイトは誰かな？

「次はセリア君！これがお前らのチームだ。覚えておくように。ついでに次の時間はチーム同士の結束を高めるための交流の時間となっている。来週のサバイバル演習のためにも交流はしっかりさせておくように。ルールの確認なんかもいいかもしれないな。自己紹介とかも済ませておけよ？」

セリア・・・名前からして女子のようだ。無口な人だった気がする。クラスのお嬢様ともあんまり喋ってないし・・・成績はよくわからない。

でもこれでチームは決まったな。俺達のチームは

俺

お嬢様

ケイル

ティナ

セリア

上から根暗、守るべき人、似た境遇の人、成績が普通の引っ込み思案の女、よくわからない無口の女ってどこか。

引っ込み思案と無口か・・・

このチーム割と平和になるかも・・・？

ケイルはどうなんだ・・・？

お嬢様は・・・？

次の時間のチームとの交流の時間で全てが決まるな。

チーム戦とはいえ、負けるわけにはいかない。

守りたい人のためにもな。

どんなチームになるかはわからないが、最善は尽くそう。

そう思いながらロイはLHRの終わりを告げるチャイムの音を聞いた。

第二十一話 サバイバル（後書き）

ご都合主義御免！

第二十二話 チームの不仲（前書き）

主人公の敬語が難しい。間違いあったら作者の力量不足です。このチームのまとまりのなさを書ければ後の展開に役立つのですが・・・上手く書けたかな？

第二十二話 チームの不仲

そして時はチーム交流の時間。

チームごとに分かれ席に座る。

俺たちのチームは教室の窓側に陣取っていた。

気まずいオーラを撒き散らしながら。

サバイバル演習ではパートナーになるのにこんな雰囲気でもいいのか？

きっとそう思っているのは、俺だけじゃない筈。

しかし中々口火を切れない。

会話スキルに乏しい自分が嫌いになる。

従者としての言葉遣いにボロが出ても駄目だし……

ここは会話スキルの高い人に期待かー

「では、まずは自己紹介からいきます！」

お嬢様！流石！この雰囲気の中、口火を切るなんて。

尊敬します。

(軽い尊敬じゃの)

うるさい。サタン。

「私の名はアメリカ。センターハート家の者です。みなさんとは背中を支えあうチームになるのですからよろしくお願いします。特にケイルさん。貴方には期待してます。学園では1年トップクラスに入る実力を持っているのですから」

「俺に対する嫌味かあ？センターハートさん？」

そう言つてケイルはお嬢様を睨む。

「やめて下さい。ケイル様。お嬢様はただ貴方に期待しているだけです。他意はありません」

俺は立ち上がりケイルからお嬢様を守るような態勢を取る。

「チツ。お前は・・・俺に勝った奴なのに、なぜそんなに人に隷属する態度を取る？俺はお前に負けてから、お前を意外とかつてるんだぜ？貴族としてのプライドは崩れたが広い視野で物を見れるようになったからな。そういう意味ではお前に感謝さえしている。最初、チームとやらには興味がなかったんだがお前がいるなら話は別だ。お前の力みせてもらうぜ？」

ケイル・・・

俺に期待・・・？

サタンがいなければ何もできない俺を？

お前の方がよっぽど強いというのに・・・

お嬢様を舐めているのは、マイナスだが、そう思われるのはとても光栄だ。

「ありがとうございます。ケイル様」

「ああ・・・楽しみにしてるぜロイ君よお？」

俺は強い奴にしか興味がねえからな。そういう意味ではセンターハート。お前にも期待してるんだぜ？」

「ええ・・・ありがとうございます。では自己紹介を続けましょうか。荷物持ち。頼むわよ！」

ケイルの言葉を受け流すお嬢様。ケイルが嫌いなのだろうか？

サバイバル演習でチームとなるには嫌な傾向だ。

おっと、俺の自己紹介か。

「ロイです。センターハート家の護衛権の従者です」

「それだけの荷物持ち？」

「すみません・・・」

会話スキルが無い物で・・・

（僕にはかなり主様の言葉が届いたがのう。

主様は会話スキルがないのではない。口下手なだけじゃ）

一緒の意味じゃないのか？サタン。

（僕も会話スキルがないかもしれんの・・・）

そうか・・・悲しいな・・・

（うむ・・・）

「わかったわ。では其処のお二人にも自己紹介をお願いします」

お嬢様がなんとかチームの会話が途切れないように言葉を繋げる。

本当にすみません・・・

「ティナです。アメリカさんやケイル君と組めるなんて嬉しいですよ。よろしくお願いします」

「其処の従者に負けた俺への嫌味かあ？名前も覚える価値のない女？」

「貴方・・・！そんな言い方・・・！」

お嬢様がケイルを睨みつけるが、ティナは真逆の反応をした。

「すみません……」

ティナは謝る。ケイルより実力が下なので、同じ貴族といってもやはりケイルには強く言えないのだろう。

この世界の縮図をみているようだ……虫唾が走る。

「フン。言い返すことも出来ないのか？ 其処の女。ロイやセンターハートはやはり例外ってことか。残念だ。俺はお前に価値を見いだすことは出来なさそうだ」

「あんだ……いい加減に……！」

お嬢様が威圧感を出す。

俺もケイルの言い方にはかなりイラつときていた。

それに……ティナって女の子を見てると昔の自分を彷彿とさせるからな。

弱いから黙るしかない……そんな自分。

「ケイル様。同じチームとしてそれは無いのでは？」

「ハハツ。やっぱロイとセンターハートはおもしれえ。一年で俺に口答えできるのはお前たちくらいだ。お前達は本当におもしれえよ。また闘りたいなあ？ そうだろ？ センターハートとロイ？」

さっきから気づいて無かったがケイルからの俺への呼び方が落ちこぼれからロイに変わっていた。実力が認めら

れたからか？

だが、今はケイルから放たれた殺気に注意か……

俺とお嬢様も殺気をケイルにぶつける。

教室中がその殺気に注目していた。先生ですらだ。

そんな中。

「すみません！私の変な発言のせいでチームの輪を乱してしまって。自己紹介を続けませんか？お願いします」

懇願するように言うティナ。

やはり俺に似ている……

ティナには頑張って強くなってもらいたい。

「チツ。興が削がれた。お前らとまた闘えとおもったのになあ。残念だあ。つまんねえから寝るか」

ケイルは寝てしまった……

チームの雰囲気は壊すだけ壊して・・・

ただでさえ気まずいのに・・・

「私。ケイル君だけは好きになれそうにないわ」

「同感です。お嬢様。彼は戦闘狂の気がありますね」

「ええ。そうね。私も彼に変な期待されてるのよ・・・迷惑だわ・・・」

「そうですね・・・」

本当に迷惑だ。

「じゃあ最後の貴方。自己紹介お願いします」

「・・・セリア・・・よろしく」

「それだけ・・・？ですの・・・？」

お嬢様が聞く。

無視されていた。

このチーム。

一瞬でも平和かなと期待した俺が馬鹿だった。

全員危うい爆弾を持ってそつだ・・・（俺含むお嬢様含まない）

はあ。先が思いやられる。

第二十二話 チームの不仲（後書き）

サバイバル演習までが遠い・・・このチームでサバイバル演習を乗り切れるのかという所ですね。ケイルのティナの扱いが酷過ぎてテンションが下がってしまった。だがp.v.が何時の間にかかなり多くなっていたので全体的にはティナのことを差し引いてもテンションは上がっています。読んでくれたみなさん。ありがとうございます。誤字報告ありがとうございました。

第二十三話 サタンとの修行は変わっている(前書き)

50000pv突破したのでしょうか？見方がよくわからないのですが超えていたとしたら嬉しいです。

第二十三話 サタンとの修行は変わっている

危うげなチーム交流も終わり、お嬢様と俺は学園から帰る。

「荷物持ち。あんたとは同じチームですわね」

ああ、そうですね。本当に良かった。

「はい。そうですねいます」

「あんたに聞きたいんだけどあのチームどう思う？」

俺らのチーム・・・

背中を守り合うチーム・・・

それにしては・・・

(全然だめじゃの。だめだめじゃ)

そうだな。サタン。俺も同感だ。まあ、それをわかっていたところでどうにもならないが。

「お嬢様やケイル様がいるので、並の相手には負けないチームですが・・・団結力が皆無ですね。弱点を狙われたら案外あっけなく全滅してしまうかもしれません。そんな評価ですかね」

俺の意見はこんな感じだ。

「私も同感よ。はぁ・・・なんであんなチームに・・・」

「お嬢様。私はいつでもお嬢様の味方でい続けますから、安心してくださいね」

「あんたもあんたよ。正直、あんたも不安要素なのよ。力が未知数だし。まあ、いいわ。期待しておく。あんたは普通のやつとは違ってみたいだし」

「普通とは違う・・・？とは？」

「貴族の子供をやっていると、人の本質を見る力があがるのよ。あ

んたの本質を言葉で表すと・・・

得体がしれないという感じね。それに、あんたの中に何かもつと別のそう、何か白くて黒い者がいるという感じ。言葉に上手く出来ないけどね」

「そうですか・・・」

お嬢様はうつすらサタンに気付いているのか？貴族の本質を見る目・

すごいな。お嬢様が特別なのか？

（いや、儂が例外なだけじゃ。やはり常人でも儂のことをうすうす感じているのじゃろう。儂は例外すぎるから有り余る存在感だけは消しきれんくての）

例外？

（前にも言ったじゃろう？儂は例外じゃと。儂は時代が時代なら神と呼ばれたり、聖女と呼ばれたり、悪魔と呼ばれたりしたのじゃ）

神！？

凄いな・・・

（まあ、本物の神ではないが・・・扱う力が大き過ぎたからそう呼ばれる様になったの）

つまり、お前は俺の中にもうすすすす黒い気配を周りに放っているのか。

（まあ・・・そうなる・・・のう）

まあ、いいけどな。

（ほっ。怒られなくて良かったぞ）

なんか言ったか？サタン？

（いやいや、ただ主様が寛大だと思っていただけじゃ）

変な奴だな・・・

俺はそんな事を思いながら帰路に着く。

センターハート家屋敷中庭↓

俺はいつもの様に修行していた。ラザイン様がいらしたが、一緒に修行してもらったのはやめてもらった。サタンに指南してもらったほうが早いからな。

強くなるのが。

凡人な俺でも分かる。サタンが俺に教えている事は特別なものばかり。

一般の戦士じゃ使えないものばかりだ・・・

例えば・・・

カウンター・カウンター
反射の反射

これはサタンの技。相手の魔法の魔力と自分の魔力を同程度ぶつけて相殺させる技。発生が早く扱いやすいらしい。

と、こんな風にな変わった技ばかり覚えさせられる。

まあ、便利なんだが。

サタンがパートナーになつてから大分助かっている。目に見えて強くなっているのを感じるのは嬉しいしな。

それに、サタン曰く、

（主様は覚えが良いのう。天才じゃ。いや、天才どころではないのう。ここまで来るともう、例外的な才能じゃ）

俺がサタンに教えて貰っている技を成功する度に言われる。

どうやら、反射の反射をはじめサタンの技は習得難易度が高いらしい。

しかし、その技達を成功させるのを見てつい、漏らした言葉だそう
だ。

俺はサタンに修行を手伝って貰っているが、強くなっているのだろ
うか？

そんなことを修行中に考えるたび剣の素振りの速度が上がる。

どうしようもなく不安だ。

俺自身の強さのことも、サバイバル演習のことも、チームのことも。

お嬢様に聞いた話ではサバイバル演習が行われる場所では魔物も放
たれるらしい。

サバイバル演習では相手チームのメンバーを一人倒す度にポイント
がもらえるようになっていいるらしい。

ポイントはチーム共有。

魔物を倒してもポイントが手に入る。

ついでに、チームのメンバーが全滅するか最終日の終わりまでサバイバルは続くらしい。

つまり、チームにメンバーが一人でも残っていれば、サバイバルは続行される。

全滅かサバイバルの終了時のポイントがチームの点数。

成績とトーナメントに参加できるチームが分かるわけだ。

ついでに、サバイバル中は一定量のダメージを超えたら医務室に送られる魔法が生徒達にかけてあるので、死人はでない。

模擬戦の時と一緒だ。

まあ、ルールはこんな所か。

不安は残るが・・・今の俺が出来る事といったら・・・

修行とサタンに助言をもらう程度。

まあ、負けるわけにはいかない・・・

それよりもお嬢様には傷一つつけさせない事の方が重要か。

解決策は無いのに問題は山積みか。

来週。

サバイバル演習の三日間。

まあ、頑張るか。

どうやら俺だけはこの慌ただしい日常の中でたいして変わってないらしい。

第二十四話 誘い（前書き）

読んでくれた方々に私からの精一杯の感謝を。本当にありがとうございます！

第二十四話 誘い

結局、何も出来ずにサバイバル演習の日になってしまった・・・

今日から三日間、ポイントを稼ぐために魔物を倒したり、敵チームと戦わなくてはいけない。

ついでに、サバイバル演習に行く学生には事前に時計が支給されており、その時計が戦いを記録しているので、ポイントに虚偽の報告は出来ない。

つまり、戦いの記録が残るのでポイント制のサバイバル演習のルールにイカサマはないということだ。

よかった・・・

そして、俺はその時計を身につけ学園の敷地内にある森？の前に来ていた。

「ここが、サバイバル演習が行われる大樹の森だ！別名は始まりの森。みんなしつかり全力を尽くせ！魔物もそんなに強くないから大丈夫な筈だ。お前ならやれる。頑張つてこいよ。じゃ各チーム五分ごとに森に入れ」

リーゼ先生が俺等を激励してくれる。

不安感は拭えないが。

そして、俺たちのチームはついに森へと入る。

大樹の森―

「まずは一体何をしたら良いんでしょうかね？」

ティナがみんなに聞く。

「さあ、分からないわ。サバイバルなんて始めてだし……」

お嬢様が言う。

「俺も知らねえなあ。まあ、とりあえずは魔物と他チームを倒せば良いんだろうが。余裕
だろうか」

ケイルは楽観視しているな。

「とりあえずは自分達の野営の場所と食料と水の確保ではないでしょうか？」

俺はそう進言する。

「はあ？野営だあ？めんどくせえ。一日目で相手チームを全て全滅させりゃいいだろうが。さっさと殺りにいくぞ」

ケイル・・・お前はサバイバル舐めてるよな？

「そんな・・・無理です。今は様子を見るべきでは？」

「様子見だあ？俺はそんな事知ったこっちゃねえな。それに雑魚女に意見される筋合いもねえ」

そう言われティナも無言になる。

はあ・・・

重！雰囲気重！普段暗い俺でさえこの雰囲気は辛い。お嬢様もかなり困っている。

セリアは一言も喋らない。

「んで結局どうすんだあ？ロイとセンターハートはどうするつもりだ？」

あ、一応俺たちとはチームのつもりなんだな。ケイルは。良かった。足並みを合わせる気はあるようだ。

「俺は準備は周到にしておいた方がいいと思います。即ち野営と食料の確保をすべきだと思いますよ」

「私も同感ね。サバイバルなんてした事ないし、慎重に行きたいわ。荷物持ちと同じ意見なのは少し癪だけどね」

「オイオイ。センターハート、ロイ。そんな事してたら日がくれちまうぜえ？」

「なら野営する場所で籠城するのはどうでしょうケイル様？」

「籠城だあ？」

「はい。野営する場所と食料とある程度の水を確保したら、野営地でずっと敵を待つという作戦です」

「敵が来なかったらどうすんだ？ロイよお」

「そのためにあえて目立つように焚き火をします」

「焚き火だと？」

「そう焚き火です。キャンプファイアー並の焚き火。そんな事をしたら凄く目立ちます。」

「つまり、私たちはここにいてるとアピール出来る訳です。つまり敵から俺たちの所へよってくる」

「カウンター狙いかあ？まあ良いんじゃないか？」

「荷物持ちにしてはいい意見ね。少し危険な気もするけど・・・これなら私たちが動く必要もないし敵チームからの罠にかかる心配もない。私も賛成でいいわ」

「私もそれで良いと思います。何より危険が無さそうだし・・・」

ティナがつぶやく。

「セリアさんはどうっ？」

コクッ。

彼女は喋らないが頷いた。

とりあえずのチーム全員の意見の一致。

こんな事を決めるだけなのになんでこんな殺伐としてるんだ？

はぁ・・・

野宮地一

とりあえずチームの籠城の準備は出来たといっておこう。

途中、ティナが川に流されたり、お嬢様とケイルで敵チームをいくつか壊滅させたりと色々あったが、まあ些細な問題だ。

(些細な問題かの？それは？)

まあ、ポイントはチーム共有だから、戦闘に参加しなくてもポイントが入ってくるのは不思議な気分だったがな。

右手の時計にしっかりとポイントが記録されていた。

(そういうことではないのじゃが・・・)

まあ、後は焚き火をして敵を待つだけ。燃やす木材も集めた。準備は万全だ。

「準備はよろしいですか？みなさん」

「私は大丈夫よ。荷物持ち」

「俺もだ」

「わ……私も大丈夫です」

セリアも頷いたか……？

まあ、多分頷いたのだろう。

「では始めますよ？この焚き火をしてからはおそらく敵が奇襲をしかけてくるでしょう。常に注意を頼みます」

「「分かりました（ああ）」」

俺が焚き火を始める。キャンプファイアー並の焚き火。

目立つ目立つ。

音もパチパチと薄暗い森で響く。

さて、籠城の始まりだ。籠城という表現は比喩だな。

ガサガサ。

隠密行動とはほど遠い足音が俺らの方へ向かってくる。

敵チームか？

魔物か？

どちらにしても戦闘が始まるまで後僅かの様だ。

第二十五話 甘さ

俺たちは近づいてくる気配に息を殺す・・・

ガサガサ

森の木々を何かが横切りこちら側へくる。

「みんな！戦闘準備！」

お嬢様の言葉で俺は警戒を敵への強める。

「何は出よーが余裕だな」

ケイルが言う。

そして、出てきたのは・・・

「おいつみんな！敵チームだ！」

敵チームのフルメンバーだった。

「あれはケイルにアメリカさん！」

「やべえ！一年トップクラスじゃねえか！」

「ケイル君とアメリカさんかぁ・・・分が悪いね・・・」

「ここは逃げたほうが良くないか？」

「」「」「うん（はい）」「」「」

敵チームは一年トップクラスの二人を見て退却を選んだ様だ。

だが・・・

「そんな事誰が許すと思っただあ？ああ？」

ケイル・・・貴族なのにお前はチンピラか？

「何！早い！」

「敵に背を向けるなんてなあ。甘いぜ！ウィンド・カッター！」

ケイルの拳から無数の風の刃が形成される。

「ぐう！痛えっ！」

「避けれなー」

今ので二人が強制医務室送りに。

ケイルの魔法が直撃したもんな。当然か。

「みんな！くそ！残った俺たちだけでも逃げるぞ！」

「わかった！」

「うん！」

残る敵チームの三人も急いで逃げようとしたが・・・

お嬢様の使い魔炎龍に行く手を阻まれる。

「アメリカさんの使い魔！」

「まずい！」

「こつちも使い魔を！」

そうして敵チームも妖精、獣の類のものを召喚する。だが・・・

「すまないわね。皆様方。だけど負けたくはないのでやらせていただきます。炎龍！ブレス！」

「ギャオーーーーー！」

炎龍の口からブレスが放たれようとしている。

ケイルとの戦闘を思い出して俺もビビる。

そして、炎龍のプレスが敵チームへー

当たる。

直撃だ。

使い魔ごと。

あれはー

(強制医務室送りじゃの)

ああ。そうだなっ。

敵チーム悲鳴をあげてなかったが、大丈夫だろうか？

戦闘はあっさり終わったな。

ティナは二人をすこし怯え？ながら見ていた。

「ああ。くそつまんねえ戦いだ」

「確かに敵としては物足りなかったですわね」

この二人が同じチームって・・・

パワーバランスおかしくね？

セリアもティナもそこまで弱くは無いし・・・

ああ。そうか。だから俺がいるのか。

はあ・・・

ケイルに一応勝ったんだけどなあ・・・

弱く見られてんのかなあ。

なんかショック。

まあ、いいが。

とりあえずこの籠城作戦でわかった事はケイルとお嬢様がいれば大抵のチームには勝てるということか。

俺としてはお嬢様には闘ってほしくはないんだが・・・その辺をうるさく言つとお嬢様に嫌われそうだから、言わないでおく。

敵もお嬢様より弱い様だし。

焚き火のための木々を集める時に出会った魔物も俺一人で倒せたし。

とりあえずは安心か？

「お疲れ様です。お嬢様。ケイル様」

「辛いなんていらねえよ。敵も近くにいなえ様だし。俺は寝る。敵が来たら起こせ」

そう言つてケイルは簡易テントに・・・

まあ、いいか。

「私もとりあえずは休むわ」

「分かりました」

お嬢様ももう一つ設置してある簡易テントに。

セリアとティナもそのテントに入っていく。

みんな休む感じか？

簡易テントは二つしかない・・・

はあ・・・

夜はケイルと寝るのか・・・

嫌だ・・・

そうして、俺たちは順調に魔物、敵チームを倒しポイントを稼いでいった。

ついでにケイルは寝相が悪かった。

おかげで寝不足だ。

まあ、サバイバルは順調に終わりそうだ。

最終日までそんな安心感の中で過ごした。

だが三日目。そう。サバイバル演習最終日のことである。

俺たちは遭遇してしまった。

惚けた心の中で。

どこか舐めていたサバイバルで。

白銀の美しい龍に。

とても美しい敵だった。

そして、殺し合いになった。

これは、俺たちのサバイバル最終日のことである。

第二十六話　すぐ迎えに行くから（前置き）

お気に入りが入りが九十件突破！嬉しい限りです。あと私の小説は前置きが長いかもしれませんが許して欲しいです。

第二十六話　すぐ迎えに行くから

サバイバル演習最終日。

この「籠城作戦」で寄って来た敵チームや魔物はほぼお嬢様とケイ
ルが撃退してくれていた。

ときたま、見逃した敵などは俺たちが倒している。

順調過ぎるほど俺たちのサバイバルは上手くいっていた。

誰も医務室送りにならず、ポイントもかなり貯まった。

もし、ここでチームが全滅したとしてもトーナメント入りは確実だ
ろう。

本当に全てが順調だった。

不自然過ぎるほどに。

そして、その不自然さを正す為にとってつけて現れたような白銀の
龍と俺たちは出会ってしまった。

安心感はあった。

だが油断はなかった。

俺たちの警戒をかいぐり現れた巨大な龍。

野営地にいた俺たちは咄嗟に戦闘態勢に入る。

「なんだあ？このデカブツは？ずいぶんでけえ魔物だなあ？まあ、倒せばいいか」

ケイルが言う。

「ええ、そうね・・・」

お嬢様も同意している様だ。

今思えば、俺たちはここからすぐに逃げるべきだったのかもしれない。

油断はしていなかった。

だが驕っていた。慢心していた。

だから、正常な判断が出来ていなかった。

だから、俺たちは選んでしまった。

その白銀の龍と戦うことを。

ティナは白銀の龍の正体を知っていたというのに……

「あれは……トリフロスです！なんでサバイバル演習を行っている場所にこの魔物が・
・トリフロスは王国軍一個師団くらい引っ張り出してこなければ勝てないのに……危険です！皆さん退避しましょう！」

ティナが叫ぶ。

「うるせえぞ！雑魚女！戦闘に集中してんだ！」

ケイルも叫ぶ。

「先手はこちらから打ちましょう！いけ！ファイア・ブラスト！」

お嬢様が白銀の龍トリフロスに向かい中級魔法を放つのだが・・・

「効いていない・・・の・・・ですか？」

トリフロスに当たった中級魔法だがトリフロスの硬い龍の鱗の前には無効化されてしまっていた。

「センターハート！何してやがる！本気でやらねえとこいつには負けるぞ！」

「うるさいですわね！ケイルさん！こちらも本気で魔法を行使しました！」

「チツ。まあいい。今度は俺の魔法をくらってもらうぜえ？デカブツ！くらえ！ウインド・ストーム！」

だが・・・

トリフロスは無傷だった。

まるで美しいままだった。

「オイオイ。中級魔法を無傷だあ？とんだ化け物だ！ははっ！楽しくなってきたあ！」

ケイルが戦闘狂になりつつある。

「皆さん退避しましょう！トリフロスは学生レベルじゃ勝てないんです！」

「いちいちうるせえなあ。雑魚女。やっと楽しめそうな敵と出会ったんだ。殺らなきゃ損だろ！」

「すみません。ティナさん。私も貴族としてのプライドがあるので。こんな龍に負ける訳にはいかないのです！」

そうして、お嬢様とケイルは同時に使い魔を召喚する。

「お前あなたと協力するのは癪だが（です

が（ここは共闘してもらっぜ）もらいますわ（！」

二人の前に巨大な龍が現れた。二匹。トリフロスには劣る大きさだったが、十分大きい。

俺とティナとセリアはただその荘厳な様子を見ていることしか出来なかった。

そして、俺は思っていた。風龍と炎龍がでた以上トリフロスは負けるだろうと。

「行きますわよ！炎龍！ブレスを！」

「ギャオーーーーー」

「こっちも全力のブレスをくらわせてやれ。いけ！風龍！」

「ギャオーーーーー」

二つの龍がブレスの準備を始める。

そんな中始めてトリフロスが攻撃動作に入った。

「ギャオーーーーー！！！」

トリフロスもブレスの準備を始めている様だ。

まあ、多勢に無勢だ。トリフロスが勝てる訳もない。

戦闘は終わったも同然ー

(主様。悪いことは言わん。早くこの場から逃げるのじゃ)

どうしたんだ？サタン？

(凄まじい衝撃がくる筈じゃ。あの龍達、特に白銀の方。あの魔力の量からしてあやつのブレスはやばい)

白銀の龍のブレスがやばい……？

お嬢様がブレスの直撃コースに……

お嬢様！！

（待て我が主様よ！待つんじゃ！いくら主様でもそいつに挑むのはまだ早い！）

お嬢様が！お嬢様が危険なんだろ？気にしてられない！

だが無情にも三体の龍のブレスの準備は終わってしまっていた。

「「「ギャオーーーー！！！」」」

そうして風と火のブレスと白銀のブレスがぶつかりあう。

数秒ブレスは拮抗していたが、徐々に白銀のブレスが二つの龍のブレスをおし始めた。

「何！風龍のブレスが・・・押されて・・・」

「炎龍も・・・ですわ・・・」

そうして一年トップクラスの二人の前に白銀のブレスが襲いかかる。

「お嬢様だけは！守ってみせる！」

俺はそのブレスに割ってはいる。

「気仙花！こい！」

青い刀身の剣を俺は出す。

「どこまで威力を軽減できるかわからないが、不可視の斬撃！」

俺は白銀のブレスに向かい視えない斬撃を放つ。

だが・・・

「くそっ！これでも！お嬢様！」

俺はお嬢様を押し倒してブレスから守ろうとする。

「ちよ、ちよっと！に、荷物持ち！」

「すみません。お嬢様。でもお嬢様だけは・・・」

不可視の斬撃でも相殺し切れなかった白銀のブレスが俺たちを包みこんだ。

その瞬間激しい爆音がした。

「うわぁ！！！！」

（主様。今から魔力のオーラを主様に纏わせ
ダメージを軽減させる！待っておれ）

俺に魔力のオーラが纏わりつく。

なんとか・・・持ちこたえることが出来た。

「はあはあ・・・お嬢様・・・お嬢様！」

「うっ……」

「お嬢様！お嬢様！俺のせいだ！」

「あんたのせいじゃないわ。私たちが戦う相
手を見誤っただけ。それに、あんたは身を挺して私を守ってくれた。
感謝してるわ。でもだからこそ……いつておくわ……逃げな
さい。今の私たちじゃあの魔物には勝てない
わ……」

お嬢様はそれだけ言って気絶してしまった。
医務室に送られてないからまだ大丈夫な筈だ。

「お嬢様……くそ！」

お嬢様を安全と思われる場所まで運ぶ。

安全かは保証されてないが、サバイバルなのだ。確実に安全な場所
などないだろう。

そういえば、ケイルがいない……

医務室送りになったのか！

まずいな・・・

それにお嬢様を守りきれなかった・・・これが実戦なら・・・お嬢様は・・・お嬢様は！死んで・・・いたかもしれない・・・

ちくしょう！

ちくしょう！

油断はしていなかった。ただ驕っていた。

今の自分達ならこの龍を倒せると。

（模擬戦の前にも言ったじゃろうに。緊張感を忘れてはならぬと）

ああ・・・そうだったな・・・サタン・・・

今回の事は俺の慢心、チームの不仲が原因だ。

ティナの声に耳を傾けていれば・・・

後悔は戻さない・・・

！

トリフロスが野営地の前に移動した！

まずい！

あそこにはセリアとティナが！

行かなきゃ！行かなければ！

（本当にいくのかの？たいして仲は良くないのじゃろっ…同じにい
ればとりあえずは安全だと思っのじゃが・・・）

ああ、そうかもな。

でも・・・でも！

「守りたいんだ・・・同じチームのメンバーだから・・・それにお嬢様を傷つけた龍を俺は・・・俺は許せそうにない！」

ここで立ち止まる訳にはいかない！

行くんだ！

プレスを受けて傷だらけの俺でも何か出来る筈だ！

(やれやれ主様も難儀な性格じゃの。まあそこが良いのじゃが 儂もあの龍を倒すため協力しよう)

ああ・・・頼む・・・

お前の助力なしじゃあの龍を倒せそうにない。

さて、行くか・・・

お嬢様・・・少しだけ待っていて下さい・・・

そうして俺は全てをにかけてトリフロスと殺し
合いをすることになる。

第二十六話　すぐ迎えに行くから（後書き）

なぜ学生レベルじゃ太刀打ちできないトリフロスがサバイバル演習の森にいたかは近々明かしたいと思います。

第二十七話 共闘（前書き）

急なティナ視点からのスタート。

第二十七話 共闘

トリフロスがこちらへ向かってくる。

私は怯えていた。

学年一年トップクラスの二人でも勝てなかった龍に。

「セリアさん！早く逃げましょう！」

「無理・・・あの龍は動きが早い・・・逃げられない」

いつになくしゃべるセリア。

「でも！」

「私達はどうせ死なないし、・・・それにロイ君の安否が分からない以上ここに残るのが得策・・・」

「それでも・・・トリフロスは怖いです・・・」

「それは・・・確かに・・・」

セリアとティナもやはり怯えている。だが二人とトリフロスの距離は近い。

そして、トリフロスが二人の目前に迫る。

「仕方ないです！もう闘うしかないですね！」

ティナは覚悟をきめた。

「私も闘う・・・」

セリアも闘う様だ。

「サバイバル初の実戦です・・・アメリカさんとケイル君に戦闘を任せていたのが仇になりました・・・」

「私も初戦闘・・・」

トリフロスが二人を認識した。トリフロスが二人に向かい腕を振り下ろす。

「格闘も出来るの！？まずいです・・・ファイア・アロー！」

ティナがトリフロスの腕に初級魔法を放つが腕の勢いは止まらず、ティナの方へ振り下ろされた。

「わあ！危なかった・・・もうすぐで当たるところだった・・・」

だが、トリフロスはティナへの攻撃を筈した様だ。

「幸運・・・」

「確かに・・・」

ティナも頷く。

「今度は私の魔法・・・アイス・シャワー」

セリアが魔法を行使するがトリフロスの鱗に弾かれた。

「私の・・・初級魔法も・・・駄目・・・」

セリアが落胆する。

「アメリカさんの中級魔法も使い魔も通用してなかったよね・・・？トリフロスには。ということは私たちにトリフロスにダメージを与える手段がない！」

「・・・まずい」

そして二人は一つの結論を出す。

この龍には「勝てない」と。

そして二人に向かってトリフロスがブレスの準備を始める。

「あれをくらっても死なないと思うセリアさん？」

「多分・・・医務室行きになる筈」

そんな事を話している二人の前に・・・白銀のブレスが襲いかかる
うとしていた。

ティナとセリアは衝撃に備え目をつむる。その瞬間―

「ティナ様！セリア様！サタン！魔力を俺の限界手前まで貸してく
れ！」

走ってきた男が―

「くそっ！間に合え！ダーク・ナイト」

夜の名を冠する魔法を行使した―

ティナとセリアは目をつむって衝撃に備えていたがいつこつにこち
らへブレスが飛んでこない。

不思議に思い目を開けると・・・

幻想的な夜の闇が白銀のブレスを打ち消していた。

「辺りが暗い？これは魔法？さっきロイ君の声が聞こえてきた気がしたけど……」

ティナが困惑する。

「これは何？……まさか空間支配魔法？……いったい誰が？」

セリアも戸惑っている。

「間に合って良かったです……ティナ様……セリア様……」

「「ロイ君！」」

ティナとセリアが見た先にボロボロのロイが立っていた。

「はあはあ……俺の防御魔法を張らせていただきました。これであの龍のプレスは封じることが出来ました……少しはこれでまともな戦闘に……」

ロイがボロボロになりながらも、言葉を紡ぐ。

「ロイ君・・・そんな傷で・・・ありがとう・・・」

ティナが感謝する。

「いえ、当たり前です」

「私からも・・・ありがとう・・・」

セリアもお礼を言った。

「いえ、当たり前前のことです。仲間を助けようとするのに理由はいりません」

「私・・・あなたがケイル君を倒した時の模擬戦を見ていなかったんだけど・・・トリフロスのプレスも防ぐような魔法を見せられてそれが本当のことだったんだあつてはじめて感じました。」

「ともかくです！ロイ君！この龍を倒すのに協力してください！あなたの力が必要なんです」

「初めからそのつもりで来ました。俺からもティナ様をお願いします。セリア様にもお願いします。俺と共にあの龍を倒してくれませんか？」

「もちろんです」・・・もちろん」

そうして三対一の死闘が始まる。

第二十七話 共闘（後書き）

- ・ 初めての主人公以外のキャラの視点。誤字脱字があったら報告よろしくお願いします。というかトリフロス戦引っ張りすぎですよね・

第二十八話 無理やり借りるぞその魔力(前書き)

主人公はボロボロです。

第二十八話 無理やり借りるぞその魔力

俺は巨大な龍と向かい合っていた。

「まずは、ティナ様。あの龍の情報を少しでも教えてくれませんか？」

ティナはケイルがあつた龍と戦う前あつた龍について何か言っていた。何か有用な情報が聞けるかも……？

「分かりました！あの龍の名はトリフロス。セントラル王国軍の一個師団でも苦戦する

レベルの魔物です。正直な話、私たちには荷が重い相手です」

軍の部隊が相手に苦戦……？

そんな魔物が学生のサバイバル演習に？

わざわざ生徒たちに格安医務室送りツアーを開くつもりなのか？この学園は。

いくら死なないように安全装置の魔法があるとはいえ……

生徒たちに圧倒的な絶望でも与えたいのか？

しかし、どうにも引つかかるな。

あの学園を守るために俺を殺そうとした学園長が軍が相手でも苦戦するような魔物を不用意に使っただろうか？

それに学園長の性格からして、あんな龍を演習に使うとは思えない。

ならば、なぜあの龍が？

元々、この森に生息していたのか？ いや、違うな。学園の敷地内のこの森にあんな魔物がいる訳がない・・・と思う。

森の生態系が崩れるからな。

ではなぜ？

学園の警備を突破してあの龍がこの森に入れるか？

なぜ、軍が苦戦するレベルの魔物がここにいるかがやっぱり分からない。

まさか・・・誰かが人為的に？

考えすぎか？

冷静に考えてみるとあの龍についてはおかしいところだらけだ。

学園の警備はやっぱりあんな巨体では潜り抜けられないだろうし、いつの間にか俺たちの前に現れたのも不自然といえれば不自然だ。

(主様の思考を一つにまとめるとあの龍は「怪しい」ということじやな?)

ああ・・・怪しさだらけだ。

まあ、ティナの情報から読み取れることはこのくらいか・・・

戦闘の役にはたたないな・・・

今の俺の目的は二つ。

まずは、あの龍・・・トリフロスだったか？そいつを倒すこと。

お嬢様のところまで行かれたら気絶しているお嬢様ではひとたまりもないからな。

お嬢様のためにもこいつは倒すべきだろう。

もう一つの目的は、お嬢様の保護。

気絶しているお嬢様を放置というのはヤバイ。他のチームや魔物に気絶しているところをやられてしまつかもしれない。

この問題も重要だ。

つまり俺の今やらなければならないことは・・・

(あの龍を・・・)

「倒すことだ！」

そうして俺はトリフロスまで走る。

「私たちも援護します！」

「私も……」

ティナとセリアも援護してくれている。だが……

(トリフロスとやらにはまったく効いてなさ
そうじゃのう)

ああ、そうだな。

初級魔法はビクともしないってことだな。

ならば……

「気仙花！来てくれ！」

俺は魔武器を呼ぶ。そして、魔力と気力を同時に混ぜる。

「綺麗です……」

「美麗……」

ティナ達が何か言っているが、構っている暇はない。

俺はトリフロスの足元まで走り、トリフロスに切り込む。

「はあ！」

気力と魔力を練りこんだ一撃だ。効いた……か？

「ギャオーーーーー！」

僅かだが傷を与えられた様だ。

(どつやら気仙花の一撃は通用したようじゃの)

ああ。少しでも傷を与えられたんだ。光明は見えて来た。

「すごい私たちじゃ傷一つ与えられなかったのに……」

「確かに……」

ティナ達と言う。

(主様！気をつける！トリフロスが腕を振り下ろしてきておるぞ！)

不味いな。あの巨体の一撃をどう防ぐ……？

仕方ない。

「不可視の斬撃！」

俺の魔武器のとおっておきの一撃。これなら！

「ギャオーーーーー！」

「不可視の斬撃なら腕を切断くらいしてくれると思ったが……思ったより鱗が硬いな。切り傷レベルの傷しか与えられないか……」
だが、それでも収穫か。

今の一撃でトリフロスもキレた様だ。

「ギャオーーーーー！」

「くっ！なんて風圧だ！吹き飛ばされそうだし！」

それに威圧感。

後ろの二人がああ威圧感に気を失いそうになっている。

「このままでは……」

（あの二人が死ぬの。いや、医務室送りじゃったか？死ぬのではないな

いのなら、とりあえず
は捨て置いたほうがよいんじゃないかの？

「そういう訳にもいかない。あの二人は俺に
協力してくれた。得体のしれないこの俺にな。だから・・・救える
のなら・・・救いたい
・・・お嬢様を守り通すことはできなかったが・・・あの二人くら
いは救ってみせたい！」

（それが主様の心か。なら儂もその望みが叶
うよう尽力しよう）

頼む！サタン！

俺は怒るトリフロスに突っ込む。

トリフロスがブレスを俺に向けて放ってくる。

「無駄だ！トリフロス！サタンと俺の魔法の防御がある限りブレス
は効かない！」

白銀のブレスは深い闇に打ち消された。

ダーク・ナイトが展開されている今、ブレスは怖くない。

「ブレスは封じたこれで・・・！」

倒せるか？この龍を？

トリフロスはブレスが効かないと分かったのか・・・

その巨軀を活かし暴れ始めた。

「何！無理やり暴れ始めた！これは・・・」

（ブレスよりも厄介じゃのう。攻撃範囲が広すぎるしの）

これでは二人も巻き込まれる！

不味い！

無理やりにも止めてやる！

（正気か！主様！あんな状態のトリフロスに突っ込んだら、ひとたまりもないぞ！）

でも、俺が行くしかないんだよ！

この二人を助けるためには・・・

だから・・・

行っってやる！

俺は再びトリフロスに向かって走りだす。無数の衝撃波に歓迎される。

「ぐっ！」

（主様！）

俺は気仙花を乱舞させる。

「少しでも・・・あの二人を傷つけさせないために・・・」

（っ！主様！もうよい！主様だけならまだこの攻撃から抜けられる！二人は置いていくのじゃー！）

それは・・・出来ない！

俺を少しでも信じてくれた二人を俺は見捨てられない！

絶対に助けてみせる！

今、守りたい人を守れないでいつ守るんだ！

だが俺はトリフロスに押され始めていた。

「ちくしょおお！お嬢様に続いてこの二人も守れないのかよ！くそ！！！」

くそ！

くそ！

時折、不可視の斬撃も繰り出しているというのに・・・

トリフ羅斯は止まらない。

俺の全身が打撲だらけになる。

元々、傷だらけだった俺にはかなりの痛手だ。

俺は吹き飛ばされてしまう。

「しまった！」

そして、龍に攻撃は容赦なく二人を襲った！

そうして二人は消えた。どうやら医務室送りになった様だ。

こんな呆気なく・・・

もしこれが実戦だったら二人は死んでいた。

お嬢様にしてもそうだ。

戦場で気絶したまま放置なんてありえない。

「また、守れなかったのか？俺は。俺の側にいた二人すら傷つけさせてしまったのか？それじゃ何のために強くなったんだ？俺は、俺はー」

（主様！自分を責めるな！）

「くそ・・・くそ・・・俺は・・・」

（主様！しっかりするのじゃ！主様！）

二人を吹き飛ばしたトリフロスは俺に眼を向ける。

そういえば、何でトリフロスの攻撃を深く受けた俺が医務室送りになっっていないんだ？

（それは俺が今まで主様に魔力の供給を利用して主様に薄く魔力防御をしていたからじゃ）

「ああ・・・魔力の供給か・・・俺の防御のために使っていたのか・・・」

そんなもの俺にはいらぬのに。

「ならサタン。頼みがある。今まで俺の防御に使っていた魔力を全て攻撃に回してくれ！」

（それは無茶じゃ！主様に攻撃するために魔力を与えようとも思っただが、主様は傷だらけだった。だから防御に魔力を回したというのに。攻撃に魔力を回したら、主様に負荷がかかり過ぎる。駄目じゃ。あの荒技は今はためせん）

「俺は負けないんだ・・・誓ったから。だから勝たなきゃいけないんだ。守りたいから。まあ、今の俺は大事な仲間を守り損ねた力

「スだけどな」

でもな・・・

守れなかったからこそな・・・

お嬢様。ティナ。セリア。それに・・・ケイル。

この龍に傷だらけにされた四人のためにも・・・

俺は・・・

この龍に負けられない！

その瞬間、ロイから多大な魔力が溢れる。

（なっ！俺が許可していないのに！魔力よ止まれ！・・・止まらな
いじゃと！何故じゃ！俺の魔力が主様に無理やり・・・これでは主
様が・・・）

俺はサタンから無理やり魔力を奪う。

悪いがお前の魔力を無理やり使わせてもらうぞ！サタン！

（辞めるのじゃ！主様！今の主様の傷では僕の魔力に耐えられん！）

それでも構わない。

この龍を倒せるのなら。

（なんとこの勝利への意思・・・主様から主様の気力が溢れておる・・・この勝利への貪欲さが僕の魔力を奪った原因かの？主様のポテンシャルが未知数すぎるの・・・だが、だからこそこの愛しい人を失う訳には・・・！）

俺はサタンに制止を聞かず、トリフロスに挑む。

というか、サタンの声がもう聞こえてない。

もう俺の体が限界を訴えている。

「いくぞ！トリフロス？さっきまでの俺と思っちなよ？」

だが、強がってやる。

「ギャオーーーーー！」

トリフロスが腕を振り下ろす。ロイは魔法による身体強化でそれを躲す。

身体強化か・・・案外上手くいったな。

始めてやるんだが。

「お前の攻撃はこの程度か？なら今度はこっちから行かせてもらおうぞ」

また強がる。責めて態度くらい傲慢じゃないとな。

俺は弱いから・・・

そうやって俺はトリフロスに両手を突き出す。

「俺はもうキレてんだ。トリフロス。悪いがこちらでも死ぬ気で魔法を使わせて貰う。いくぞ！」

そして、ロイの両手から魔力の奔流が出る。莫大な魔力がトリフロスに襲いかかる。

「自分でやっておいて思うが、サタンの魔力が多すぎる・・・！この魔力を支えきれぬのか・・・？」

俺はただ魔力の激流を出しているだけ。反射の反射カウンター・カウンターと同じ原理だ。

「ギャオーーーーーー！」

「悪いな。トリフロス。これは魔法でもなんでもない。ただサタンの莫大な魔力を使って放つ魔力の塊だ。だがこの圧倒的な魔力の激流。お前には耐えられるか？」

これが、俺の全力の攻撃。

サタンが協力的ではないから、俺が思いついた攻撃はこれだけ。

まあ、言い訳染めているが。

そうして、トリフロスは―

俺の魔力に吹き飛ばされ―

倒れ、動かなくなった。

「倒したか？」

ボロボロの俺はただ一人呟く。

「魔物を倒したのに時計のポイントに加算がない？まさか、トリフロスがまだ―いや確かに死んでいるな。ということは、やはり―学園側が把握していない魔物という事か」

ふう。しかしもう限界だ。

いや、もう限界というよりもとっくの昔に俺の限界は超えていた。

これ以上は何も考えられない。

「俺も未熟だなあ……」

あまりにも未熟だ。

そうだ魔力をサタンに返すか。

サタン？

（死ななかつたから良かったものを……主様の馬鹿者！）

ああ。無理やり魔力を使わせてもらったからな。何故お前の魔力が
使えたのかはわからないが……

すまなかつたな。サタン。どうしてもあの龍に勝ちたかつ……う
っ！

（主様！大丈夫か！主様よ！）

また心配をかけてしまうな。サタン。俺は大丈夫だ。ただ意識が不十分なだけで・・・

（それは大丈夫じゃないじゃろ！何故こんなにも主様は傷ついているのに医務室に送られないのじゃ！）

無駄に頑丈だから・・・な・・・

それに・・・まだ・・・

まだお嬢様を保護していない。

お嬢様をお迎えに行かなければ・・・

大切な目的がある限り俺は歩き続けるんだよ。

第二十八話 無理やり借りるぞその魔力（後書き）

誤字脱字半端なかつたので修正しました。

第二十九話 神から教わる反逆の魔法（前書き）

この話、私が後から読んで見たら所謂俺TUEEEEEの要素が入っていました。このような表現は不快ですかね？皆様の反応が見たいところです。うーん・・・不安です。

第二十九話 神から教わる反逆の魔法

お嬢様のもとへ・・・早く・・・

そう思い走ろうとするが、俺の足はなかなか思い通りに動いてくれそうにない。

ティナとセリアを守れなかった分、せめてお嬢様だけは・・・

そう思うのは二人に失礼だろうか？

あの二人は今頃、俺を恨んでいるだろうな。

無力な俺をきつと恨んでいる。

「ははっ」

まあ、仕方ない。そのくらいの評価が俺にはふさわしい。あの二人を守れなかったのは事実なのだから。

だが・・・願わくば・・・

少しでもいいから・・・俺が全力で君たちを助けようとした事を覚えていてほしいな。

ほんの少しでいいから。そう思うのは、我儘かな・・・

お嬢様がいる、森の奥までが遠い。

お嬢様を森の奥に隠した時はたいした距離に
感じなかったんだが……

（それは主様の体が悲鳴をあげているからじ
やろう。それにトリフロスとの戦闘中は僕の声も聞こえて無かった
ようじゃしの）

今も大分聞こえ辛いな。念話で話すことすら億劫だ。

（僕はしばらく静かにするかの。僕を呼びた
くなったらまた念話しての。主様）

ああ……

サタンとの念話を終えた俺は歩く。途中、森
の木々に邪魔されながらも歩く。

本当に俺の体は情けないな。歩くのが精一杯なんて。

無力な証だ。また体を鍛え直す必要があるな。

まだ着かないのか……お嬢様は大丈夫だろうか？

他のチームや魔物にやられてなければいいが……

もう少しでお嬢様のところまで着く。

お嬢様どうか、無事でいてください……

弱い俺は神に祈ることくらいしか出来ない。結局、神頼みか……

神か。サタンにでも祈るとするか……

でも、あんな金髪の美女に拜んでもご利益はなさそうだ……

はあ……自嘲気味の考えしか浮かんでこない。どうでもいいな……

今はそんなことより、お嬢様の元へー

森の奥ー

やっと、森の奥に着いた。お嬢様の隠した場所。

俺はお嬢様を隠した場所へ一刻も早く向かおうとする。

そして、お嬢様の気絶している姿を見つけ安堵するが……

どうやら、お嬢様の他にも人がいる様だ。

無数の人影がお嬢様をとり囲んでいた。俺は森の木々に身を潜める。

不味いな……きつと敵チームだ。しかもここまで生き残っているということはかなり強いチームだろう。

しかも五人全員生き残っている……

男三人に女二人。

この後、あいつ等はどう動く．．．？

「ねえ。この人、アメリカさんよね？どうしてこんなところで気絶を．．．？」

敵チームの女子が話す。

「知らないな。しかし、あのアメリカさんが気絶なんて．．．それほどの敵が？」

「大方、あの落ちこぼれが足を引つ張たんじゃないのか？」

「ああ、先日あのケイルに勝ったとかいう奴か？．．．しかしケイルに勝ったんだからそれなりの実力を持っているんじゃないか？」

「どうだかな。ケイルも最近じゃよく分からないし．．．それにアメリカさんがここで一人気絶しているということは、アメリカさんのチームはアメリカさん以外全滅したんだろ？なら、ケイルもたいしたことは無いんじゃないか？」

「そうかもな．．．それよりここは、危ない。早く立ち去るぞ」

「何故です？」

「アメリカさんを倒した奴がまだこの辺にいるかもしれないからだよ」

「なるほど。確かに危ないですね……」

頼む。このまま立ち去ってくれ……

「なら、アメリカさんはどうする?」

敵チームの一人がチームのリーダーらしき男に尋ねる。

「アメリカさんの仲間もいない様です……少し卑劣ですが……
私たちのポイントのために……」

やめろ……やめてくれ!

「彼女には消えてもらいましょう……」

「ああ、分かった。みんなもそれでいいか?」

「……はい(うん)」「」「」

チームの一人がお嬢様に初級魔法を放とうとしている。

その光景をみて思わず俺は……

「ふざけるな……ふざけるな!」

俺は一人、敵チームに飛び込んだ。

「敵!? 誰!?!」

「貴方は確か……ロイ君?」

「ロイ？あの落ちこぼれのことか？」

「アメリカさんがボロボロなのも貴方にせいなんでしょうね．．．．彼女も可哀想に．．．貴方なんかと同じチームになったせいで私たちに倒されるんですから」

「やめろ！やめてくれ！」

俺は叫ぶ。

「おいおい。平民。貴族には敬語を使えよ？殺すぞ？」

「俺の頭なら何度でも下げる。だから．．．お嬢様だけは見逃してくれ．．．！」

俺は敵チームに向かって低頭する。

「敬語を使えって言ってんだよ！この落ちこぼれ！」

「かはっ！」

俺は敵チームの一人に蹴られた。

「やりすぎじゃないか？」

「落ちこぼれにはあれくらいでいいんだよ。実力もないようじゃこの世界じゃやっていけないからな」

「そうかもしれませんがね」

「じゃあ悪いがアメリカさん。悪いが、医務室へ送らせてもらっよ？」

「お前たちはどうしてそんなに酷いことが出来る！気絶しているお嬢様を無理やり」「それはこの世界の仕組みさ」「何？」

「この世界はどこまでも実力主義なんだ。弱肉強食なんだよ。だから成績のためなら非人道的なことも出来る。それにサバイバルなんだよ？仕方ないだろ？」

「この学生は割り切っているのよ？落ちこぼれさん」

「お前等……」

腐ってる……この学生はみんなこんな考えなのか？

「少し邪魔されたが……アメリカさんを倒すとするか……」

「そんなことはさせるか！」

「おや？落ちこぼれ君？反抗するのかい？まあ、君も医務室送りにさせてもらっよ」

そういつて、一時的に敵チーム全員が俺へと武器を向ける。

「一応、君はあのケイルを倒したと聞いたからね。チーム全員であたらせてもらっよ」

「お前等みたい奴らが集まったところで負ける気はしないな」

「お前！貴族には敬語をと」「お前等を貴族とはもう思っていない！」「なんだと？」

「お前等を貴族とはもう思っていない！他の貴族の学生は知らないが・・・とにかくお前等を貴族とは俺は認めない！成績の為にこんなに傷ついている人をさらに傷つけるなんてそんなことをするやつはただの下衆だ！」

「いつてくれたな・・・！この落ちこぼれが！」

敵チームが俺へと攻撃準備を始める。

五人か・・・だが勝つしかない！

まずは・・・神頼みで悪いが・・・

サタン！

（主様！）

さっきまでの話は聞いていたな？

（あの下衆たちを倒せばいいのじゃろ？それより主様の体は大丈夫かの？そこが心配じゃ）

正直やばいが・・・こいつ等にだけは負けられない！

どんな方法を使ってもセンターハートの縁者に傷をつけようとしたことを後悔させてやる！

「未だ俺が貴族と認めたのは、二人のみ。俺はその人達のための矛となり盾となるう」

俺は自分を奮い立たす。

「いくら強がってもボロボロのお前じゃ俺たちの魔法は防げないだろ？ほら喰らえ！」

「「ファイヤ・アロー！」」

「「ウインド・カッター！」」

風と火の魔法が飛んでくる。回避は出来そうにもない……

なら、俺がする事はまずは防御。この魔法を防ぎきれぬ防御を。

(ならあれがベストじゃろ？主様)

多分考えてることは同じだな。サタン。

「ダーク・ナイト！」

そうして、俺は「夜」の名を持つ魔法を行使する。

その瞬間、この森一帯に闇が広がる。

「何だこの魔法は!？」

「空間を支配しているの!?!」

「まさか落ちこぼれが・・・やったのか?」

「分かりませんが・・・とにかく今はロイ君を倒しま・・・え?」

「どうした!?!」

「あ・・・あれ見て」

「ん?な・・・何?」

貴族様たちが見ていたのは俺が飛んできた全ての魔法を闇で防御した瞬間だった。

「俺たちの魔法が・・・何で・・・」

「そういえば・・・聞いたことがあります・・・模擬戦の時間
一人の少年が闇を操って敵の魔法を次々防御していたという噂を・・・」

「それが・・・あいつ・・・?」

「臆するなみんな!相手はあの落ちこぼれだ!この魔法だってあいつに魔法をうち続けなければいつかは解ける筈だ!」

「そ・・・そうですね!」

「なら僕のとっておきの魔法を・・・アイス・フローズン!」

「それは中級魔法！？凄いですね！？」

「ああ。流石だ。あれならあの闇も防げないだろう。俺等も続くぞ！」

「「ファイヤ・アロー！」」

「「ウインド・カッター！」」

「これで終わったな」

「そうですね。中級魔法に初級魔法の包囲網。防げる術はない筈です……」

「それはどうかな？」

俺は笑いながら言う。

そして闇と氷と風と火がぶつかる。だが全てが闇に吸い込まれるように消えた。

「何……？」

「僕の中級魔法まで……」

「無駄なんだよ。お前らのような奴に突破される魔法じゃないんだよ。俺がもつとも信頼

する奴が教えてくれた守るための魔法だからな」

「ここから先お前らの魔法は俺には通用しない」

俺は言う。

「だがまだ魔武器や使い魔が……」

「俺がそんな事を許す筈がないだろ？」

「！」

敵チームは魔法を俺に防がれ俺にたいして怯えている。背景も夜だから怖さが増すんじゃないか？

だからここは……多少のハツタリを込めて言わせてもらう。

「お嬢様を傷つけようとした奴を俺がそんなに生かしておく必要はないよな？」

俺はあいつらに近づく。闇を纏っているから俺からは異形な雰囲気が出ている。

「おっおい！落ちこぼれ！俺たちに近寄るな！」

（愉快じゃのう。主様。あやつら主様に恐怖しているみたいじゃぞ？自分の理解を超えた事が起きて混乱しているようじゃ）

「自分の理解を超えた事が怖いか？これから何が起こるか分からないのが怖いか？だがいくら恐怖していても、俺はお前等を許す気はない。これからお前等には自分の範疇を超えた魔法を喰らってもら

「う」

「何……」

徐々に声が小さくなる敵。

サタン。こいつ等を吹き飛ばせる魔法を教えてくださいませんか？

（いまの主様に魔力を貸せるのか？それならば出来る魔法なんじやが……）

俺の事は構うな。今はこいつ等に地獄を見せたい。

自分の無力さという永遠の地獄を。

（うむ。わかったの。今から僕が教える魔法の名は「ダーク・リベリオン」）

闇の反逆？

（うむ。ダーク・ナイトとは真逆の魔法での。相手の魔力を吸い取りながら大きくなる魔法

法なんじや。魔法どうしの戦いではほぼ無敗の魔法じや）

だがそれじゃあいつ等に与えるダメージは少くないか？

（安心せい。ダーク・リベリオンは相手の体内魔力ですら吸い取るうとする。つまりは相

手の体から無理やり魔法を吸い取るうとするのじや）

それはー

(そしてどんどん闇が大きくなるという魔法じゃ)

痛そうだ。

(だがやるんじやろう?)

ああ。こいつ等には味わってもらつ。敗北の苦痛を。

「サタン．．．俺に魔力を」

(うむ！)

「お、落ちこぼれから魔力のオーラが！」

「何を．．．何をする気だ！」

「俺の最強の魔法を放つだけだ」

俺は両手を構える。手掌で放つ魔法だから、杖よりは安定性がないな。

まあ、いいか。

「くそ！みんな惚けるな！俺等も迎えうつぞ！」

反抗するのか？まあいいが。だがダーク・リベリオンとはお前等が魔力をこの魔法にぶつける度にパワーを増すんだぞ？

無知とは恐ろしいな。

「アイス・フローズン！」

「「ファイヤ・アロー！」」

「「ウインド・カッター！」」

そしてこちらは、ただ唱える。反逆の名を持つ闇の魔法を。

「お前等には負けてもらおう！いくぞ！ダーク・リベリオン！」

しばらく時間がたった。この森の奥にいるのは俺とお嬢様にだけになっていた。

まだ、ダーク・リベリオンの闇の残滓が残っている。

やり過ぎたか……

サタンから魔力をかりて大分辛い。もう無理だ。何もかもが。

だが、俺はお嬢様の側までのそりと近づく。

そして、サバイバル演習終了時間まで、お嬢様のそばでただ、佇む。

その姿は姫を守る騎士の様であった。

ロイはサバイバル演習終了を告げる鐘の音を聞いて気絶した。

第二十九話 神から教わる反逆の魔法（後書き）

誤字脱字がやばいこのごろ。大事な部分での誤字脱字は避けたいです。もし皆様が読んで不快な誤字脱字がありましたら私に報告してください。全力で直します。ある一人の友人のおかげで誤字に気づきました。ありがとうございます。

第三十話 近づいたら殺す（前書き）

テイナやセリアに心情描写が少ないのは私の独断です。だって急に落ちこぼれが強かったという事実をみても、普通なら戸惑うと思うんですよね……ついでにこの話はトリフロス戦の話です。

第三十話 近づいたら殺す

ここはどこだ？

白いカーテン。白いベッド。白だらけの部屋。清潔感が溢れている。

・・・俺は前にもここにきた事がある。

医務室か。

確か敵チームにキレた俺は敬語も忘れて・・・

不敬罪か？あの時は俺も冷静に頭が回らなかったからな・・・

ヤバイか？

いや、サバイバル演習なんだ。死ぬ気でやらなきゃいけない演習の
筈。実戦では立場など
関係ない。

生きるか死ぬかだ。

そんなサバイバル演習に参加しているのなら、敬語を使わないくら
いの些細なことでは咎められない筈だ。

まあ、分からない。

どう転ぶかな．．．センターハート家に迷惑がかからなければいいんだが．．．

俺は医務室を見渡してみる。医務室全体を見渡してみても、お嬢様やケイルは居ない。

いや、人もあまり居ない。居るのは先生のみ。医務室の先生だろう。

「先生。俺は．．．」

「あら、やっとロイ君起きたのね．．．良かったわ．．．」

「やっと？俺はどの位気絶していたのですか？」

「三日ね」

「三日!？」

俺は三日も寝ていたのか？サバイバル演習からもう三日が経過しているのか．．．

「今回は学園長が貴方を呼んでいるなんて事はないし、すぐ帰ってもいいわよ」

「わかりました。先生」

俺はそう答えると医務室を出ようとする。

「そつえば．．．先生。今は何時ごろでしょうか？」

「もう夜近いわね」

「ありがとうございます」

今から授業だったら、流石に嫌だ。取り合えずすぐ帰ってもいいって事か。

俺は医務室を出た。

学園の廊下ー

今、俺は学園を歩いている。まあ、ただ帰るために玄関に向かって
いるだけだが。

それにしても、学園に残っている生徒が俺をちらほらと見てくるの
は気のせいか？

(いや、気のせいじゃないじゃろつな。俺も視線を感じる。好奇の
目線……探りの目線……様々な目線を感じるのう)

何故、俺を見ているんだこいつ等は？

(おそらく、主様が倒したあの敵チームの五人が主様の事を吹聴し
たんじゃないかの?)

まじか……俺が寝ている間に……

(まあ、推測じゃがの)

そうか。まあ、サバイバル演習でケイルやお嬢様を差し置いて生き残ったのが俺なんだ。注目はされるだろうな。

まあ、お嬢様は生き残ったが。

ほぼ、気絶させてしまったからな……

思いだすのも嫌になる……センターハート家の者を傷つけさせるなんて……

(主様にとってセンターハート家とやらは大きな存在なんじゃの?)

当たり前だ。センターハート家は俺の全てを変えてくれた。俺に人並みの生活を送れる環

境を与えてくれ、ましてやお嬢様の従者としてとはいえ、学園にも通えるんだぞ?感謝してもしたりないな。

とにかく、恩義があるんだよ……

(忠誠とやらかの?)

そうかもな……俺はセンターハート家のためだったら何でも出来る……

命だって差し出してみせよう。

(冗談かの?)

本気に決まってるだろ。

(まあ、センターハート家とやらが主様に命を差し出してくれなん
ていう巫山戯た命令を出すなら儂がどんな手段を使ってもセンター
ハート家を壊滅させるがの)

冗談だろ？

(本気に決まってるじゃろ。つまり儂は主様にそれ程主様を大切に
思っているのじゃよ。主様の為なら命だって差し出してみせるのじ
ゃ)

忠誠か？

(かもの。主様とはそんな堅苦しい関係になりたくはないんじゃが
．．．)

ありがとな。サタン。でも俺はお前に命を差し出せなんて言わない
よ。

俺はお前も守りたいからな。

(ふふつ。主様は相変わらず面白いのう。長い人生の中で守るなん
て言われたのは初めて
じゃよ。儂は．．．強かったからの)

そつか．．．俺はお前より弱いかもしれない．．．だが必ず守
ってやる。

お前はもう俺の中ではかなり重要な存在なんだぜ？サタン。

(あ．．．．．ありがとうの．．．．．主様．．．．．儂も主様を守ろう。
だから、早速忠告させて貰うぞ。さつきから不愉快な視線が主様を
見ておる．．．．．注意するのじゃ．．．．．)

不愉快な視線？

嫌な予感がするな．．．．．

早く帰るに限る．．．．．

俺はそう思い、屋敷へと直ぐ帰った。

一方、学園長室―

私は今、学園に入ったイレギュラーについての報告を見ている。

その名もトリフロス．．．．．

王国軍の一個師団でもかなり辛い闘いになるだろう、このトリフロ
スが学園に侵入してしまった。

しかも一年生のサバイバル演習に。

完全に学園長たる私の落ち度だ．．．．．

その報告を聞いた時は一年生全滅を覚悟した
が．．．．．

次の報告にはもつと驚いた。トリフロスが倒されたというのだ。

報告によれば倒したのはあのロイ君らしい・・・彼は何者なのだろうか？

私でもトリフロスとは激戦になるというのに・・・

彼はもうギルドや軍の即戦力になれるんじゃないでしょうか・・・

まあ、その事は置いときましょう。

今、私がしている事は二つ。まずはトリフロスが学園にどうやって入ったのかという事の調査。

後はロイ君の調査。

今は手軽？なロイ君の調査をしています。

ロイ君の調査に当たって感知魔法が得意なファイネス先生に協力を仰いでいます。

「では、ここからロイ・カーレス君の調査をお願いします。ファイネス先生」

「わかりました。学園長」

本当は生徒を探ったり裏切るような真似はしたくないのですが……ロイ君……貴方は未知数すぎる……

私はファイネス先生の感知魔法を見ていた。相変わらず見事だ。彼にかかれば人物の調査など直ぐ終わる。

私は期待しながら調査の結果を待っていたが――

ファイネス先生に異変が起こった。

「なっ！何だこれは！」

「どうしたんですか？ファイネス先生？」

「暗い……闇……美しい悪魔……近づくな……殺す……」

「大丈夫ですか！ファイネス先生！」

ファイネス先生の様子がおかしい。それにファイネス先生の感知魔法が黒く染まっている。

まさかファイネス先生の感知魔法が逆探知されているのですか!?

「辞める・・・辞めてくれ・・・俺をそんな目で見るな・・・辞めるお！悪魔があ！」

ファイネス先生がまさに発狂している。何が起きている？

ファイネス先生が何故こんな事に？

いや、まずはファイネス先生を助けなければ！

ファイネス先生の感知魔法を私の魔力でぶち壊す。

「ぐわっ！」

無理やりだがこれで取り合えずは相手とのリンクは切れた筈・・・

「ファイネス先生大丈夫ですか？」

「はぁ・・・はぁ・・・ええ・・・大丈夫です・・・」

「何が起こったのか教えてくれませんか？」

「わ・・・わかりました。ロイ・カーレスの調査をしようと思い、
ロイ・カーレスを感知しようとしたところ・・・邪魔されたのです・・・」

「邪魔？誰にですか？」

「誰に？あれは人なのか？金髪の悪魔・・・とにかく、悪魔が私に
言っただけ・・・きたのです」

「何とですか？」

「主様に手を出すのなら、滅ぼすと、」

「悪魔ですか・・・とても信じられませんね・・・ロイ君はその悪
魔と繋がりが？」

「それは・・・わかりませんが・・・俺としてはもうロイ・カーレスには関わりたくないですね。すみません。学園長。私はもうこの調査降りさせていただきます」

「貴方にそこまで言わせますか・・・」

「ええ・・・こちらも命は惜しいので。それにもしロイ・カーレスがああ悪魔と繋がりがあんなら、ますますロイ・カーレスとは関わりたくないですね」

「どついう事ですか？」

「あの悪魔と対等に話せる人間がまともな訳ないじゃないでしょう。それほど・・・あの悪魔は・・・」

「わ・・・わかりました・・・ご協力ありがとうございます。ファイネス先生」

「では、学園長。私から最後の忠告をさせていただきます。ロイ・カーレスには関わるな。これが最善です。では」

そう言ってファイネス先生は学園長室から出た・・・

ロイ君・・・か・・・

私は彼をどう扱えば・・・

彼には悪魔でも憑いているのでしょうか？

調査をしていますます彼が分からなく・・・

取り合えず、ファイネス先生の言うとおりの様子を見ましようか。
幸い、彼は人格は温厚な様ですし。

彼は何者何でしょうか？はあ・・・

第三十話 近づいたら殺す（後書き）

不憫な学園長。ただそれだけです。しかし、学園長にも再びロイへの疑念が・・・

第三十一話 プライド（前書き）

前の話でサタンの忠義を書けていけば・・・いいな。あと誤字脱字
報告よろしくお願いします。よければ・・・感想も・・・。調子乗
りました。すいません。

第三十一話 プライド

(一仕事終わったの。虫けら排除完了じゃ)

一仕事？何かしてたのか？サタン？

(何でもないの。ふふふっ)

なんか機嫌がいいな。まあ、「仕事」とやらがお前の為になったんなら俺も嬉しいよ。

(今考えると仕事という表現は間違いじゃの。俺はただ忠義と主様のために・・・)

なんか言ったか？サタン。

(な、何でもないぞ)

そうか。

(今はただこの方をお守りしなければ・・・この方に危険が近づ

かないように・・・)

そう誓うサタンだった。

センターハート家、屋敷ー

サタンと話をしているうちに屋敷に着いた。お嬢様とはサバイバル演習から会っていない。学園にお嬢様は居なかったから屋敷にいると思うが、サバイバル演習の傷は完治しているだろうか？

ご無事を願う。まあ、三日もあれば学園の最先端医療のおかげで大抵の傷や病気は治るんだが。

ついでに俺は、傷はすぐ治ったんだが、疲労がなかなか抜けず三日間眠りっぱなしだったらしい。

ともかく、俺は一目お嬢様の無事を確認したかった。

俺は屋敷じゅうを歩き回る。

そして見つけた。

センターハート家の書庫で。

黒髪の似合う、俺が生涯守ると誓った女性を。

お嬢様を。

ひとまず良かった。何か声をかけたいが、向こうもいきなり話しかけられたら困るだろう。

お嬢様が無事ならそれでいいか。

そう思い俺は書庫から出ようとするが―

「！・・・荷物持ち！」

なんとお嬢様から声を掛けられた。本でも運んで欲しいのだろうか？

「何でしょうか？お嬢様」

俺はひとまずお嬢様に向き合う。相変わらず美しい人だ。夜に特徴的な黒髪がなびく。

「あんたに伝えたいことがあるの」

伝えたいこと？何だろうか？

「私はね。荷物持ち。今まで人に守られた事なんて無かった。努力だけで全てをこなせると思っていたの」

お嬢様の独白が書庫に響く。

「それが私なりのプライドだった。だから私は努力し続けたし、それに比例して学園での成績も上がっていったの」

俺は無言で聞き入る。

「だから私は自分の事を誇らしく思っていた。今思えば、自意識の過剰ーまあ、それは置いとくとして、とにかく私は、私はね。自分を強いと思っていたのよ。そして、サバイバル演習の時、私はテナさんの制止も聞かずあの籠に挑んでしまった」

お嬢様・・・

「そのせいで・・・私はあんたや他のみんなまで傷つけて・・・そのくせ自分は生き残って・・・いや、それはあんたが守ってくれたからか・・・とにかく、私はあんたに伝えたいの・・・本当にごめん下さい！」

お嬢様が俺に謝罪している・・・今まで誰にも引く事を知らなかったお嬢様が俺に頭を下げている。

そんな事はどうでもいいのに・・・

お嬢様が無事でいられるなら、俺は地獄に送られてもいいのに。

俺を傷つけたくらいで謝ることはないのに・・・

「お嬢様。 顔を上げてください」

俺はお嬢様に優しくなるべく優しく声をかける。

「本当にごめんなさい・・・本当にごめ「お嬢様」え？」

俺はお嬢様の言葉を遮る。 明日はお嬢様の言葉を遮ってしまった罰

として中庭百週だな。

「謝らなくていいんです。俺はお嬢様の従者何ですから。俺にまでその様子という事は他のみんなにももう謝ったのでしょ。だからいいんです。他の人はともかく、俺はいいんです。俺はお嬢様を守れたのならそれでーそれでいいんですから」

うわあ。気障すぎるな。なんだか恥ずかしい。

「荷物持ち……」

お嬢様が俺を見る。

「だから、お嬢様。失礼を承知ですが、従者としてはごめんなさいという言葉より……」
「ありがとう」という言葉を聞きたいのです」

ごめんなさいという言葉はいらない。俺は自分の体がどうなるかと知ったことではないから。だが、感謝の気持ちは違う。それを聞くだけで前に進める。

「ありがとうか……」

お嬢様が呟く。

「だから、お嬢様。もし俺に何か言いたいことがあるのなら・・・
ごめんなさいではな」「ありがとう」「く、え?」

「だから、ありがとう!!助けてくれて、ありがとう!!」

お嬢様が初めて俺に・・・感謝を・・・

「はあはあ。これでいいのかしら?」

「はい。その言葉が何より俺を前に進ませてくれます」

俺は笑顔でお嬢様に言う。

「っ!その笑顔は・・・少し反則ね・・・こんな状況で・・・」

「何ですか?お嬢様?」

「なっ何でもないわ!とりあえず伝えたいことは終わり!あんたには本当に感謝しているわ。セリアさんとティナさんもあんたに感謝していたし」

「お二人が・・・感謝・・・？」

「ええ。あの籠から守ってくれたってね」

守ってなどいないのに・・・そんな不当な評価・・・

でも、嬉しい。

「そう、ですか・・・」

「そうよ。それにしてもあんだ、私が傷ついてる間に妙な魔法で敵チームを屠ったっ本当？」

敵チーム・・・お嬢様を守るために戦ったあれだろうか。妙な魔法・・・ああ。ダーク・リベリオンか。

「はい、事実だと思いますが・・・」

「あんだ、この三日間凄い噂だったわよ」

「はい？」

「あんたが倒したチームがあんたのことを「死神」とか「破壊神」とか……」

「まさか俺があいつらを倒したことを？」

「ええ……だから、あんたは今学園のみんなからセンターハートの死神とか、とにかくいろいろ悪目立ちしてるわね。トリフロスの死体が残っていたのもそれに拍車をかけているわ。あんたがトリフロスを倒したとかホラをふくやつもいるし……」

俺がトリフロスを倒したんだが……まあ、悪目立ちする必要もない。黙っておくか。

「まあ、主人として言わせてもらおうなら、注意してね」

「わかりました」

サバイバル演習では、悪目立ちしすぎたか……

まあ、お嬢様を守るためだったんだ仕方ない。

「あっ！そうだともう一つあなたに伝えたいことがあったわ！」

何だろうか？

「実はセントラル城で王様主催のパーティーがあるんだけど来ない？私と一緒に」

パーティー？いつもはセンターハート家の統括執事リコードさんが一緒に行っていた筈では？

もしかしてお嬢様なりのお礼なのだろうか？

「べ、別にあんたが来たくないなら・・・いつも通りリコードを連れて行くんだけど・・・」

パーティーか。貴族だらけの場所か・・・まあ、お嬢様が誘っているんだし行くか。

「わかりました。自分には不釣り合いですけど、行かせていただきます」

その瞬間お嬢様の顔が輝く。

「そっそう！なら明日の夜よろしくね！荷物持ち！」

「わかりました」

お嬢様・・・俺をパーティーなんか誘っていい事でもあるのだろうか？なぜそんなに嬉しそうなんだ？

まあ、お嬢様が笑顔なのはいい事か。

そうして、俺たちは書庫から出て、互いに自室に向かった。

会話の後、アメリカの自室―

「うっ誘うつもりなんかなかったのに」

何で私は彼をパーティーに誘ったのだろうか？

咄嗟に言ってしまった・・・

「父様になんて言ってリコードさんを行かせないようするか・・・」

どうでしょうか？

私は彼を思わずパーティーに誘った。

何故かはわからない。

だが、何故だか誘った理由がわかる気もする。

「まあ、明日は彼と共にパーティーに行きましょうか。父様や貴族が集まるパーティーに。明日はよろしくね、「ロイ」」

アメリカが深層意識でロイに好感を持っているのは言うまでもない。

第三十一話 プライド（後書き）

この作品をよろしく願います。私は必死です。必死で書きます。あと前の話の悪魔ってサタンだってみなさんわかりました？分からなかったのなら、私の文才のせいです。すいません。

第三十二話 パーティー（前書き）

アメリカ（お嬢様）からのパーティーのお話。あとp.vがマジで十
万越えしててビックリしました。皆さんありがとうございます！！
そして、これからも誤字脱字報告と感想をお待ちしております。皆
さんの閲覧記録が私の執筆意欲のつながります。これからもこの作
品をよろしく願います。

第三十二話 パーティー

今は夜。

昨日、お嬢様から誘われたパーティーへ行く日の夜。

俺は今、使用人なのに貴族のパーティーの正装？のタキシードを着せられていた。

執事用のモーニングコートなら着たことはあるが・・・タキシードとはな。

俺には似合わないと思う。

だが、お嬢様曰く

「私の横に立つならそのくらいの格好はしなさいよね！」

らしい。

しかし、従者としてパーティーに行くのになぜこんな格好に・・・

いつもお嬢様のパーティーの付き添いは普通の従者服で行くの……

まあ、いいや。

俺はセンターハート家の玄関から外へ出る。

どうやら、お嬢様とラザイン様がパーティーへ向かうための馬車を
手配している様だ。

俺が馬を捌くのかな？

そんな思考をしていたら、ラザイン様に苦笑された。

「ははっ。ロイ君。君はどうやら相当アメリカに気に入られたよう
だね」

はい？意味が良くわからないのですが……

「その顔は私の言っていることが良くわからないって顔だね。まあ、
セントラル城のパーティーに着いたらわかるさ」

「そう・・・ですか」

そんな会話をしばらくしていたら、馬車に着いたようだ。

馬車の運転手がいたので、馬車の運転を俺がしなくてもいいみたいだが・・・

だったら俺はパーティーで何をすればいいんですか？お嬢様？

給仕の仕方なんて知りませんよ？

はあ・・・

不安だ・・・

俺は馬車の中にラザイン様とお嬢様と一緒にいる。

馬車の中はとても広い。それに暖かった。

馬車はいいな。俺が歩かなくても進んでくれる。

目まぐるしくかわる景色の中で俺はある事を考えていた。

それにしても、随分遠い所まで来たなあ。

最初はラザイン様に拾われて。従者としての作法をマスターして。

平民としての差別を受けて。

学園へ行き。

貴族を模擬戦で倒し。

白銀の龍と戦い。

そして今はパーティー。

一年前の俺からは考えられないような毎日だ。

少なくとも、目の前にいるお二人とこんな馬車に乗る未来を一年前の俺からは想像できない。

それほどの身分の差があるのだ。

何だか・・・何て言えばいいのか・・・

ここまで、来るのに色々あったが、今お二人が過ごしているような
平和な時間を俺はお二人のために作っていききたい。

俺がここにいるのはこのお二人のおかげなんだから・・・

本当に遠くまでき・・・た・・・

あ・・・れ・・・？

思考が深くなりすぎて・・・眠く・・・

そんな・・・お二人の前なのに・・・

居眠りは・・・

ああ。

もう馬車特有の揺れの前に耐えれそうにない。

はあ・・・意識が・・・

セントラル城

「ちょっと！荷物持ち！起きなさい！着いたわよ！」

ん？声が聞こえる。

「は・・・い？」

「しっかりする！」

「はい！」

どうやらセントラル城まで着いたみたいだな。

それにしてもセントラル城・・・さすがの大きさか。

荘厳な佇まいである。

平民の俺が入れる場所では無いのだが・・・

貴族のトップに近いラザイン様の付き添いの俺は特に咎められる事なく、城に入る事ができた。

ラザイン様は顔パスだ。

お嬢様もな。

城・二階ホール（パーティー会場）

はあ。どうやら、パーティー会場に着いた様だ。

俺は何をすればいいんだ？

「ラザイン様、俺は何をすればいいのですか？」

「それは・・・アメリカに聞くといい」

「はあ。では」

俺はお嬢様に近づく。

ついでにラザイン様は貴族仲間と優雅に話している。

「お嬢様。お嬢様に言われた通り正装までしてパーティーに来たのですが、俺は何をすれば・・・」

俺は何をすればいいんだ？

「それは・・・パーティーの最後にわかるわ！とりあえずパーティーをブラブラしてなさい。その格好なら貴族だと思われるから怪しまれないわ」

はあ・・・ブラブラ・・・ですか。従者としての仕事もせずには？

貴族と同じように過いせと？

「わかりまし・・・た」

「よし！私は少し用事があるから、またね！」

「お、お嬢様！」

「大丈夫よ。あんたに来てもらったのにはちゃんと理由があるから
そう言いながら、俺から去って行くお嬢様。

困った。

パーティーでやることが全くわからん。

サタン知ってる？

(世俗には疎いのじゃ・・・)

さいですか。

タキシード姿で言うことではないが、俺って場違いじゃね？

こうなったら、お嬢様の用事まで隅の方で過ごすか。

俺はこのとき、気づいていなかった。俺の事を興味深そうに見ているある一人の視線に・・・

(この視線は・・・まあ、敵意は無いようじゃし、どちらかといつと心配かの。まあ、捨て置いてもいいかの)

そんな事を思うサタンであった。

第三十二話 パーティー（後書き）

次回、視点変更あるかも（ないかも）。予定では・・・未定です・・・あと、今回短いですね。すみません。時間が最近とれず・・・では、また次回に会いましょう。

第三十三話 セントラルの王女（前書き）

この話ですね・・・データが吹き飛びまして・・・最悪でした。書き直しなので記憶が曖昧に。表現が稚拙になっていたら教えてください。元々、稚拙ですけど・・・

第三十三話 セントラルの王女

私の名前はエニア・シャンドル・セントラル。この国の第二王女だ。今日は父に言われてパーティーに参加していた。ついでに第一王女である姉は仕事である。

セントラルの魔法学園の生徒である私とは大違いの大変さだそうだ。

姉の話の話を聞いていると私はこんなパーティーに出ているのかと思ってしまう。

なんだか、気乗りがしなかった。

しかし、今日は一年に何回かある、王主催の大規模なパーティー。姉はともかく、私は強制的に父に参加しろと言われていた。

私は王女という複雑な立場であったので、あまり学園に友達はいなかった。

パーティーでは貴族の子供は友達同士で楽しんでいることが多い。

だから、私はパーティーで孤立していた。

たまに男の人が私を話に誘おうとするが、私の顔をよく見て王女とわかると、離れて行く。

王女も寂しいものだ。会話もままならない。別に気がねしないでいいというのに。まあ、私が話の輪にいたら話づらいのだろう。

だから、私はなるべく一人になるようにしている。

早く父がパーティーを切り上げてくれればいいのだけど。

会場の隅の方でじっとしてようかな。いろいろ社交辞令やおべっかは言われたくないし。

私が会場の隅へ行くとそこには先客がいた。

彫りの深い精悍な顔つきに鋭い眼つき。全身黒づくめのタキシード。どうやら貴族の子供の様だ。

私は第二王女で学園の生徒でもある。ほとんどの学園の貴族の子供とは一応知り合いなのだが・・・

こんな人いましたっけ？私と同年代くらいの年齢に見えるのだけど・・・

こんなに目立つ外見なら絶対に私は忘れないし・・・

少し彼に興味が出て来た。しかし、王女とばれたら、敬遠されるかな？まあ、そしたらそれまでだ。

私は普段から社交的ではないのだが、この時ばかりは何故か彼に話しかけてしまっていた。

「少し私とお話しませんか？」

ん？声の主を見ようと振り返るとそこにはえらく美しい少女がいた。

ていつか銀髪つて。王様と一緒にだな。珍しいな。

ていつか何で俺と話したいんだろ？あ、まさか！何か粗相をしてしまったのか・・・？まずいな。こんな貴族達が集まる場所でお嬢様に迷惑はかけられない。それに平民とばれたら厄介事になりそうだし。貴族のマナー？が分からない。

丁重にお帰りくださいといたいが・・・

まあ、ここは貴族らしく接して早々に話を切り上げるか。

サタン。貴族ってどんな風に演じればいいと思う？

(悪いの主様よ。儂は俗世間には疎いのじゃ)

そういえば。そうだったな。仕方ない。自分で考えるか。

そういえば、名前を聞かれていたな。

「俺はロイと言います。貴方のお名前は？」

こう答えた。「俺」ではなく「私」や「僕」の方がいいのか？

もう遅いが。

そう見知らぬ少女に言葉を返すと、少女がばれてない。よかったです。と小さくいいながら喜んでいた。何がばれていないんだ？

「あつ。私の名前はエニアです。宜しくお願いしますね。ロイ様」
俺に様付けなど要らないのにな。まあ、貴族モードの俺は訂正できないが。

それにしてもエニア……どこかで……？

「こちらこそ、宜しくお願いしますね。エニア様」

そう俺は笑顔で言ってみる。作り笑いだ。しかし、エニアという少女は恥ずかしそうにうつむいてしまう。

くそっ！失敗した。うつむかれてしまうほど見るにたえない顔だったか……

「それでロイ様に聞きたい事があるのですが……よろしいですか？」

聞きたいこと？何だろうか？

「ええ。いいですよ」

どうでもいいが貴族と従者って言葉遣い変わんないな。どっちも敬語でいいし。

「失礼ですが、貴方は何処の家系なんですか？みたところ、私に近い年齢ですし……し

かし、私は貴方の事を今まで見たことがありませんし」

俺の顔から血の気が消える。な……なんて答えればいいんだ……

「どうしたんですか？ロイ様？」

やばい。ここでただの平民と答えてもいいのだろうか？いや……何かまずい気がする……

ん？でも連れて来てくれたのはラザイン様だし……規則的にはいいのか？

しかし、平民と答えて一悶着あるのは避けたい。

ここは……

「俺の家系ですか……それは……」

「それは？何ですか？」

「秘密です」

俺は気障っぽく笑顔でそう答える。

ダメかな？こっちは本気で秘密にしたいんだけど……

「もっつ。ロイ様！私が子供っぽいからってからかっているんですか!？」

いえいえ、こちらは本気で秘密にしたいんです……！

「いやいや……違いますよ……あははは……」

俺たちはしばらく問答を続けていた。

「おい。あそこの隅の方で話しておられるのは姫様じゃないか？」

学園の1-A所属のカインがそう言う。

「ああ、確かに。大陸一の美姫と名が高いあの方っぽいな」

確か……エニア様というお名前だ。あまり表舞台には立たない方だが……な。

「それでよあのエニア様の横にいる男、あいつじゃねえか？」

「あいつ？」

「最近、死神と名が高いあいつだよ」

なっ！そんな訳が……平民がパーティーに紛れ込むなんて前例がないぞ！？

「な？だろ？」

「本当だ・・・」

カインのいう通りエニア様と話しているお方は・・・落ちこぼれと言われていたロイだ。

これは・・・

「王様に報告した方がいいかな？」

「アメリカさんが連れて来たんじゃないのか？」

「だとしても、平民が貴族のましてや王女と話すなんて問題だろ？」

「そうだな・・・」

俺たちは父達に事情を説明し、王様に報告する様に頼んだ。

それを横で聞いていたアメリカは・・・

「荷物持ちが！・・・まずいわ・・・やっぱりパーティーに連れて行くのは迂闊だったのかしら・・・しかし、国の定めには違反してないから・・・うーん、どうなのかしら・・・」

アメリカは悩んでいた。

何か・・・寒気がしたんだが・・・気のせいかな？

「いいかげん答えて下さいよーロイ様」

「すみません。本当に答えられないんです」

「何ですか・・・せめてその理由だけでも・・・」

いや、センターハート家に迷惑がかかる可能性は一つでも潰すべきだからな。

話す訳にはいかないんだ・・・すまないな。エニアさん。しかしエニアってやつぱりどこかでー

その瞬間ー

「僕の大事なエニアに平民がとりついておる！！引き剥がせ！！王国軍王直属部隊よ！！」

「っっはっ！！仰せのままに！！」

パーティー会場にセントラルの王の大きな怒号が響いた。

ああ。思い出した。エニアって・・・

王・女・様じゃん。

はあ。

サタン。俺、不敬罪で死んだかな？

(わからんの。しかし、主様。僕が全力で守るから安心せい！)

またセンターハート家に迷惑が・・・

やっでらんないよ・・・本当に。

第三十三話 セントラルの王女（後書き）

- ・ はあ・・・書き直しなのであんまり・・・書き上げても達成感が・・・

第三十四話 強さこそがこの世界の全て（前書き）

この王様は有能な王様です。しかし、少し力への拘りが……。まあ、詳しいことは本編でわかります。

第三十四話 強さこそがこの世界の全て

俺はパーティー会場のだ真ん中で衛兵達に包囲されていた。

いや、王様の直属部隊とか言ってたな・・・衛兵ではないのか。どちらにしてもまずいな。王女と平民が話すのはまずいと俺でも思うし。いや、それ以前にパーティーに参加して良かったのか？

あの玉座の人の怒り様・・・どうやら王様を怒らせてしまった様だ。

弁明するしかない・・・

そう俺が必死に言い訳を考えようとしていると威圧的な声が響く。

「エニアの横にいる平民よ!!」

っ!!何て気迫だ!!あの気迫は・・・王様か!

「お前は平民でありながら王族であるエニアと会話した。その意味がわかるか？」

老練な雰囲気を纏う王が俺に問いかける。くそ!王の雰囲気に呑まれて思考が鈍る・・・

「意味ですか・・・?」

質問に質問で返してしまった!まずい!最悪だ!上の立場の人と会話するときの最悪の悪手だ!

「ほう。やはり理解できておらぬ様だ。ならば教えてやろう。王族とは即ち、国の礎。かつて国を切り開いた絶対的強者。おまえはそんな存在に声をかけたのだ。ただの平民が!!」

なんて・・・なんて威圧だ・・・足が竦む・・・立っているステーションが違いすぎる・・・

「本当にすいま「謝ればすむことではないのだ。平民」

やはり・・・何か罰則があるのか？

「私が主催する貴族の親睦を深めるパーティーを阻害しただけでなく、立場を弁えない愚かな行動。前代未聞の事ばかりだぞ？平民。特に王族と話した罪は大きい。よって平民。」

お前は死罪とする」

・・・死ねたことか？ただ、少し王族と話しただけで・・・？ありえない・・・だろ？なんで貴族の奴らは何も王に反論してくれないんだ？俺の周りに集まっているのに。

おい・・・本当にか？死罪・・・？俺の視界が暗くなる。冗談みたいな展開に乾いた笑いすら出ない。こんな一瞬で人の命の裁量が終わるのか。

「待って下さい父上!!話が性急過ぎます!!それにロイ様に話しかけたのはわた」

エニアが王に声をかける。

「エニア!!」

「ひゃ！」

「お前は王族としての自覚がないのか？王族とは常に絶対的な存在でなくてはならん。それを平民に踏みにじられたのだ・・・この処置は妥当なのだ」

「そんな・・・ロイ様が平民・・・それに死罪・・・」

エニアの顔から気力が抜ける・・・

「私が話しかけなければ・・・私のせい・・・また私の・・・」

「その平民を城の闘技場へ連れていけ！そこで処刑する！！」

「・・・はっ！！！！」

王様の直属部隊が俺を拘束しにかかる。俺はまだショックから抜け出せていなかった。

（主様！！逃げるのじゃ！！このままでは・・・）

「お待ちください！！陛下！！！！」

そんな中、俺はある貴族の声により覚醒する。この声は・・・ラザイン様・・・

「貴様は・・・！ラザインか！」

「はっ！たいへんお久しく」

「ああ。久しいな。確かレーナが死んだぶりか・・・お前が部隊をやめた時は我が半身が無くなったようだったぞ」

「恐悦至極でございます」

「今から、その平民を連行してからまた話すでしょう。積もる話もあるからな」

「陛下！その事でお話が！！」

「なんだラザイン。お前ともあろう者が声を荒げてどうしたのだ？」

「その平民。ロイ・カーレスをパーティーに連れてきたのは私です。ここは私に免じてこ

の場は穩便に済ませてくれませんか？センターハートからも賠償金は払いますので・・・責めて死罪は・・・」

センターハートから賠償金！？そんなのダメだ！！そんなことになるなら死罪を選ぶ！！

俺は兵士に拘束されているので話せないがラザイン様に必死に目でメッセージを伝える。

「ふうむ。重宝しておる平民なのか？しかし替えはいくらでもいるだろう？」

「お願いします！・・・」

「うむ……」

ラザイン様は深く王に頼み込む。王は何かを検討しているようだ。
・
くそっ！俺はなんて無力なんだ！！目の前の死を恐れて震えてるだけじゃないか！

なんですって……？荷物持ちが死罪？馬鹿な。王族とはいえ、極論過ぎる。この国の平民はそんなに立場が低い……？

私が父上に荷物持ちをパーティーに連れていこうと言ったから……
ただ「ありがとう」の気持ちを荷物持ちに伝えたかっただけなのに
・
・

なんでこんなことに……なんでこんなことになるのよ！！

目の前では私の父があゝの暴王に頭を垂れながら必死に荷物持ちを助ける妥協案を模索している。

そのおかげか知らないが……暴王が何かをひらめいた様だ。

「仕方あるまい。お前ほどの男の頼みだ。死罪は取り消そう」

「ありがとうございます……！」

いままでの王とラザイン様のやり取りを見ていた貴族達がざわざわと騒いでいる。

王の右にいる男が何やら王に耳打ちしている。

俺の死罪はどうなる？何れにしてもセンターハート家にまた・・・

俺はいつまで甘えているんだ・・・

そして王がある一言を言い放つ。

「しかし、その代わり古くからの罪の有無を決める方法を取り入れよう」

「まさか陛下・・・あれをやらせるつもりで・・・！！まだロイ君は子供何ですぞー！！」

「死罪よりはましだろう？ラザイン？」

ラザイン様が声を荒げた。罪の有無を決める・・・？

そして、王が芝居がかった仕草で会場内によく通る渋い声を轟かせる。

「即ち決闘だ！・・・！」

そして、周りの貴族から歓声が挙がる。

何だこの異様な空間は・・・この国の貴族は俺が思ってた以上におかしいのか？

決闘・・・どういつ決闘をすればいいんだ？

一度は死を覚悟したんだ。決闘くらいやってやる・・・

「陛下それはあまりにも酷過ぎ・・・」

「それ以上の譲歩はできないぞ？ラザイン」

ラザイン様が苦虫を噛み潰したような顔をして引き下がる。

「では、その平民よ。お前には今から私が指名した相手と決闘をしてもらう。その相手を戦闘不能にしたらお前を無罪としよう。だ
がお前が戦闘不能になった場合・・・お前は死罪だ」

結局、勝たなきゃ死か。

「生きたければこの私に強さを見せてくれるがいい！！平民！！強ければ何もかもが許される！！ここはそういう世界だ！！」

やってやる・・・！！生きてみせる。そして笑って明日を迎えてやる。

「私が指名する騎士は騎士序列第八位のジュイスだ。せいぜい足掻け。平民」

そうして、俺は結局、闘技場へ連行される。

強くあればそれが法という訳か・・・

第三十四話 強さこそがこの世界の全て（後書き）

次回は決闘かな？しかし、お気に入りが百五十件なんて感謝の極みです。ありがとうございます。これからもこの作品をよろしくお願ひします。ああ、お気に入りを増やしたいですね。切実な思ひです。

第三十五話 勝たなきゃ死ぬから(前書き)

早いもので三十五話。一話、一話の文章量が少ないせいかな?とにかく、三日連続更新です。頑張りました。よろしければ、見てください。

第三十五話 勝たなきゃ死ぬから

俺は王の部隊に城の闘技場へ無理やり連れてこられていた。

実際に闘技場へ来ると気分が悪くなる・・・

きっかけは、些細なことだった。パーティーに来た。王族と話した。それだけだ。だがその些細なことのせいで俺は今から、王国軍の騎士序列八位のジュイスさんと戦わなければならない。

王国軍騎士序列八位って・・・国軍の中でも八番目に強いってことだよな？あまり死罪と変わらない気がする・・・

死罪と違い足掻くことはできるが。ここで、負けるわけにはいかないな・・・

まだ俺は俺の人生で何も目的を成し遂げていない。ここで死ぬわけにはいかない・・・

ん？パーティーに来て何で俺は死にかけてるんだよ・・・

やっぱり俺には浮ついたものは似合わないってことか。まあ、俺らしいな。パーティーなんて柄じゃないしな・・・

決闘くらいの理不尽さが丁度いいのかも、な。自嘲的過ぎる気持ちするがな。

王が闘技場の観客席に登る。

わざわざ平民一人の為に苦勞様だな。王様さん。

どうしても捻くれた考え方になってしまう。

「ふむ。では古来からの罪の有無や対立の解決に使われてきた、決闘を開始する、と私から宣言させてもらおう。私からの推薦者、ジュイス・レンティア・イサラーシャは闘技場へ入場せよ」

「はっ」

そんなやりとりの後、俺が今いる闘技場のロシアムに一人の青髪の女性が向かって来る。

この女性がジュイスか・・・しかし、纏う覇気は男のそれを凌駕するものを感じる。

油断できない。いや、こちらは格下だ。油断などしている暇はない。全力で挑まなければ・・・瞬殺されるだろう。

それほどの気を目の前の女性からは感じる。超えてきた死線の数が違うのだろう。俺みたいな学生が勝てる道理もない。だが・・・やるしかない。なら、やってやる・・・

勝つさ。生きるにはそれしか道がないのだから・・・

「では、両者構えよ！」

王ではない、誰かの凜とした声が響く。

「王国軍王直属部隊のジュイスだ。一応、騎

士序列は八位などと言われている。貴様には悪いが、私も仕事だ。学生とはいえ、手加減はしない」

ああ……ジユイスさんとやらは思ったより、真面目な騎士だったな……良かった……脳みそが腐りきった奴とは戦いたくは無かったからな。これなら、公平な勝負が出来そうだ。

「ええ。こちらこそ全力で挑ませて貰います」

そして、観客席から声が響く。

「決闘を開始せよ!!」

そして、俺の命を賭けた戦いが始まる……

「荷物持ち……」

私は父さんと闘技場に來ていた。他にも王の他に物好きな貴族は何人か闘技場に來ている。わざわざ一旦パーティーを抜け出して。

そんなに戦いに飢えているのかしら……いや、荷物持ちがやられるのを見ただけかしら。平民の公開処刑みたいなものだものね。私の父も嘆いていたもの……

「アメリカ。私が進言したのにもかかわらず

、こんな結果になってしまってますまない」

「父さん……」

「決闘なんて・・・ロイクくんはまだ学生だといふのに・・・残酷すぎる・・・いや、いつだって貴族は平民のことを慮げてきたか・・・」

父が語る。確かにこの国の貴族は平民に冷たい・・・

「ジュイスは全盛期の私でも苦戦する相手・・・ロイク・・・くそ！私がいながら！」

父が悔しそうに拳を握りながら話している。

「でも・・・父さん・・・私は信じてる。荷物持ちが勝つ未来を・・・」

「アメリカ・・・そこまで彼の事を信じて・・・わかった。私も信じよう。彼が彼女に勝つ未来を・・・」

私たちは祈る。荷物持ちが勝つ未来を・・・

まだ私の用事は済んでないのよ・・・荷物持ち・・・だから・・・戻ってきて・・・早く・・・

私、エニア・シャンドル・セントラルもそのころ闘技場で祈っていた。

思えば、彼は不思議な人だった。何もかもを見透かすような目。冷徹な雰囲気。そして、滲み出ている強い心。

最初は単なる興味から彼に話しかけた。だけど、彼と話す内に何故か満たされている自分がいて・・・

私は本来、男のひとを気にするような性格じゃないのに・・・

今はその話は関係ない。とにかく、私は彼に・・・勝ってほしい・・・

「私の・・・私のせいだから・・・いつも王女なんて立場のせいで私は他人を不幸にする・・・」

ロイ様のことだって、私のせい。久しぶりに他人に興味を持ったらこれだ・・・

神様お願いします・・・彼は・・・彼だけは不幸から逃げさせてあげて・・・

お願い・・・！

俺は決闘開始の声とともにジュイスから距離を取る。

距離は約10メートル程。この距離では・・・心もとないが・・・やってみるか。

「来い！気仙花！」

俺は青く刀身の美しい剣を呼び出す。

「ほう。平民なのに魔武器を所有しているのか・・・」

ああ。そうだよ。そして今から俺がやろうとしているのは・・・

「っ！何だこの気力は！まさかあの剣に！」

大げさなりアクションありがとう。序列八位さん。驚かすことが出来て光栄さ。不意打ち気味で悪いが、一撃で決めさせてもらっぞ！

「いくぞ！不可視の斬撃！」

闘技場のコロシウム中に俺の気力のオーラと魔力のオーラが充満される。

そのオーラは形を変え、視えない斬撃に変わる。

視えない空気の膜のようなものがジュイスに向かう・・・

激しい爆音と共にジュイスの体が斬撃に巻き込まれたー

第三十五話 勝たなきゃ死ぬから（後書き）

微妙な終わり方ですね。しかし、ここらで一旦切らせて貰います。後、感想ありがとうございます。嬉しかったです。

第三十六話 未開拓魔法（前書き）

今日、投稿する気は無かったのですが・・・ある事情で投稿することになりました。この事情のせいで迷惑した方々には深い謝罪を。

第三十六話 未開拓魔法

「はあ．．．はあ．．．当たったか．．．」

俺は魔武器の能力である遠隔攻撃を行い、肩で息をしていた。気力を大分消費しないと放てないからな．．．大分疲れた．．．

（いきなり全力じゃったの。主様）

ああ。相手は、間違いなくこちらより格上。手段など選んではいけない．．．

不可視の斬撃の威力は普段の修行で確認済みだ。これでジュイスさんが倒されてくれれば．．．

俺はジュイスさんがいたあたりの空間を見据える。コロシアムの砂煙のせいでジュイスさんの状況が分からない。

頼む．．．！俺はまだ死ぬ訳にはいかない！
倒れていてくれ．．．！

（残念じゃが主様。そもいかぬ様じゃ。流

石は人間の上位種といったところかの。人間にしては中々じゃ）

まさかー！

「今のは効いたぞ？平民？」

やっぱり一撃で仕留めること叶わず、か。いや、それ以前にジュイ

スさん自身に傷さえ付
けられていない様だ。何故だ？

「不思議そうな顔をしているな？おおかた、私が無傷だった事を疑問にでも思っているのだろうか？確かにさっきの攻撃は中々に苛烈だったが一幾度の戦いを乗り越えてきた私には少々生温い」

ぞくりとした。底冷えするような声。本能が
叫んでいる。この女とはまだ戦ってはいけないと。

「ふふ。学生でこれほどの攻撃か・・・軍に入れたら相当の使い手になっていただろう。殺すには、惜しいが・・・立場が違ったな・・・残念だ」

まずい！あいつが何か仕掛けてくる！俺の全細胞、全神経が警鐘を鳴らす。

「さっきの一撃のお返しに私の魔武器を披露してやろう」

そういつて目の前の女が出したのは青の槍。

よく・・・貫けそうだ・・・

「これが私の魔武器。ブリュセルスだ。槍の魔武器とは珍しいだろうか？もちろん能力は教えん。では、魔武器の紹介も終わった。心置きなく、命を散らすがいい！！」

槍に魔力が充填されていく！？まずい！何だかわからないがおそらく何らかの攻撃をされる！

どうすればいい？どうすれば――

（主様！落ち着くのじゃ！あれは恐らく魔力系の攻撃・・・なら、あの魔法を試してみればどうかの？）

そうか！済まない。あの人の威圧にあてられて正常な思考が出来ていなかった。ありがとう。サタン。

（礼は後でいいのじゃ！来るぞ！主様！）

「学生にこれを放つ日がくるとは・・・思ってもみなかったよ・・・少々、酷だが・・・一瞬で死なせてやる」

殺気に惑わされるな！自分を信じる！俺はあの攻撃を防いでみせる！

「今から放つのは貫通力の高い、魔力を利用した槍による遠隔攻撃・・・これは防げまい・・・さらばだ・・・哀れな平民！」

俺は哀れなんかじゃない！センターハートに拾われてからは毎日が充実してるんだ！俺はまだあの方たちにまだ何もしていない！何も出来ない！恩を返せてない！まだここで、こんなところで死んでたまるかあ――！！

「夜を！俺を守る夜を！俺は望む！守りの夜を！」

頼む・・・生きたいんだ。

ジュイスが攻撃を放つ。

「はあっ！」

青く美しい細い鋭利な光の攻撃がロイを貫こうとしていた。

「頼む！俺の命を守ってくれ！ダーク・ナイ
ト！！」

対するに俺が放つは闇の中級魔法に分類される魔法。中級でありながらあらゆる可能性を持つ魔法。

「これは・・・空間支配・・・？これでは第一位と同じ・・・」

夜の上に夜が上書きされる。ロイを守る闇とジュイスの光がバーストしてぶつかり合う。

何十秒かの拮抗が続く。だが・・・

「闇が突破される！？」

ロイの闇が若干押されていた。

「私は第八位。学生が防げるような生温い奥義を出した覚えはない。数十秒拮抗したのは驚きだが・・・」

くそ！闇が破られる！

（主様！）

「貫け！ブリュセルス！」

ジュイスの声が響くとともに俺は闇を突破され光に包まれた。

「かはっ！」

体に凄まじい衝撃が加わる。俺はコロシアムの端まで吹き飛ばされる。激しく吐血しながら。

「ごほっ！ごほっ！」

どこかの内臓でもやられたのか？うっ！

（主様よ・・・主様！）

「驚きだな。今のをくらって死なないとは・・・あの闇はこけおどしてはないらしいな・・・だが、少し死が遠いただけぞ？平民？

はあ・・・はあ・・・まだ・・・戦れる・・・

・はあああ！！！！

俺は全力でジュイスの懐へ切り込もうとする。

「動きが直線的だ。入りが甘すぎるぞ！」

だが・・・ジュイスの槍に切り込む前に吹き飛ばされる・・・

「まだまだ！俺は！」

（主様！接近戦では・・・）

俺は負けられない！あの人に誓ったんだ。もう負けないうて。

今度は、初級魔法で牽制しながらジュイスの様子を伺う。

「魔法で牽制か・・・さつきよりはマシだが・・・こんなことをされたらどうする?」

「!」

何とジュイスは魔法に構うことなく、俺に突っ込んできた。

「所詮は初級魔法。当たったところでたいしたこともない」

魔法を放つことに夢中だった俺は気仙花の刀身で防御することもできず・・・再びジュイスの魔武器に貫かれる。

「うあ・・・」

ジュイスに蹴られ吹き飛ばされる。

(主様!主様!主様ああ!!!)

これは・・・やばいな・・・もう目が虚だ・・・

俺はあの人に・・・経験も知力も体力も力も技巧も俊敏さも・・・
覚悟すら勝ててない・・・

俺は負けられないのに・・・ここで死ぬしかないのか?だとしたら・・・
無念だ・・・

だが、こんな敵に殺られるのならいいかなと少し自嘲的になる。

血だらけの俺の目から涙がでる・・・すまない・・・サタン・・・
俺は、ここまでかもしれない・・・

負けられないのに・・・諦めたくないのに・
・・・生きたいのにつ！

（主様は・・・儂が死なせない・・・）

なんだ・・・サタン？

（主様は・・・儂が死なせない！）

なっ！変な物が頭の中に！

何かしたのか？サタン！

（主様の性格からしてこれだけは絶対にしたくは無かったのじゃが・
・・・そんなことを言っておる場合ではない・・・悪いが無断で主
観意識の転換を行わせてもらうぞ・・・）

頭が割れるように痛いっ！主観意識？何を言っているんだ・・・！

（これはいわば禁じ手。未開拓魔法に位置する、人間が未だたどり
着くことの無い魔法じゃ。主観意識の転換。それすなわち、儂と主
様の一時的な精神の交換・・・！）

何・・・！

（主様にはまだこの敵は早かった。ただそれ
だけじゃ。今は儂の中で眠っておれ。目が覚
めた時には全てを終わらせよう・・・）

サタン……！サタン……！

（もうこれしか手がなくての。すまぬな……では、行使するとして
ようか……）

くそ……俺が弱いから……

（未開拓魔法「チェンジ・ザ・マインド」）

ぐわああ！！意識が……！

「どうした？平民？苦しそうだな？すぐ楽にしてやるっ」

ジュイスが再びロイに向けて槍を構える。

「いや、その必要はないのう」

ロイが立ち上がる。その黒い瞳の中に少し子供っぽい金色の光を灯しながら答える。

「！」

何だこの違和感は……まるで悪魔とでも対面しているこの雰囲気……不気味だ……早く終わらせなければ……

ジュイスが再び魔武器に光を充填させる。

「貫け！ブリュセルス！」

その声に呼応するかのように光がロイに向かって飛んで行く。

ロイに当たるかと思っただ直前。ロイがただ手を光に向かって出す。

光がロイの手に当たり・・・消えた・・・

「は？何故・・・だ？ブリュセルスの光が・・・」

「それだけかの？人間？」

ぞくり。

何だ・・・何なんだ・・・さっきまでの平民とは何もかもが・・・違う。

本当に何もかもが。それに似ているのだ。今の平民は・・・第一位に。

「何じゃ。つまらんのう。やはり儂を楽しませてくれるのはあの方だけの」

何だ・・・？何の話を・・・？

「さて、狩の時間といくかの」

ロイが悪魔のような笑みを浮かべそう言った。本当にその顔は悪魔の様であった。

第三十六話 未開拓魔法（後書き）

次回はロイ（サタン）の戦いです。お楽しみに。更新連投は疲れま
した。

第三十七話 騎士VS平民(前書き)

サタンの強さを書きたかった。これがないと後の展開にかなり支障がでますから・・・

第三十七話 騎士VS平民

「さて、行くとするかの・・・人間」

ロイがジュイスに冷たく告げる。ロイの瞳を見ていたジュイスは萎縮していた。

それは自分の技が手のひらで返されたからであろうか、否か。

「ブリュセルスの魔法光を防いだけで調子に乗るなよ平民。私が序列八位まで登りつめることができたのは、大技ばかりのおかげではない！私が真に得意なのは攪乱奇襲だ！」

そう言っつてジュイスはスピードでロイを攪乱しようとする。

「この傷だらけの主様の体で長い時間戦闘はできんし、早く終わらせたいが・・・また面倒な・・・」

「どうした平民！私の動きについてこれないのか？」

ジュイスは髪で青い軌跡を描きながらロイの周りを走り回る。まるで獲物を狙う冷徹なハイエナのように・・・

「儂がお主の動きについてこれんと思うのか？」

ロイが走り出し、黒影が舞う。そして、ジュイスとの距離を一気に詰める。

「傷だらけのその身でよく動くな平民！」

皮肉げにジュイスが叫ぶ。

「流石主様の体・・・よく鍛えられておる・・・」

ロイがジュイスを捉える。

「このスピード・・・何故！」

ジュイスが苦々しくこぼす。ロイに間合いにはいられたことを危険に思ってたか、大きく後退しようとしたが・・・

「やはり人間は甘いのが。後退している間は、隙だらけじゃというのに・・・」

ロイは手に持っている気仙花を構える。

「僕は本来の持ち手ではないのじゃが・・・応えてくれんかのう。主様の魔武器よ」

その声に呼応するかのうに気仙花は青く輝く。

「ほう。僕でも使わせてくれるのかの？浮気的な魔武器じゃ。でも気に入ったぞ！」

ロイが大きく後退しているジュイスに向かって気仙花を振り抜く。

「僕は主様ほど気力はないのじゃが・・・まあ良い。不可視の斬撃！」

ロイはジュイスに向かい、自身の切り札を放つ。そしてジュイスの目の前に空気の膜が迫る！

「これは、最初のー」

ジュイスはブリュセルスの槍で防ごうとするが、コロシアムの隅まであえなく吹き飛ばされる。大きなクレーターを作りながら。

「主様の一撃よりもすこし強かったかの？」

「かはっ！馬鹿な！ろくに教育を受けていない平民に私が遅れをとるなぞ……」

「しかしこの技。思ったより反動がきつい……主様の精神にも傷がつきそうじゃ」

ロイが頭を押さえながらジュイスに近づく。

「さて、主様にこれ以上の負担を与える訳にはいかん。悪いが次で決める……」

「平民が強がり……なら私も受けてたとう！」

お互い血だらけの二人は自身の魔力を高め合う。

莫大な二人の魔力にコロシウム内部の大気が震える。

「私は平民の認識を改めなければいけないかも……」

「ほう。何故じゃ？」

「貴様のような平民を見ていると平民にも凄まじい可能性がある気がするからな・・・」

「可能性を持っているのは、貴族だけだと思っていたのかの？虫唾が走る！」

「そう思うのなら、私に勝ってみる平民！軍の序列八位は伊達じゃ無いぞ！」

お互い魔力・気力を練る。

（うーむ。気力がうまく練れん。儂の精神じゃないからのう・・・しかたあるまい。いつものように魔力で！）

先にジュイスが何かの準備を終える。

「見せてやろう！平民！私の奥の手を！」

ジュイスは魔力を手のひらに集中させる。

「私は騎士でありながら魔法を最大の攻撃と
思っている。私の最強の魔法を受けてみる！」

この魔力の質からして、最上級魔法かの？全く騎士様は、学生になんて物をぶつけようとするのじゃ・・・

「私の全てをかける！ディガ・メニアルア・ディアニアス！」

ジュイスの手から巨大な雷が顕現する。それに対してロイはただ手を前に出しているだ。

「お前はよく戦った・・・さらばだ。平民・・・」

ジュイスが寂しげに呟いた瞬間、凄まじい魔力がロイを包んだ。

私、アメリカ・アイラス・センターハートは戦いを息もつかずに見ていた。

・・・なんて戦いをしているのだろう。もうすでに、荷物持ちは私の何歩先へ行ってしまったのであるうか。

あの強さまで上り詰めたい。こんなことを思うのは、私の従者に対して失礼だろうか。

それでも、そう思ってしまふ。実際に父ですら、驚いていた。

「ロイ君・・・君は一体・・・」

私の父が動じるなんて滅多にない。それほど驚いているのだ。目の前の光景を。

・・・平民の学生と騎士が互角に戦っていることを。

周りの貴族達も驚いていた。荷物持ちがこちらの予想を裏切る動きをする度に貴族達はただ固まる。

とにかく凄まじい攻防の繰り返し。気になるのは時に荷物持ちから違う雰囲気を感じるくらいだろうか。

その時――

私は感じた。以前、屋敷の中庭で感じた魔力を。莫大な魔力を。

「この感じ、前にも何処かで――」

私は魔力の中心地である荷物持ちを見つめていた。

ロイはただ冷静に目の前の雷を見据える。

「行くぞ人間……これが神に近いところまで上り詰めた者が放つ魔法じゃ」

「顕現せよ……ダーク・リベリオン！」

ロイの手から巨大な黒炎が顕現する。

「これは中級魔法に位置しながら儂が最も信頼する魔力を喰う魔法じゃ……」

終わりじゃ。人間。

私が行使した魔法が闇に飲まれていく・・・

「私の魔法があんな簡単に・・・？それに黒炎は止まるどころか勢いを増して・・・？そんな・・・私は届かないのか？学生ごときに
ー」

その瞬間、ジュイスは闇に飲まれた。

実質、決闘は王の目の前でロイの勝利に終わったのである。

第三十七話 騎士VS平民(後書き)

今回はセントラル王の反応などを書こうかと。それにより・・・どうなるか・・・そしてロイは決闘を終えて何を思うのか・・・

第三十八話 決闘の後で（前書き）

今更気づきましたが、セントラル王の名前決めていなかったです。物語に支障はないですが。

第三十八話 決闘の後で

「私は何を見ておるのだ？クロフォード」

セントラル王は闘技場を見据え呟く。その瞳には少しの驚きが込められていた。

「決闘を見て……いました……陛下」

「そうであるうな。わが騎士クロフォードよ。だがな……貴族である騎士が平民に負けるとはどういうことだ！」

セントラル王は激昂する。クロフォードと言われていた青年は困り顔をしていた。

周りの貴族達も王の尋常じゃない様子を見てそそくさと闘技場を出る。

「これほど私の身が捻れるような思いはいつぶりであるうか……明日から貴族が平民に

負けたという事実を隠蔽しなければいけないしな……クックック」

王は嗤う。自分の同胞があっさり負けたというのに、楽しそうにロイを見て嗤う。

「わが騎士クロフォードよ。お前のあの平民に対する意見が聞きたい。私の右腕としての

立場ではなく、騎士序列二位の立場としてな」

「はっ！あの平民・・・前半はそれほど特別評価するものは無かったのですが・・・決闘の後半、手でジュイスのブリュセルスの光を防いだのが印象的でした。あんなことは私でもできません。あとは・・・おぞましい殺気を常に感じました。空間支配魔法も気になるところです。何にせよ・・・彼は第一位に似ています・・・」

「お前もそう思うか！クロフォード！実は私もそう感じたのだ。これは・・・少し興味がでてきたな。ただの平民には惜しい人材かもしれん」

「あの平民に興味がお有りですか？陛下」

「あの年にして序列八位に勝つ。そしてあの強烈な雰囲気。おもしろい人材ではないか？将来的には我が国の戦争・紛争で多大な功績をあげてくれるかもしれぬ。天才とよばれたお前も形無しじゃないか？クロフォードよ」

「それは私が陛下の警護を専門と・・・」

クロフォードが苦々しく言う。

そう基本的に王の直属部隊というのは王の身边警護くらいしか仕事がない。

序列が十位位内で王の直属なのは、ジュイスとクロフォードしかないのだ。

他の優秀な騎士は他国との紛争や争いに駆り出されている場合が多い。

「ん？陛下そういえば、ジュイスが今、医療魔法をかけられています、医者によるとしばらく戦線に復帰はできないようです。陛下の直属部隊の戦力が大分落ちるのではー」

「かといって他国の侵略を防いでいる部隊の兵を簡単に借り出すわけにもいかん。このままの体制でいくしかあるまい。頭を抱える問題ではあるが、今日は気分がいい。久しぶりに私の気分を高揚させてくれる戦士に出会えた気がするぞ」

「確かにそうですね・・・彼は強いと思いますよ。私のレベルから見ても・・・」

「クツクツク！笑いが止まんぞ！あいつは絶対にギルドには渡さん！将来的に軍にはいつてもらう！」

「陛下そこまで・・・それでは彼を戦争の道具にでも？」

確かにあの力・・・魅力的ではある。

「クロフォードおちおちしてたらお前もどうなるかわからんぞ？」

「！」

その瞬間、脳裏によぎったのは第二位である私が平民に負ける姿。

そして第二位を剥奪され地に落ちる自分。

「私を焚きつけようとも？」

「いい刺激にはなつたみたいだな？クロフォードよ」

「そうかもしれませんね・・・」

本当に油断できないお方だ。だからこそ自分はこの方を守ると思えたのだが。

「それではクロフォードよ。ジュイスの第八位剥奪と直属部隊の解任令を出すぞ」

やはりか・・・陛下は敗者に厳しい。

「そうおっしゃると思い手配済みです」

「流石わが騎士だ。さて、そろそろパーティも終わりだ。クロフォードよ。エニアを頼むぞ」

「はっ！」

王が子供がおもちゃをもらったような顔をして闘技場から去る。

「ああいう顔をした陛下には近づきたくないですね・・・それにしてもあの平民・・・ジュイスを・・・」

あまり親しくはないとはいえ、同胞がやられたのだ。あまりいい気分ではない。

それにジュイスに憧れて騎士になろうとする少年・少女も多い。こ

れからは・・・その票に期待できそうにないが。

「さて、私はあの平民がジュイスに勝ったことを隠蔽し、尚且つジュイスを部隊から追放しないといけないわけだが・・・骨が折れる」
貴族が平民に勝ったなどと口外されたらたまったものではない。貴族の権威が地に落ちる。まあ、口外するのはそういう事を計算できない馬鹿な貴族だが。

まあ、ジュイスに関しての処理はほぼ終わったからいいが・・・口封じは面倒だ・・・

「なにせ私が直接でないといけませんからね！」

今日は口封じに何をしなければいけないだろうか・・・

本当に王の右腕は疲れる・・・

とりあえずはエニア様を私室まで運ぶとしよう。

第二位は今日も大忙しつと。

「はあ。はあ。ここまで疲弊が激しいとは、やはり安易に禁じ手を開放する訳にはいかんのう」

ロイは頭を抱える。

「そろそろ僕の顕現時間も限界じゃ。主様の体を安全なところまで運びたいが・・・いかんせんこれ以上僕が動けば主様の精神も危ないしろう」

そんな事を思っていたら、後ろから声をかけられた。

「荷物持ち！」

あれは確か・・・主様の大事な人じゃったか？なら、あれに主様の体を預けるか。ん？主様の口調が分らん。まあ、いいの。思えばこいつの名前・・・僕知らんの。どうやって話すか・・・

「荷物持ち！大丈夫なの！？」

アメリカがロイに心配そうに声をかける。向こうから話しかけてくれたのじゃ。良かった。良かった。

「すまんの・・・お嬢様。すこし疲れましたのじゃ」

「あんだ口調・・・」

「悪いが怪我もしておるから、この体を頼みますのじゃ。僕は・・・俺はしばし気絶する・・・します」

僕は何か間違った気がしたがそんなことも言ってもらえん。もうこれ以上は主様の体が危ない。僕はお嬢様？に体を預け倒れこむ。

「ちよっ！ちよっ！荷物持ち！」

うるさいのう。第八位とやらを倒したというのにまだ用があるのか

の？もう知らんの。さっさとこのお方を保護してくれなのじゃ。妙にかっこいい壮年の男も後ろにおるし・・・面倒くさそうじゃのう。

そうして儂はゆっくりと目を閉じ、意識の安寧に身を任せた。

第三十八話 決闘のあとで（後書き）

王様がロイに目をつけ始めました。ロイが危ないかな？

第三十九話 やつと目が覚めたんだ（前書き）

私の頭の中はもう完全に第二章にいく気満々なんですけど・・・どう
いう流れにしましょうか。

第三十九話 やつと目が覚めたんだ

「ここは・・・？」

俺は目を覚ました。ここはセンターハート家の俺の自室だ。

従者ごときがなぜ主人の家に自室を、と思うかもしれないがそれは俺が特別だからだ。

いや、全世界の従者さんに自慢する気は無いんだが、実際に俺の経歴は特別すぎるからな。まあ、ラザイン様の計らいで部屋をもらったということだ。

いや、今はそんなことはどうでもいいんだ。

何故決闘の後、俺は・・・

！

そうか・・・俺は負けたんだ。あの青髪の騎士に・・・槍を持った強烈なイメージを植え付けられた女に。

見事に完敗だった。勝てる要素が何も無かったしな。運すら負けている自信が俺にはある。

「そうか、負けたのか・・・」

今まで命の保証がされた戦いばかりをしていた。あのトリフロスとの戦いですら俺は危険でありながら安全だった。

そして、昨日。初めて身近に死を感じた。初めての戦い。いや、「実戦」だった。

そして負けた・・・レーナ様と約束していたのにな・・・

レーナ様に合わせる顔が俺にはない。俺が貴族と認められた最初の人を裏切るなんて・・・

何もやる気が起きない。普段の俺なら時間の合間に修行でもするのにな・・・

ただ俺は強くありたかっただけなんだ。幼い頃、約束したから・・・センターハート家の奥方だったレーナ様と・・・

幼い頃を思い出す。何にも知らなかった頃の俺。

「俺はもうだれにも負けません！これは誓いです！だから、レーナ様！俺は最強になります！そしてセンターハート家に恩返ししてみせます！」

この頃、俺は五歳。舌足らずな声で必死にレーナ様と約束した誓い。

「ふふつ。ロイ君。強くなりたいのはいいのだけど、ちゃんと従者修行もしてね？」

「従者修行は・・・」

「ちゃんとしてね？」

「はいっ！レーナ様！」

そして、優しげに笑いながらも俺に従者修行を俺に薦めるレーナ様。このころ俺は従者修行を薦めるレーナ様が少し嫌いだった。従者修行が嫌だったからな。

拾われた分際で何をって思うだろ？俺もそう思う。

でもこのころ俺は拾われたばかりの無知な子供だった。何も知らなかったんだ。貴族が平民の子供を拾って育てくれるなんて例外にもほどがあったしな。

レーナ様は俺が剣の修行をしようとする度に複雑な顔をしていた。今思えば、俺が強くなるための修行をしようとする度に無理やり従者修行を入れられてた気がする。おかげで拾われてから十年間の間ほとんど何にも修行出来なかった。従者スキルがマックスになったくらいだろうか。

ある日、こっそり俺は無礼にもレーナ様に聞いたんだ。なぜ、俺に剣や魔法の修行をさせてくれないんですかってな。

平民だからできないんだって言われれば、それまでの事だったのにレーナ様は俺に真摯に向き合いこう言ってくれたんだ。

「ロイ君がどこか遠いところに行ってしまう気がして・・・」

憂いの表情を浮かべながらレーナ様がこう言ったんだ。

幼い俺には意味がよく分からなかった。でも今ならこの言葉の意味が少しわかる気がする。

おそらく、昨日の俺にも理解出来なかっただろう。

負けを理解した今日だからこそわかった事。

思えばレーナ様はこの感情を俺に分からせない為に俺を戦いから遠ざけていたのかもしれない。

そう、俺がわかった事は絶望という感情。ど

う足掻いても何にも出来なかったという暗くどこまでも悲しい感情。

そして何よりも俺に絶望を与えたのは……
誓いを破った事だ！

俺は嗚咽を自分のベットの上で漏らす。誓いは俺の支えだった。それが崩された。

もう何も出来ない。そんな暗い感情が心の大半を占める。

レーナ様やセンターハート家の方々の笑顔を思い浮かべる。それでももう彼らを俺は守れる気がしない。

でも諦めたくない……あの笑顔を守れるなら何だって……

ああ……レーナ様のおかげで今まで気づけなかった事に気づいた。

俺は戦わなくてはいけなかったんだ。何よりも先に……自分と。

この無力感と・・・

今日初めて。生まれて初めて。俺は自分というものを深く感じた。

・ センター・ハート家は関係無かったんだ。何よりもまず俺はただ・・・

負けたく無かったんだ・・・！

今日、初めて俺は「目が覚めた」気がした。

第三十九話 やつと目が覚めたんだ（後書き）

ロイの葛藤のみ！やってしまった（汗）でも次の展開に必要なんです！許してくださいね。誤字脱字報告よろしくお願いします。

第四十話 進むしかない(前書き)

早く第二章にいきたい!!

第四十話 進むしかない

俺はどうすれば……

俺が今しなければいけない事は、なんだ？

何も分からない。今まで漠然と強くなる事ばかり考えてきた。子供っぽく最強になるだのなんだのほざいてきた。

たとえば、力をつけたとしても何をする？俺はそれすら説明できない。まだ自分のしたいことすら分かっていない。力があっても、その力に振り回されるようでは、お話しにならない。

力だけを求めて何になる。俺は前提から間違っていたのかもかもしれない。

俺には「経験」が足りない。自分の力で何をしたいのかすら分かっていない。

センターハートを守る？どうやって？

俺はそんな質問にすら答えられないだろう。

センターハートを守ると漠然と考えているだけでは、俺は前に進めない気がする。

少なくともあの青髪の騎士ジュイスはそんな迷いは一つも抱いてはいなかった。

セントラル王への忠義が確かにあった。あの騎士は自分の力を扱いきれていた。

それに比べて俺は・・・サタンの力に振り回され、終いには自分の魔武器の能力ですらまだ完全に扱いきれてないときている。

そして何よりもまず「覚悟」がない。決闘でジュイスの殺気に怯えていた俺はそこらへんの盗賊と変わらないほどの屑だった。

あの騎士ジュイスには「経験」と「覚悟」その両方が十分に備わっていた。

俺はもうただ漠然と強くなる、と考えているだけでは駄目な時期にきているのかもしれない。

駄目だ・・・考える事が多すぎて思考がむちゃくちゃになってきている。

気分転換にでも中庭でも歩くか。幸い今日は学園もなければ、従者としての仕事も従者長からの呼びかけがないからなみだしいな。

俺は真昼間の太陽の光が輝く、屋敷の中庭に来ていた。

「中庭の花壇はいつ見ても、キレイだよなあ。サタンはどう思う？」

俺は心の中の会話ではなく、直接声に出してサタンに呼びかけていた。

今、中庭を他人が通りがかったら俺は一人で話している変質者にでも思われるだろう。

黒猫としてのサタンを召喚してもいいが、それはそれでなあ．．．動物に話しかけるやつも変質者とたいして変わらない気もする。

使い魔に話しかけるのは不自然じゃないんだが．．．猫の使い魔なんていないしなあ。

（この屋敷の庭の花達は俺の目から見ても、キレイじゃと思うぞ。主様よ。俺の年齢が三桁くらいの時に見たモンピクスの閃花よりキレイと言っても、過言ではないの）

「サタン。お前は世間に関心が無かったんじゃないのか？モンピクスの閃花なんてよく知ってるな」

俺はセントラル以外の国の事は一切分からない。羨ましい限りだ。

（俺も若かった頃は世界中を見て回っておったからのう。いつしか悪魔と呼ばれる様になってしまい自分の精神世界に逃げ込んだがの精神世界を作りだす魔法か．．．きっと俺なんかよりお前はずっと強いんだろうな．．．）

（主様？どうしたのじゃ？）

「俺はお前が決闘の最後に何かを俺に施したことを覚えているんだよ。サタン。サタン一体、俺に何をした？」

いや、そんなことはどうでもいいんだ。サタンが施した「何か」がどう働いていようと興味はない。俺が今、無様に生き長らえているのもその「何か」のお陰かもしれないが……

今は関係ない。俺が今サタンと言葉で語らっているのは、今からサタンと大事な話をするためのだから……

「サタン。すまない。さつきから念話と会話で支離滅裂な言葉しかお前に届いていないよな。要するに俺はお前に相談が……あるんだ。」

(主様が僕に……相談とな？嬉しいのう。僕も随分、主様に頼られておるのかのう)

ああ、お前にはいつも救われてるよ。言葉では決して言えないが。

念話でしか伝えられないこともある。

(そついうのは面と向かって言って欲しいのう。嬉しいがの。)

悪い。そついうキザっぽい台詞は俺は苦手なんだ。

とにかく俺はお前と話したいことがあるんだ。

大事な話なんだ。二人きりになれる場所はないか？サタン？

(二人でー！ー！うむ。了解したのじゃ！それっ！)

こうして、俺は数分の時間の後、サタンの黒い魔力に包まれた。

「ここは？」

薄暗い場所。前にもここに来た気がする。

ペタペタ。

可愛らしい足音が薄暗い空間に響く。俺の前方から悪魔を連想させるような美しい女が歩いてきた。

「この姿では久しぶりじゃのう。主様よ」

「まだ一ヶ月も経ってないだろ？」

俺は微笑みながらサタンに話しかける。

「主様と俺の心が繋がっている今だからこそ主様を俺の精神世界に引きずり込んだのじゃが、相談場所はここでよいかのう」

上目遣いでサタンが俺に聞いてくる。

「ああ。申し分ないよ。いや、ここほど相談場所にうつってつけの場所はないさ」

「それは良かったのじゃ。して、話しとは？俺はあまり世間に詳しくくないのじゃが・・・」

「別に世界の常識についての相談なんてしないから大丈夫だ。俺は

お前に「力」について聞きたい」

「力とな？」

「そう力だ。精神力、魔力、権力、戦闘力。このすべての力が俺には足りない。俺は思い知ったんだ。この世界。タランテイルスで平民が生き残り尚且つ夢を果たすためには、至高の力が必要だと。決闘で思い知ったー！貴族の理不尽を！圧倒的な忠義と覚悟を！俺はお前に聞きたいんだ．．．どうやったらこの世界の力の因縁から逃れられるのか．．．」

「うむ．．．主様よ．．．このタランテイルスという世界に生きている限り力の因果から逃れることは出来んよ。そう、逃げることは出来ないのじゃ。だったら、力を求めて進むしかあるまい。唯一の例外は最強の存在。自由奔放に振る舞えるのは最強のみ。なら儂から言わせれば、逃げるのではなく、更なる力を求めるべきじゃ。儂もこの世界で足掻いたのじゃが．．．結局は化け物扱いされて終わりじゃったよ」

「力を求めろ、と？お前はそう思うのか？」

「そうじゃ。タランテイルスという世界は強者が法、ルールじゃ。なら、どう言い繕っても強さを求めるしかあるまい。そこに身分は関係ないはずじゃ」

その言葉を聞いて俺の何かが変わった気がした。

「平民だとしても強くなれると？」

「うむ」

「貴族の側に生涯いても、許されると？」

「強ければの」

「どんな外敵からも大切な人を守り切れると？」

「最強なら守りきれる」

なら俺が．．．俺の進む道はやはり一つだ。力の扱いなんて力を手に入れてから考える。まずは、強くなるんだ。結局、目的は変わらないんだな。

「主様はその真理に気づいておったはずじゃが、どうしたのじゃ？」

真理か。そうだな。タランティルスでは強ければどんなことでも．

「少し、心境の変化があつたんだよ。サタン。でもお前の話しを聞いてやっぱり俺が目指すのは結局ー」「そこ」だったんだ」

俺は．．．俺は．．．

「サタン。俺は強くなりたい。今だからこそちゃんと力と向き合いながら言える。俺は強くなりたいんだ。俺は更なる高みへと進みたい。あの騎士と同じように。だから．．．手を貸してくれないか？サタン？」

「当然じゃ。僕は主様を未来永劫支え続けよう。主様を初めて見たときに感じたからの」

「何を感じたんだ？」

「それは秘密じゃよ」

サタンが妖しく笑いながらはぐらかす。

「そうか．．．でもありがとな。サタン。お前のお陰でやっと前に進める気がするよ」

「僕も主様の役に立てたようで、良かったのじゃ」

俺はサタンとのリンクを切り、引き上げられるような感覚を感じながら、現実世界へと戻っていった。

最後にサタンが優しく俺に微笑んでくれた気がした。

第四十話 進むしかない（後書き）

ロイの気持ちの整理です。もうすぐ物語を動かしたいところ。そして、三点リーダーを変えました。・・・と・・・どっちがいいんでしょうか？悩みます。

魔法についての追記です（本編ではありません）（前書き）

この話、読まないでもいいです。本編ではないので（笑）未開拓魔法って何？という方は見て下さい。

魔法についての追記です（本編ではありません）

この世界の魔法の概念について本編ではあまり触れられていないように感じたので追記です。特にロイとサタンの主観を切り替えた魔法は世界観説明をみていない人はポカーンとなった筈。

まずタランティルスの魔法は詠唱がありません。ノーモーションで魔法を放てます。なら大規模な魔法を行使すればいいのかと言えばそうでもないのです。大規模な魔法ほどその魔力も大きい。つまりはそれ相応のリスクがあるということです。

ついでに未開拓魔法とは人類が未だその魔法の領域に踏み込む事が出来ていないことから畏怖を込めて未開拓魔法と呼ばれるようになりました。

決闘でサタンが行使したのは未開拓魔法ですね。

魔法についてはこのくらいです。作者の文才がない為にこのくだらない話を入れることをお許しを。

第四十一話 いきなり（前書き）

三点リーダを後々．．．．．に変えるかもしれない．．．
・より．．．．．の方が見やすいと思うのです。近いうちに大規模な改稿をされるかもしれません。ご容赦を。

第四十一話 いきなり

俺は屋敷の中庭で一人佇む。サタンの精神世界から帰ってきたばかりで、なんだか魔力に酔っている気がする。

サタンという膨大な魔力の側にいたからかもしれない。俺はサタン曰く、膨大な気力を持っているらしいが、気力は魔力と比べてまだ不明な点が多い。サタンは俺の気力を羨ましそうに見ていたが、俺からしたらサタンの魔力の方がよっぽど羨ましい。

魔法か……

魔法の練習に気力のコントロール。強くなるための課題はまだたくさん残っている。前はジュイスという騎士にいいように威圧され、気力が乱れてしまった。

もうあんなへまはしたくない。最悪の醜態だ。俺はあの決闘をお嬢様に見られてしまっただろうか？平民の決闘など見る価値もないと突っぱねられただろうか？出来れば後者であって欲しい。

自分が負ける姿なんて見てほしくない。

特にそれが守りたい人相手なら。

こんな情けない心配をしないように俺は強くなろう。今、改めて誓うんだ。

負けない、だとか。不敗、だとか。そんなのは普通の人間には無理だ。

俺はかつて負けないと誓ったがやはりその誓いは崩れた。

普通の人間である限り敗北の定めというのは必ず付いて回ってくる。

俺も例外ではない。やはり負ける時は負ける。どんなに足掻いても、それだけでは乗り越えられない壁はあるものだ。

だから俺はまた誓う。負けないというのは無理かもしれない。それでも、勝つことを諦めないようにするんだ。

「勝つことを諦めない」

これなら俺にでも出来る。常に敵に抗おうとする俺をイメージする。

あの決闘。初めての戦いで俺は心が折れかかっていた。半ば勝負を諦めていた。

だから負けたんだ。気持ちからしてなかつた。負けないと言つてただ自分を美化しようとしても駄目だった。

だから無理な幻想は抱かない。俺はただ自分の最善を尽くすだけ。

勝てないのなら足掻く。理想だけでは勝てないから、どんな手段を使っても勝つ。

俺はまた中庭で誓おう。以前は、レーナ様が隣にいたこの場所で。

前は大声で俺は負けないうって中庭で叫んだものだが、そんな非常識なことは今の俺には出来そうにない。

心の中でひっそり誓おう。

（お？主様。朗報じゃ。主様の気力が前とは比べ物にならないくらい精錬されておるぞっ。）

ん？本当か！？それは嬉しいな。心の変化があつたからかな？

（主様の心は今、とても穏やかで鋭い。とてもよいコンディションじゃ。あの傲慢な王のような力への執着も気からは感じん。最高の状態じゃの）

ははっ。久しぶりに俺に嬉しい知らせが届いたよ。

（そんな寂しそくに笑うではないのじゃ。主様よ。決闘の後からずっと思ひ詰めた表情じゃぞ？）

そう．．．．かな。

（使い魔というのは主人の表情をよく見るものじゃ。主様がそんな顔をしていては儂もなんだか元気が出ん。笑う時はしっかり笑うのじゃ）

ああ。そうだな。今はまだうまく笑える気がしないけどいつか、笑って見せるさ。心から。

（うむ。それがよいのじゃ。それと主様。大事な事を伝えねばならん）

大事なこと？

(うむ。そうじゃ。主様の気力がパワーアップしたのは自分でも何だか実感出来るじゃろ?)

ああ。確かに暖かい充足感が俺を中心に広がっていくような気がする。前とは違う感じだ。

(そのパワーアップに伴い、気づかれるのじゃよ)

気づく?

(よほど主様にご執心のようじゃ。何回も妨害をしておるのじゃが
.....)

ん?

(主様の莫大な気力に興味を持った輩かのう)

どういうことだ?

(膨大な気というのは、どんなに普段隠していても、わかるやつには察知されてしまうものじゃ。つまり、こういことじゃー!)

俺の右側面からいきなり巨大な炎が飛んでくる。

何っ!魔法!?

俺の身体は咄嗟に回避しようとするが間に合わない。

(こうい不足の事態にこそ儂がおるのじゃ。魔法の防御障壁を主

様に)

黒いような青いような魔力が口を覆う。巨大な炎はその魔力に飲み込まれ消えたー

「へえ〜。今のを防いじゃうんだ。ますます興味が出てきたわ。口イ・カーレス君」

「誰だ!!!」

俺は上を見上げる。視線のさきには好戦的な瞳を持った赤髪の女が浮かんでいた。

飛んでいる!?

(魔法じゃよ)

凄いな・・・年は俺とそんなに変わらないのに、こんな魔法を扱えるなんて。

「学園のレベルが今、どのくらいか測るためにトリフロスを送ったんだけど、あなたにあっさり倒されちゃった。それで今日まで、口イ・カーレス。あなたを追跡していたんだけど、どうやらビンゴだったようね」

「ビンゴ?何がだ?」

「それは秘密。でも貴方には消えて貰わなくちゃ。私たちの障害になりそうなものは、ね。平民を手にかけるのは心が痛むのだけれど・・・あんな気力を白昼堂々見せられちゃ黙ってられないわっ

「！」

好戦的な瞳をした少女は手から炎を飛ばす。

「ちっ！何故俺を！」

ロイは大きく炎を回避する。屋敷の花壇に少し火が飛び火する。

とてつもない魔法だ．．．．．当たったら．．．．．考えるのはよそう。

「私は爆炎のヒータ。脅威は排除しなきゃいけないの。貴方みたいな人がどうしてトリフロスを倒せたかが謎なんだけど．．．．．まあ、油断せず殺らせてもらおうわ」

なんだよ．．．．．最近、実戦だらけだ．．．．．

ただが殺られる気はない。

「そつちがその気なら俺も全力だ。本気でいかせてもらう」

「ヒューー。かっこいいじゃん。落ちこぼれのレットルをはられた男とは思えないわね」

ヒータとやらが茶化す。

そういえば、戦う前に俺も赤髪の女に言いたいことがある。

「戦いの場所を変更しないか？」

「場所？私には関係ないわ！」

容赦なく手から炎を出すヒータさん。

はあ。今までセンターハートの従者達が必死に整備してきた中庭がむちゃくちゃに荒らされる……

「お前だけは絶対に許さない！」

「いい感じになってきたわね。なら戦いましょう。ロイ・カーレス！」

センターハート家の皆様を巻き込むわけにはいかない。だが幸いラザイン様は外出の様だ。（玄関を見た時ラザインの愛用の靴がなかった）

お嬢様に気取られないようにしなければ……

王との決闘騒動に今回はこの騒動。今度こそセンターハートに捨てられてしまつかもしれない。

病み上がりのように身体は重いが、静かに勝つしかない！

第四十一話 いきなり（後書き）

やっと出せました。ヒータさん。

第四十二話 「爆炎」との邂逅

（主様。気をつけるのじゃ。純粹な気力というのは今回の事のよう
に強者を惹きつけやすい。自分の気力を隠す事を覚えなければ、い
つか死ぬのじゃ）

このヒータという少女が強者だということか？サタン？

（うむ。油断ならん相手じゃ。油断したら、死ぬかもしれん。主様
は儂が確実に守るがの）
サタンにそこまで言わせるか……………

年は俺とそう変わらないのに見えるのに……………俺より先に到
達してる奴なんてたくさんいるってことか。

何にせよだ。本気でいく。立ち止まったら、死だ。

「私の爆炎の名を聞いても何の反応もしてくれないのね……………
少し傷つくわ」

笑いながらヒータが火を飛ばす。

「侵入者が何をっ！少しも傷ついてないだろ！」

俺は屋敷の中庭を侵食する炎を走って避ける。しばらく回避行動を
とっていたら、不意に――

パチパチパチ。

赤髪の少女が出した炎から嫌な音が聞こえる。炎がメラメラと輝く。

「何をするつもりだ！」

「貴方が躲してばかりだから、つまらなくて。今度は躲せるかしら？」

ヒータが指をパチッと鳴らすその瞬間炎が分散した。複数の炎が俺に迫ってくる。

攻撃パターンを変えてきたか……流石に分散する炎を全て躲すのは無理そうだ。

なら……

サタン。あの炎の弱点部分を教えてくれ！お前なら分かるだろ？お前に頼るばかりで悪いが……

（お安い御用じゃ。あの炎の弱点は中枢つまり、支点の部分。中央を狙えば良かろう。しかし、どう捌くのじゃ？）

それだけ聞ければ充分だ。やってやる。

「躲す気もおきないのかしら？まだまだ遊びのつもりだったのだけど……トリフロスを倒した実力があるから、貴方を探してたんだけどなあ。」

俺が動かない事を諦めたと勘違いしたのか、上から目線で随分なことを言ってくれる。癪に障る。

なら、今から見せてやる。俺の切り札を。俺は手に莫大な気力を込める。

俺を中心として風が舞い上がる。俺に白い神聖な何かが纏わりつく。

俺は空間から自分の魔武器を抜く。気仙花がいつも以上に過剰な光を放つ。

「これは．．．．．気力．．．．．へえ。中々ね。だからこそ惜しいわ。ここで、貴方を殺さなくてはならないなんて」

勝手にほざいてる。爆炎さん。

「いくぞ．．．．．気仙花。不可視の斬撃！」

なっ。これは．．．．．前よりも手応えが違う。俺の気力が変化したからか？斬撃の出力が上がっている。

（おそらく、主様の気力の質が上がったからじゃろう。全力の儂でもダメージくらいは負うくらいの攻撃かの。凶悪な攻撃じゃ。流石じゃよ。主様）

俺の視えない斬撃はあつという間に複数の炎を真つ二つに切り裂きヒータへと向かう。

「こんな莫大な気を使っていいのかしら？自分の立場を理解して欲しいわね。貴方には。おかげさまで私もそれ相応の技を使わなくてはならないじゃない。はあ．．．．．こんなことになるなら一瞬で殺ればよかつたわ。バレルけど、仕方ないわね」

ヒータに視えない斬撃が襲いかかるが．．．．莫大な炎の壁を作り防がれてしまった。

「防いだのか!？」

「私をただの侵入者と勘違いしている時点で貴方は間違いを犯したのよ。ロイ・カーレス。言ったでしょう？私は「爆炎」だって」

「何の話だ．．．．」

「貴方の勝ちにいくという思いは気力から伝わったわ。素晴らしい素養よ。私は今まで貴方を探していた。妙なモノに邪魔され続けてきたけど、今日にきて貴方の気が顕著になったわ。だからこそ、私はここにきた。貴方は貴族の従者ごときで終わる人材ではないわ。もともと貴族の思想に染まっていなければ戦うつもりは無かった．．．．私はね。貴方を「私達」の元へ誘いにきたのよ」

「誘いだと？俺を？」

「そう、平民の貴方を。特殊な立場の貴方を。貴族の元へ引き取られた哀れな平民の子」

ヒータが大仰に言う。

「貴方は私達の元へ来るべきだわ。腐りきった貴族など見限ればいい。貴方の力を私達が求めているのよ。だから．．．．来なさい。私達の元へ。悪いようにはしない。第八位を倒した貴方なら大丈夫。だから．．．．」

「何を言っているんだ！誘い？仲間になれと？それに第八位を倒し

た？どういう事だ！？」

「私の反応はもう城に感知されている筈。もう時間がないわ。ロイ・カレス。私達と来て。そうしないと私は貴方を殺さなければならぬわ。「爆炎」として」

「話が性急すぎる！それに俺はセンターハートを守るという使命がある！ここを離れる訳にはいかない！お前の誘いには乗れない！」

「トリフロスを倒した戦力．．．しかも平民．．．悔しいわ．．．．貴族に毒されたのね．．．．なら仕方ないわ。もう時間も無いしね．．．．ごめんね。ロイ。貴方を殺すわ」

「謝る必要はない。俺が勝手に断って、お前が勝手に俺を誘っただけの話だ」

「俺の全力の攻撃を簡単に防いだところを見ると、お前はかなり強いのだろう。しかし、俺はお前に勝ってみせる！！」

「無理よ。私は「爆炎」だもの。そう．．．．ただの化物だから．．．．」

ヒータが笑いながら言う。人を喰ったような笑みだ。しかし、どこか真に迫るものを感じる。こんな笑いをする女に俺はなぜ仲間になれと誘われたのだろうか。わからない。だが、俺の知らないところで何か色々と動きだしていたのかもしれない。

「爆炎だか何だか知らないがたいした自信だな。それが気に食わない！！」

俺だって強くなるために努力してるんだ！見下されたくはない！

「でも………終わりよ。貴方を消さなければならぬと「爆炎」の二つ名を持つ私が決めたから。消えて貰うわ。貴方が貴族だったら………こんな心は痛まないのに………さよなら。哀れな平民」

ヒータの両手に莫大な炎が集まる。ヒータが両手を地につけ炎の柱を作り出す。それはまるで樹のように。

「大炎の樹」

ヒータの技がロイへと向かう。

「これはっ！魔力で出来た炎じゃない！？気力でこんな炎を！いたい………」

まずい。安全な場所が無い。中庭の芝も景気よく燃える。莫大な大きさの炎が俺に迫る。

「不可視の斬撃！」

気力を込め、視えない斬撃を放つ。しかし、炎の樹はびくともしない。

まだやれる事はある筈だ。冷静になれ。不可視の斬撃では駄目だ。なら………

「サタン。魔力を頼む」

(うむ)

「莫大な魔力で押し返すっ!!!はあっ!!!」

サタンから借りた魔力で押し返そうと、試みる。しかし、炎は僅かにしか後退しない。

(所詮、借り物の魔力の限界じゃの……いくら魔力量が多
くても本物の攻撃には勝てんか……逃げるのも……
また儂が出るしか……)

「死んでたまるか!」

このままでは後ろの屋敷までこの炎に飲み込まれる。それだけは避けなければならない。

結局、思いつかない。あの炎を止める手段は現時点の俺ではない。

だから……特攻しかない。少しでも炎をせき止めるしかない。

(またそういう決断を!主様!仕方あるまい……また「禁
じ手」を……何じゃと!主様の気力が圧倒的過ぎて儂の魔
力が及ばん!まずい!主様止まるのじゃ!)

「はあっっっ!!!」

俺は死ぬ気で炎に突っ込む。その瞬間、炎と俺の間に一つの影が乱入した。

「この感じはやはり、君だったか。ヒータ君。先ずはこの炎を止めねばならないか。凍結せよ。ブリザリア・フリーズ・ニア」

センターハート現当主。ラザインが戦闘に乱入する。

「まさか、ここってセンターハートだったのかしら？はぁ……………
ついてないわ。面倒ね」

「君とは五年ぶりかね？ヒータ君。あの時は引き分けたが、ここにはアメリカとレーナが残してくれたロイ君がいるんだ。今は負ける訳にはいかない！」

「別に貴方には興味ないのよ。今はね。私が興味を持っているのは後ろの子」

「ロイ君か？」

「そう。もう駄目だったけどね」

「なるほど……………大体理解したよ」

ラザイン様とヒータとやらが話す。正直、何の話かさっぱりだ。

「センターハートに喧嘩を売ったんだ。君は戦争でも起こす気がい
？」

「いやいや。今日は王都の下見。私はまだ動く気は無かったのだけ
ど……………思ったより彼が強くて」

「私が鍛えたんだ。クロフォード同様にね」

「だから、強い訳ね。あーあ。多勢に無勢になっちゃった。ラザインは面倒だし、ロイ・カーレスは諦めるか。」「ただそこにいるだけの最強」を動かされても困るし」

「なぜお前がその事を知っている？ヒータ君」

「私達を甘く見ないで欲しいわね。貴族さん。貴方は確かにまともな貴族だけど、腐りきった貴族は少しお金を渡しただけで情報を一杯喋ってくれたわ」

「賄賂か．．．．．」

「ふふつ。そこまで私達の手が伸びてきているのを自覚したほうがいいわよ？少なくとも王都の学園にいきなり化物を送り込めるくらいにはね」

「アメリカが話していたトリフロスの事が．．．．．しかし、いやに饒舌だな。ヒータ君。そんなに喋ってもいいのかい？」

「まあ、いいんじゃない？」「それら」を証明する方法は無いし。それに貴方だけは貴族なのに話していてもあまり殺意が湧かないしね。五年前にそういうの通り越したし」

「そうかもしれないな。私もそんな感じだよ」

俺の名前が話しにちらほら出てくるが、話しの内容が理解出来ない。何が起こっている？今、この場所で。そもそもラザイン様と対等に話すヒータという少女は何者なんだ？

「では退くとしましようか。じゃあね。ロイ・カーレス。ラザイン。貴方達はいずれ私達の脅威になるわね。．．．それにロイ・カーレスの中にある「モノ」にも挨拶しておこうかしら？」

「！」

こいつまさか．．．．サタンを．．．．

(うつすらじゃが気づかれたの。得体のしれん女じゃ。まあ、儂の得体のしれなさには敵わんがの)

「ロイ君の中だと？どついう事だ？ヒータ君？」

「さあね。それより、私とロイ・カーレスが「会った」という事実をどうにかした方がいいんじゃない？今、彼はかなり危険な状況にいると思うけど？」

「む．．．．」

ラザイン様が黙る。俺は危険な状況にいるのか？

俺らを一瞥してヒータは炎を纏い消え去る。

そして、ラザイン様が俺にある事を告げた。

「ロイ君。話したい事がある。アメリカも一緒だ。とても大事な話だ」

「わかりました」

あの、女についてかな？くそっ。今、俺がどういう状況に立たされているかがわからない。

俺はどうしようもなく不安だった。

第四十二話 「爆炎」との邂逅（後書き）

伏線ばかりでした。

第四十三話 排除命令（前書き）

今日はクリスマス・イヴ。この作品でもいつかクリスマスに関する出来事での話をやりたいですね。タランティルスという世界にクリスマスという概念があるかは謎ですが。今日は連投させていただきます。一応、私の中でこの作品の方向性は定まりました。学園ハーレムでアメリカとキャットキャウフフを想像していた方は申し訳ありませんが、暫くアメリカは出ないかもしれません。少なくともストックの中にはあまりアメリカがいません。ただ一つ言わせてもらおうと、この作品のヒロインはアメリカです！サタンもヒロイン？かな。

第四十三話 排除命令

ここはセントラル城。今、セントラル城での一室で話をしている人物が二人いる。

一人はセントラル王。王都セントラルを治めてきた優秀で老練な王である。

もう一人は王の専属騎士である、クロフォード。「天才」の二つ名を持つ頭が切れる青年である。

「で、何故私をここに呼んだのだ？我が騎士クロフォードよ」

「実は今日．．．．．莫大な気の反応を二つ感じまして．．．．．」

「ほう．．．．．お前が私に忠告が必要だと判断したくらいは気力の持ち主か。だが、何故こんな部屋で話す必要がある？些か狭いであろう」

「人目を気にしなければならぬ話ですので」

「その気力の持ち主が原因か？」

「その通りです。陛下。その気力の持ち主とは「爆炎」です」

「爆炎がー！それはいいよあちらがしかけてくるということか？クロフォードよ？」

「いえ。その可能性は低いかと。「爆炎」の反応があつた場所から見てわかります」

「爆炎の反応はどこから出たのだ？ 場合によっては私はあれを動かさなければならん」

「その心配はありません。もう「爆炎」の反応は沈静化しています。多分もう一人の莫大な気力の持ち主とコンタクトをとつたのかと。そして、爆炎の反応が出たのはセンターハート家」

「それはまた数奇なー！ ！五年前の再来ではないか！ ！もう一人莫大な気力をもつ人物がおると言っておつたな。まさかもう一人とというのはラザインか？」

「そうではないのです。陛下。ここからが問題なのです。陛下は先日

日の決闘を覚えておいででしょうか？」

「もちろんだ。ラザインの従者とジュイスが．．．．．まさか．．．．．「爆炎」がコンタクトをとつたのはラザインでは無く．．．．．あの平民か！」

「非常にまずい状況だと思われます。陛下もお気づきだとは思いますが、もう一つの反応はロイ・カレス。例の平民です。そう、平民なのです。早急に排除することを進言します」

「うむ．．．．．」

「ジュイスを排除できるほどの実力を持つ戦士が「向こう」にいつてしまったら、我々が危ないのです。そして彼はまだ若い。まだまだ強くなることでしょう。彼は危険すぎる。排除するには惜しい

ですが、味方にならないのなら対処できる内にすべきかと。彼が「爆炎」にどう返答したのかわかりませんが、「爆炎」と強い平民がコンタクトをとってしまった。その事実だけで危険です」

クロフォードが王に訴える。

「確かにな．．．やはり平民か．．．しかし、ラザインは反発しそうではあるな」

「その心配はありませんよ。陛下。さつきセンターハートにロイ・カーレスの排除の協力要請を出しました。もし、反発するのなら逆罪で罪を被せるだけです」

「手が早いな。クロフォードよ。しかし．．．惜しい。あれは軍にいれるつもりだったが．．．」

「確かにあの力は魅力的でしたが、仕方ありません。彼が敵にならない内に排除が一番です」

「そうであるな。しかし「爆炎」も興味を持つか．．．やはり、ロイ・カーレス．．．素養があつたのだな」

この瞬間、平民であるロイを対象に城から排除命令が出た。

その命令を聞いて急ぎ帰つたのはラザイン。そうしてラザインはまた、「爆炎」と邂逅するがそれは少し後のお話。

第四十三話 排除命令（後書き）

閑話みたいなお話。少し過去話ですね。ラザインはロイの排除命令を聞いてどう行動するんでしょうか？ヒータが何者なのかはすぐあかそうかなー、と思っています。ロイは超警級の不幸をくらいましたね。

第四十四話 俺は、背を向け走り出す（前書き）

前話短過ぎでした。反省しています。なんか王国側書きづらいですよねえ。力を至上とする王国を書くのは難しいです。

第四十四話 俺は、背を向け走り出す

俺は今、センターハートの屋敷の一室にお嬢様とラザインと共にいた。

「さて、ロイ君。いろいろ聞きたいことがあるだろうが、我々には時間が無い。特にロイ君には。王国が動き出すまえに君に簡潔に状況説明を行うよ？いいね？」

ラザイン様が俺に確かめるような視線を向ける。俺は少々困惑気味ではあったが、視線をラザイン様に向ける。

「わかりました。俺もあの女の詳細を聞きたいので」

あの女とは「爆炎」と名乗った少女の事だ。ラザイン様とは因縁があるようなんだが……

「話はその事だけじゃないんだ……！だから、アメリカにも同席してもらっている」

「父様。荷物持ちは病み上がりなんですよ！あんな決闘騒ぎがあったばかりだというのに今わざわざ話なんて……」

「今は時間が無いんだ。分かってくれ。私も焦っているんだ」

「父様がそこまで言うのなら……」

「では本題に入ろう。まず、状況を分かってもらおう為に酷な事を伝えなければならぬ。ロイ・カーレス。君に学園から退学の通知が

来ている」

「「なっ！」」

俺とお嬢様の声が重なる。

「何故ですか！？父様！？」

「今はその質問に答える時間は本当に無いんだ。次の説明に入らせてもらおう」

ラザイン様が強引に話を進める。俺も退学の通知を聞いて驚きを隠せないが．．．退学の件よりも重要な話があるのだろうか。退学ということは護衛権の従者の解任について．．．か？

「この話は少々突拍子もない事実を淡々と話すことになる。しかし聞いて欲しい。特にロイ君には」

「わかりました」

「君も今、色々戸惑っているとは思っけど、この話は心に刻み込んで欲しい。では話すよ。まず、「爆炎」についてだ。アメリカは知っていると思うが、「爆炎」は平定軍の上位に入る者の名だ」

「父様。今、そんな話が必要なんですか？爆炎がこのセントラルに入った訳でも．．．」

「いや、アメリカ。爆炎はセントラルに侵入した」

「!？」

「しかし、それはさして重要ではない。今はロイ君の問題だ。ロイ君、平定軍とは何かわかるかい？」

平定軍？知らない．．．な。

「平定軍ですか？」

「そこから、説明が必要なようだね。時間は惜しいが、仕方がない。一から説明しよう。ロイ君。よく聞いておくんだ。これは、君自身の運命に関わる」

「わ、分かりました」

ラザイン様の圧倒的な威圧感に俺は圧倒される。何か覚悟を決めた表情だ。

「平定軍というのはね。貴族を打倒する為に作られた戦争組織なんだ。平定軍は今、セントラルの王国に喧嘩を売っても互角と言われている。それほどの組織だ。さっきも言ったように爆炎は平定軍のなかでも上位に入る化物だ。そんな爆炎と君は邂逅してしまったんだよ。その意味は分かるかい？」

「いえ、分かり．．．ません」

「すまない。私もレーナが死んだ時くらいに焦っていてね。理路整然と話すことが出来ていないようだ。平定軍というのはね、貴族を打倒する為に作られた組織ということから分かるように、平民だけで作られた組織なんだ。爆炎も君を殺すのをためらっていたらどう？それは君が平民だったからだ。そして、あまつさえ君を引き入れ

ようとしたようだ」

「俺を平民の軍に？」

「そうだよ。爆炎は君を仲間に取り入れようとした。それが問題なんだ。爆炎ほどの女が直接引き入れようとする男なんて、怪しいとは思わないかい？」

「それが、俺ということですか？」

「ああ。残念な事にね。それに不幸は重なってしまった。君は前から王国に目をつけられていたが、爆炎と君が邂逅した事によりついに王国は動きだしてしまった。ロイ君。今、君には排除命令が来ている」

「え．．．」

排除？俺を？

「ああ。正式にだされた辞令だ。おそらく覆ることは無い。君は、今王都にいるべきではない。かいつまんで説明してるからわからない事も多いと思うが．．．君は今すぐ逃げるべきだ．．．！」

「父様！？性急過ぎます！それに排除ってどういう．．．」

「話してる暇は無いんだ！！！！ロイ君を死なせる訳にはいかない！！説明不足なのは分かっている。ちぐはぐなのは分かっているんだ。だが、これだけは理解して欲しいんだ

ロイ君、君は今王都全体の敵となってしまう。いわゆる賞金首にね。おそらく平定軍に加担していると推測されたのだろう。嘘では

無いんだ。君は今すぐ逃げなくてはならない」

そう言つて、ラザイン様は俺に黒いローブを渡す。

「これで、顔を隠しながら逃げなさい。そしてこれは各関所のパスポートだ。名前も偽造してある」

パスポートの名前はロイ・レスハートになっている。

「ロイ君。今の君は何も分かっていないかもしれない。しかし、そんな君を放り出さなければならぬのは悔しいが、ここに続けたらいずれは衛兵が来てしまう」

「荷物持ちが爆炎と出会つて……王国に目をつけられて……！」

「アメリカ。事態は飲み込めたね？」

「はい。そして排除……荷物持ちが危ないという訳ですか……」

「そういうことだよ。ロイ君そのローブで身を隠しながら逃げなさい。今すぐに。君には暫く暇を与える。従者のことは気にせず逃げなさい」

「俺は今、あの少女と邂逅した事で王国に狙われたということですね？」

「ああ。その解釈でいい。疑問は尽きないだろうが……今は逃げるんだ。そのパスポートがあれば、この近辺の国や村には無料で

はいれるはずだ。そして、少しばかりだがお金も渡しておくよ」

これは……金貨!?

「こんなに貰うわけには……」

「いいんだ。その金は君の生存にも必要だろう。だから……いいんだ……」

ラザイン様が悲しそうな瞳で俺を見据える。お嬢様も悲しそうに……

どうやら、俺は何時の間にか国に狙われるようになっていたらしい。

詳しいことは理解出来なかったが、とにかくこの王都からは逃げないとダメって事が。

「もう時間は無いんですよ?」

「ああ。もう逃げなさい」

「分かりました」

俺は黒いローブで身を隠しながら、玄関に向かう。不意に後ろから声をかけられた。

「ロイ君!」

「!」

俺は後ろを振り向く。後ろには俺が貴族と認めたと二人が立っていた。

「君は私の家族だ。無事逃げ切ることが出来たら何れまた会おう」

「荷物持ち！必ず戻ってきなさいね！これは約束！」

「分かりました！」

そうして、俺は玄関を出た。

目の前には甲冑を着た衛兵達が居た。ここはセンターハートの中庭だぞ？何をしているんだ？

「お前がロイ・カーレスだな！」

衛兵の一人が俺に声をかける。

「そつだが？何か？」

「やはり平民だな。言葉遣いが汚い。間違いないこいつだ。こいつが排除対象だ！」

一斉に甲冑の騎士たちが俺に襲いかかる。俺は条件反射で敵を斬り伏せた。

「何っ……貴様あ……」

ケイルの風を受け続けた俺にそんな大上段の攻撃は通用しない。俺を舐め過ぎだ。

「王国軍の兵もたいした事は無いな」

俺はすれ違いざまにそう告げ逃げた。

第四十四話 俺は、背を向け走り出す（後書き）

久しぶりの更新。何故かって？二作目を無謀にも書き始めたからです。タランテイルスも頑張って更新したいんですが．．．疎かになりがちで。本当にすいません。ストックは腐るほどあるんですけどね（笑）書く時間が．．．

王都逃亡編スタート！それにしてもラザインの説明クソですね。あえてそうしたんですが。だって焦っている様を書きたいからです。はあ。それにしてもアメリカをサバサバと書き過ぎた。反省。本来のプロットとは全然違う劣化番になってしまいました（泣）実はつい先日データがパンクしまして。作者がうる覚えで書いてしまったからです。本当に申し訳ありません。さあ。サタンとの二人旅が第二章です。もう少しだ。

最終話 紅い少女（前書き）

ヒータとのフラグは命がけで書きます。

最終話 紅い少女

俺は衛兵を切った後、黒いローブを羽織り逃げ出す。

衛兵を切った事には何の感情も湧かなかった。不思議な感じだ。ただやることをやっただけという感覚。

路地を何度も曲がりながら必死に逃げる。状況も落ち着いてきた。俺はどうやら今、平定軍のスパイとして疑われているようだ。

「はあ．．．．はあ．．．．」

王都から出られる門にまで来た。もうすぐこの王都から出られる。今後のことはこれから考えよう。門に手をかけるが、不意に後ろから声がかかる。

「そこまでだ。ロイ・カーレス」

「！」

俺は後ろを振り返る。振り返るとそこには優男が立っていた。冷徹な雰囲気を感じさせる男だ。

「私の名はクロフォード。君を殺しにきた。いや．．．．正確には．．．あの男．．．ラザインを失脚させるためだがね」

「ラザイン様を！どういう意味だ！」

「私は師が目障りで仕方がなかった。あの才気。あの強さ！全てが

憎たらしい。そんな中、センターハートに君が来た」

「あの決闘の時から、君を利用してラザインをどうにか出来ないかばかり考えていたよ！」

「そして今のパターンも悪くない。千通りの作戦があつたが、今のパターンは最高だ」

「今、君が着ているローブは何だと思う？」

「ローブ．．．？」

「そのローブは紛れもないセンターハートの家宝！君を殺して罪人協力の証拠としてそのローブを提示すれば、センターハートは破滅だ！」

「なっ！」

「君にはここで死んでもらう。あの憎たらしい男を始末するためにもなあ」

狂ったように笑いながら近づいてくるクロフォード。凄まじい殺気だ。俺は悟る。この敵には勝てないと。

(殺、殺られる！)

俺はクロフォードに背を向け走り出す。門はもう手に届くところまでできているんだ。今なら．．．！

「無駄だよ」

クロフォードの手から闇が発生した。その闇が俺を包み込む。

「な．．．何だ．．．」

「これは対象の生命力を吸いとる魔法。安心しなよ。痛みはないからさ。そのローブを回収するために君に外傷は与えられないし。本来なら尋問して拷問して殺したいんだけど。残念だよ」

クロフォードが歪な表情で言う。

「君はここでお終いだね。おしまーい」

「あ！助けは期待しない方がいいよ？平民が野垂れ死ぬなんて当たり前の事だし、それにセンターハートは助けに来ないしね。君の死因はセンターハートを盲信し過ぎた事さ。残念だよ。君にも才覚はあったのに」

「あ、もう喋ることも出来ないみたいだね！良かった。その魔法が効いてるようで。君が死んでからそのローブは回収させてもらっね！」

クロフォードが狂ったように笑いながら俺に言う。

糞がああ！！クロフォードおお！！

「あれ？まだ息があるの？しぶといなー。助けでも期待してるのかい？だったら安心して君を助ける奴なんていないからさ！」

「誰が助ける奴なんていないだつて？」

「！」

この状況の中、少女の声が響く。赤髪の美しい少女。爆炎と言われている少女の声だった。

「爆炎．．．！何故だ！まさか、ロイ・カーレスは平定軍と繋がって．．．？いや、まさかな。彼はセンターハートを盲信している。データにもあった。ロイ・カーレスがセンターハートを裏切る訳が無い！まさか．．．平民だから助けるのか？爆炎？」

そんな質問に爆炎、いやヒータは笑いながら答える。

「いや。ロイだから助けるんだ」

俺を見てヒータが笑う．．．何故だ？だが．．．遠い昔何かが一

ヒータの手から紅い炎が出る。その炎が今まで俺にまとわりついてきた闇を溶かす。

「はあ．．．はあ．．．」

助かった．．．

ヒータは俺を担いで、クロフォードに背を向ける。

「逃げるのか？爆炎？」

「お前に今は用は無いしね」

「逃がすと思っっているのか？」

クロフォードの手から黒い闇が飛び出る。

「私にそんなチープな魔法は効かないわ」

対するヒータは手から莫大な炎を放出する。

その炎は軽々しく、闇を切り裂き俺とヒータそしてクロフォードとの壁を作り出す。

「今の内に逃げるわ」

そうヒータが言い飛ぶ。俺を担いで。つて飛んでる！？

「なんだ？ロイ？驚いてるの？」

「あ．．．ああ」

何故．．．お前が俺にそんなフランクに接してるのも含めて驚いてるよ。

「大丈夫だった？ロイ？」

心配げに俺を見る。ヒータ。

「俺を何故、助けた？」

「ロイ。もうフリは良いんだって！」

紅い少女はニカって笑いながら言う。

「これでやっと約束の二人旅が出来るね。ロイ！」

「は？約束？二人旅？」

何の事だ？目の前の少女はとても嬉しそうだ。

「え．．．ロイ。まさか．．．約束を覚えてないのか？」

「あ．．．ああ」

目の前の少女の顔が赤く染まる。それは怒りによる激昂だろう。

「あんなに約束したのに．．．ロ．．．ロイの馬鹿ああ！！」

俺は王都の空中でヒータからポディーブローを喰らい気絶しましたとさ。

最終話 紅い少女（後書き）

約束は過去話で。

第一話 紅い髪の少女と黒い髪の少年（前書き）

幼い日の物語。

第一話 紅い髪の少女と黒い髪の少年

これは十年前。センターハートに拾われる前のロイとヒータの物語である。これはロイが記憶を失い、センターハートに拾われる僅か数ヶ月前の話である。

殴られた瞬間痛いと思うより熱い。そんな発見をしたからといって頂垂れるような可愛さを私は持ち合わせてはいなかった。

切れたくちびるから染み出す錆びた味を蹴り出す様にして少女は目の前に居る物を睨みつける。

その紅い瞳に相手がひるんだのは、一瞬のことであった。無理もないと思う。

彼らは五人。蒙古斑が消えているかどうかも怪しい子供だが、こちらもガキなのだから。

「なんだ？ テメエ、その目つきは。さんざん舐めたマネしやがってよお。生きて帰れると思うなよ、コラ」

紅い瞳の少女の頬を殴った貧相な外見の少年が前に出る。

ここは王都セントラルの平民のスラム。土地柄だろうか。中々の雰囲気である。

「その顔を私に向けるな。虫唾が走る」

歳分相応によく回る舌で、彼らを刺激する。

その効果は存分に発揮されたらしい。五匹の野蛮な少年は眼を血走らせ、獲物を輪に囲みながら迫ってきた。彼らに油断はない。

流石、平民に生まれただけはある。ゴミ処理

場と変わらないこのスラムで生活しているからか、彼らはケンカ慣れしている様だ。

気組みだけはくじけぬよう心を保ちながら、しかしヒータは後退してゆく。

このスラムで生活していたおかげで私にもそれなりの心得はあるのだけど、この人数に通

じるかと聞かれたら黙るしかない。

しかし、少女は勇猛だった。

痛烈な自信に身を奮い立たせ、逆にこちらから一手前に踏み出して

――

不思議と耳に心地いい声がヒータの耳に響いたのはそのときだった。

「そのくらいにしたらどうだ？」

いつからそこにいたのだろうか。見やると、貧相な少年のすぐ後ろに不思議と貧さを感じさせない少年が立っていた。

「っ……！」

貧相な少年。いや、もういい。ソバカスにしておこう。ソバカスは狼狽しつつ現れた少年

の方を振り向くと「てめえか……」とわずかに舌打ちをもらす。

私は少年を見る。背は高い。ただし、それほど歳が離れてると思えない。顔も整っていた。

右手に中身満載の袋を持っている。鈍器として成立しそうだ。

「お前らの間に何があったのかは知らん」

そいつは空いた左手で頬を搔きながら後を続けてくる。

「だがけんかはやめたらどうだ？」

「すっこんでろ」

ソバカスはにべもない。

「てめえには関係ねえ。途中からしゃしゃり出てきてぼけたこと抜かすな」

「その通りだが、放っておくわけにもいかないだろう？五対一だしな」

「うるせえ。消えろ」

言い放つ。が、ソバカスにさっきまでの勢いは無い。

「仕方ない。じゃこうするか。俺が」

言いつつ少年はソバカスどもの間を抜けて近づいてきた。その動きに意表をつかれたのか、五人は突っ立ったまま。それを尻目に少年はヒータの隣に立ち、

「俺が彼女に加勢するのはどうだ？これなら五対二だしなあ」

五人はあからさまに腰を引いた。ボスらしいソバカスが忌々しくうめく。

「そいつ……てめえのツレか何かかよ？」

「違う。今日初めて会った」

「だったら邪魔すんな」

「そついう訳にもいかない。ここは退いてくれ」

「ざけんな。どけ」

「断る」

「どけ」

「断る！」

「どかないのならー」

「私を差し置いて話を進めんなっ！」

いきなり割り込んだヒータを全員が顧みる。
心底うんざりした表情でヒータは言う。

「私を差し置いて話を進めんなっ！このカス共！お前たちと話してるとストレスが溜まるんだよ！」

「あー」

隣で少年が納得顔で呟くのが聞こえた。

「何があつたのか想像がついた……」

が、少女は黙殺する。

流石にまずいか？

ヒータの顔に憂が滲んだ時、またしても少年がしゃしゃり出る。

立ちふさがるようにしてヒータの正面に立ちなおも説得する。

「どうしても引く気はないか？」

「……………」

無言。

「わかった。じゃあ。これでどうだ？」

「てめ、それは……」

ソバカスが驚く。彼の両目は少年が首から出したネックレスに釘付けになっていた。

「これをお前らに預ける。その代わり見逃してもらおうというのは？」

「へえ。いいのかよ？」

「お前らだけが悪い訳じゃ無さそうだしな」

「そんなクソみたいな女の為にどうしてそこまでする？」

「クソかどうかは俺が決める。それにここまできて引く訳にもいかない」

「嫌だと言ったら？」

「なら仕方がない。戦争だ」

少年が鋭い眼光でソバカス共を見る。

「へっ」

鼻を鳴らし、ソバカスは間を取る。が、その顔を見れば結論は出ている。

「いいぜ。仕方ねえ。今日は見逃してやる」

その後下品な笑みを浮かべて

「その代わりこいつは俺が借りておく。そのアマはお前が教育しておけ」

手下を引き連れてその場をソバカス達は後にする。

「やれやれ。こんなところか。では君ー」

吐息をつきながらこちらをむいた少年が、うつと身を引いた。

ソバカスが去り際に言った暴言をもつヒータは聞いていない。感情の矛先はもう、少年に向いていた。

まったく。余計な手出しを。これからいよいよ私の見せ場だということにこの少年はそれを台無しにしてくれた。

だけどー無用の手出しとはいえ、助力したことを認めないわけにはいかない。

一方的に暴言を吐くのも躊躇われ、かといって感謝も言える筈なく。

口の中をもごもごさせた結果、結局言い放った台詞はこうだった。

「礼なんて言わないからなっ！」

「いや、そんなものはいらぬさ」

これがロイとヒータの約束の物語の序章である。

第二話 ひとりきりの少年

「そういえば、ケガ手当しないとな」

「ケガ？」

言われて初めて、ひりひりと腫れてきた頬の熱さを知った。

「俺の家、すぐそばなんだ。行こう」

少年が背中を向けて歩き出す。

何を言ってるのだと思った。いきなり現れて、余計なおせっかいを焼いて、その上ケガの手まで？

少女は苛立つ。――何もかも少女の意思がないがしろだからだ。

まったく何様なんだ。スラムでは他人を信用してはいけないのに。

こんな忌々しい場所には一秒だって長居するつもりは無いのに、その上あなたのようないけない男に誰がついていくもんですか。

「早く来てくれないか？ 応急処置は急いだ方がいい」

――なのに。

どうしてだろう。ヒータは今でも分からない。踵を返し、この場から離れるつもりだったのに――気づいたときには彼の姿をひとりで追っていた。

それがスラムで生きてきた少女の転機となった事を彼女は知る由も無い。

「家」とやらに連れてこられたヒータは。有り体に言えば絶句していた。

私自身、平民で今までひとりで生きてきたけど……これは家と呼べるのだろうか。私も似たようなものだったが……

まず、屋根に穴が空いている。ガラス窓は割れていないものの方が少ない。錆び腐ったドアはちゃんと出入口口として機能するのか疑問だ。雨どいからは草が伸び、板切れの壁には苔がむし、そもそも建物の基礎自体が傾いてしまっている。

控えめに言って廃屋。順当に言えば廃材の山にしか見えない。もとからガタのきているこの地区でも頭二つ抜けた朽ちつぷりであった。

「あがってくれ」

ドアを開けて（開いた！？）少年がヒータに促す。が、不覚にもヒータは怖気づいてしまっていた。本当に大丈夫かな？天井が崩れてきたら私にもどうにもできないし。

そんな心情が顔に出ていたのかもしれない。こちらを見ていた精悍な顔立ちの少年がくす、と笑った。一気がした。

刹那、無性に腹が立ち、それと同時に、得体のしれない強烈な情動が

湧き上がる。

弱みをみせたくなかった。不安になっているところを、心細くなっているところをこの少年には悟られたくなくてー

とっさの行動だった。ヒータは胸を反らし、思いっきり高笑いをした。

「ーび、びっくりした!？」

その音声を浴びて少年はよほどたまげたらしく、またたびを吸った猫みたいに目を白黒させ、

「でも、すごくきれいだ。いい声を出すんだな、君って」

「なっー」

かあっ、といっぺんに血が上る。

「なにそれっ。私を馬鹿にしてるの？」

「えっ?違う。本当にそう思ったただけだ。ただの本音。褒めてるんだ」

「そ、そう。ふん、ならいいわ」

ぷいっとなつぽを向きながら、しかし早くも自覚していた。この男を相手にするとどうも私は調子が狂うらしい。

苛立ちついでに肩を怒らせて玄関にあがる。なるほど、外観に比せ

ば案外なことだが、中はちゃんと住居の体を成していた。

物置にしか見えないのはご愛嬌だが、狭いながらも家財道具はよく整理されている。貧相であるものの、不潔な印象はない。

少年が冷蔵庫ーだろう、たぶん。ガラクタにしか見えないけどーを開けて氷を取り出しヒータの頬に当てようとする。

私はその氷をひったくり、「自分でやるからいいつ。余計なお世話だつ」と言った。

ニコニコしながら少年が私に問いかける。

「まだ聞いてなかったな。君の名前は？」

「ふんーヒータ。ただのヒータよ。覚えておきなさい。いつか私は強くなって貴族を見返すんだから」

「そんな野望があるのかーなるほど。俺の名前は」

「聞きたくない。呼ぶつもりもないから」

また少年がニコニコ笑う。たちまち頬が打撲とは別の熱を持つ。感情がざわざわ揺れる。

「こ、このっー」

その波立ちを誤魔化すように、思考野かまろび出た台詞をそのまま口にしていた。

「へらへら笑うなっ！ガラクタ男！」

「ガラクタ男？．．．って俺か？」

「お前以外に誰がいるんだ！」

「ガラクタってなんで？あ、ここら一帯のことね．．．でもそう
だとしてもやっぱりわかんないな。何がどうなったらそうなるんだ
？変な奴だな。君は」

「文句あるの？あんたの名前なんてそれで十分よ。ーとにかくっ
！」

妙なネーミングを施した気まずさに声を荒げながら、

「あんたのその見透かしたような笑い顔を見てみると気分が悪いの。
目障りだっ！どこへとも消えろっ！」

少女は割と残酷な事を口走る。が、当然と言うべきか、この部屋の
主人たる少年に場を去る気配は無く、むしろその笑みを一層深くし
ているように見える。

ヒータはますます唇をひん曲げた。やはりこの男は良くない。こち
らの冷静な感情をやたら引っ掻き回してくるのだ。そのうち、自分
の何かがおかしくなってしまう気がする。

もう相手にするのはやめた方がいいー

ニコニコ笑う少年から顔を背けそう心に誓うヒータ。

が。それは五分も持たなかった。どこにも行こうとせず、笑顔のまま黙ってそばにいる少年の視線に間を持たず、結局はヒータの方から口を開いてしまう。

「あなたはどうしてー」

「ん？」

「どうして私を助けようとしたの？」

「みんな同じ事を聞くんだな。それってそんなに理由がある事か？」

「答えて」

「そうだな．．．要するに君の未来をダメにしたくなかった。あのままいけばひょっとするとそういうことになっていたかもしれないし。一目見て思ったんだ。君はその内凄い人になるって」

「そんな事は分かりきっています」

「ははっ。君も言うなあ。じゃあこういう事にしよう。俺がお前を気に入った。これじゃダメか？」

ヒータに言わせればこの男のほうがよっぽど物ほざく。自身の才覚には自負をもつ彼女だが、こう面と言われると居心地が悪くなる。

おまけにあけすけな口調で気に入ったなどー

「あんたさっきネットクレスみたいなものを渡してたけどあれは何？」

「ああ。あれか。たいしたものじゃない」

「そんなわけないじゃない。あいつがあんなにあっさり退いたんだから。答えて。あなたに借りは作りたくない」

「いや、本当にたいしたものでは無いんだ。あれについてはあんまり言いたくないんだよ……」

どうやら初めて弱点をつけたらしい。いけすかない男が困った顔になったのを見てヒータはちょこっとだけ満足した。

ただ、さらに畳み掛けて意地悪する気には不思議となれず……

「ところであなた、家族は？あなたはどうでもいいけど、家族にはお礼くらい言わないとね」

「いや、母さんも父さんももう戻ってこないよ」

「……え？」

まさか、私と一緒に？

「ここには俺ひとりで住んでいる」

舌打ちしたい気分だった。私と同じスラムに住んでいる時点で気づくべきだった。どうやらまずいところに触れてしまったらしい。

「ひとりで住んでいるって、だいたいあんた今いくつなの？」

「俺か？五歳だが」

五歳！私と同じ．．．なのにこの少年は私よりもよっぽど上手くやっている様だ。私など盗みで生活するくらいしか出来なかったのに。この少年は家まで持っている。

「．．．．．．」

「それで、どうする？」

少年が問いかける。

「何が？」

「いや、君はきつとスラムの子だろ？もどるつもりなら送っていくが？」

「ーあるいはこの瞬間だったかもしれない。この少年に対抗意識が芽生えたのは。」

その刹那激しい屈辱と羞恥がヒータの全身を支配する。

誓った。ヒータともあろう者がここで引くわけにはいかない。ぜったいに。ヒータの何たるかをこの少年に叩きこんでやる。

「それともここにいて住んでるのは俺だけだし。そうしたいなら好きなだけ居るといい。狭いところだし、そう余裕も無いからもてなしはできないが」

少年は少女に手を差し出す。だから、少女は迷わなかった。少女は少年の手を取った。

どうやら少年の家に同居人が増えたようだ。

第二話 ひとりきりの少年（後書き）

約束までまだまだです。一気に投稿しようかなあ。迷う。

第三話 生活

ガラクタ男と一時の共同生活を始めたものの、後悔はすぐにやってきた。彼はヒータを甘やかさなかった。こうなった以上立場は対等だ、であるからには暮らしていく上で必要な作業は全て二人で分担しなければならぬと言っているのである。つまり、君も家事をやってくれと。

冗談ではないと、ヒータは突っぱねるが、ガラクタ男が素人目にも鮮やかな手さばきで家事をこなしている姿を見せられればそうも言っていないらなかった。この男には何を競っても負けたく無かったのだ。見よう見まねで。何倍にも劣る効率で。それでも四苦八苦しなから彼女は家事をするしか無かった。

暮らしていく上でトラブルはあった。お風呂はガラクタ男と共同だし（お風呂があるだけ良いほう）トイレが放つ怪奇さにはくじけそうになったし（トイレが家にあるだけマシ）、腐った廊下の板を踏み抜いた時には三途の川を渡る覚悟さえした。

それらのことがどうでもよくなる難事もすぐにやってくる。ガラクタ男の住まいは六畳一間。そこに、男女二人が安全な距離を保って就寝するスペースなどある筈もない。少女は毎回顔を少し紅くしながら、覚悟を決めて就寝に挑まなければならなかった。寝ている最中は彼の一举一動に集中しなければならなかった。

おかげでいつも睡眠不足である。

そんな日々が濁流のように流れた。

ヒータ自身意外に思ったが、自分には存外な適応力があつたらしい。ぶつぶつと文句を垂れながらも、三日も経てばこの生活なりの面白さを見出し出すようになった。

まず家事に楽しさを発見した。スラムの少女に暇は売るほどある。

計画はこうである。手始めにガラクタ男の仕事ぶりを観察し、その動きを徹底的に頭に叩き込む。そして家主がいない内に記憶を引き出しながら、ああでもないこうでもないとそれを再現する。

ターゲットが帰ってくるころには炊事、洗濯、掃除、全てが完璧にこなされているという寸法である。そして目を丸くする少年に向かって「どうだっ！」と言わんばかりの顔でふんぞり返るのだ。すると奴は例の笑顔で、同居人の手柄に見合った賞賛の言葉を並べ立てる。不思議と悪い気はしなかった。

もっとも彼女の教科書はガラクタ男ひとりであり、その仕事は彼の寸分違わぬコピーであり、つまり彼の作った朝食をそのまま真似たものが夕食に並ぶことがあったりするのだが良いのである。「私だつてこのくらい出来るんだから！」ということが言いたいのだから良いのである。少年は一日二食、まったく同じ献立を食べることになつても平気である。

少女ははじめは戸惑つたものにも慣れ、かつてなら拒絶していたであろうことにも積極的に関わるようになった。

毎日が、全ての経験がヒータにとって冒険だった。一週間が過ぎるとヒータもこの生活に不都合を覚えなくなつていった。

ガラクタ男は底が知れなかった。彼の言ったことに嘘は無かつたの

だ。つまりこの少年は本当に六畳一間のボロ屋敷に住み、生活の全てを自分だけで賄っていた。家事だけではない。食い扶持まで自分で稼いでくるのである。彼の周囲もそれは同様だった。というよりその周囲が彼に仕事の口を与え、なおかつ労働力として頼りにしていたのである。スラムというのはそういうところだった。

例えば、件のソバカスですら、父親と屋台を引いていて、役に立っている様子だった。その姿を見るたびにヒータは自分から目を逸らした。

家事では彼に一つも勝てるものが無かった。いくら忠実に再現しても、所詮付け焼刃のコピーである。経験の差はそう縮む事は無いのだ。

知識の量もその使いこなし方も、全て向こうの方が上に思えた。

一体どこから仕入れてくるのか、記憶力の良さでは人後に落ちないと自負していたヒータが舌を巻くほどこの少年はものを知り、それを自分なりの解釈で咀嚼していた。

さらに時が過ぎた。ガラクタ男に自分のすごさを思い知らせてやるという当初の目的は、達成されるどころか、いよいよ遠ざかっていくようみえた。それと反比例するようにして自分の背中はより近く、はつきりと見えるようになってくる。

日を重ねるごとに居心地の悪さは増してゆき、強くヒータをせきたてるようになっていた。

だから、必然だったのだらう。彼女がその行動に出たのは。

第四話 ネットレス（前書き）

約束まで長い。誰か代わりに書いて欲しいです。

第四話 ネットレス

きっかけは偶然で、実行は即断だった。

先日、ソバカスが居た空き地を通りかかった時、ソバカスが仲間とともにたむろしているのが見えた。

逡巡する間も勝算を見い出す暇もない。足がひとりでに向きを変えていた。

「なんだ・・・てめえかよ」

足音に気づいた五人が一斉にこちらを見る。ソバカスが片眉をあげた。

「さつさと消えな。約束だからな。お前には手をださねえ」

たわごとは聞き流し、ヒータは足を肩幅に広げ、両手を腰に当てて言い放った。

「あれを返して」

「あん？」

「この間、あの男があんたに渡してたネットレス。あれを返して」

「へえ。なるほどねえ」

ソバカスが意図ありげに唇の端をつりあげ、ポケットにいれた手を

抜いた。

「このことかよ」

ネックレスをじゃらりとぶら下げてみせる。

「で、こいつをどうしろって？」

「返して」

「馬鹿かお前。そう簡単に渡す訳ないだろ」

ソバカスはせせら笑い、

「ところでお前、あいつんところで暮らしはじめたんだったってな？物好きだよなあ、あいつもお前もよ。なんだよ、いつからそんな関係になったんだ。聞かせてくれよ」

「.....」

「このあたりは結構、無茶苦茶なとこなんだけどな。それでもお前からみたいなのが二人で暮らしてるってのはさすがに聞いたことないぜ。どうだ、おままごとは楽しいか？まさかその年でよがってんじゃねえだろうな、おい」

ヒータは毒舌に錠をかけた。

「どうすれば返してもらえるのかしら」

「けっ。最初からそう言えばいいんだ。まあ俺らとしてもよ、あの

野郎に免じてお前には関わらないようにしておくつもりだったけどよ。でもこういつことなら話は別だよなあ?」

取り巻きに同意を求める。手下どもが返した笑みが予想通り醜悪だった。

つい、苛立った。

「遠回しなやり方は好まない。さつさと条件を言いなさい」

「あん?人に頼みごとをする時の口の利き方ってのはそんなもんなのか?ええ?」

「・・・悪かったわ」

「何か言ったか?」

「ーごめんなさい。私が悪かったわ」

「わかってきたじゃねえか」

優位を確信した声でいっそう凶に乗ってくるソバカス。

「ま、返してやらないこともないぜ。お前の態度次第だよ」

「どうすればいいの」

「どうすればいいと思っただよ」

「私はもう謝った」

「それで謝った内に入ると思ってたのか？」

私はぎり、と奥歯を噛む。もうやめてしまったらと誰かが囁く。言いたい事をぶち撒けて、ついでにソバカスに鉄拳の一つでもお見舞いしてさっさといつもの放浪生活にもどればいい。

迷う。衝動に従いたくなる。こんなこと私がやるべきではない。放っておけば――

「どうした黙っちまって。それでお終いか？ だったらやっぱりこの話は無しだ。なにしろこのネックレスはあの野郎の家族の形見らしいからな。そう簡単に渡すわけにはいかねえよ」

えー

「何だつて……?」

「あん？ 何だお前。それも知らず取り戻しに来たってか？ こいつはあの野郎が肌身離さずもっていたもんでよ。奴の家族がたった一つだけこの世に残したもんらしいぜ。ま、俺はよく知らねえけど……
・ これまでは手放すどころか、他人に見せることも滅多に無かったんだがな」

「……………」

どうして。どうして自分はこんなところにいるのだろう。最初は遊び心だった。あのガラクタ男の荷物を奪って何時ものように一人で生きていくつもりだった。なのに。

なのに。どうしてー

「おっ？」

片膝をついたヒータにソバカスが意外そうな声をあげた。

「へえ。そこまでやるかよ。いいぜ。それだったら文句はねえ」

ーそんな自分にあの少年は手を差し伸べてくれた。危ういところを助けてもらった。何も聞かずに家に置いてくれたし、たくさんのことを教えてもらった。

「どうした？返して貰いたいんじゃないのか？」

おまけに彼は私とは対極の人間だった。誰にも甘えず、彼は自前の二本の足でしっかり立てていた。

その姿は私にはとても眩しく映ったのだ。

せめて対等になりたかった。

借りを作ったままでいたくなかった。

借りの大きさを知った今なら、なおさら。

「ごめんなさいー」

両膝をついた。

「お願いだから。返して」

口笛。

「こいつマジでやりやがった。でもな」

私にソバカスが下品な笑みを向けていることは頭を下げても分かった。

「悪いが、それじゃ足りねえんだ。土下座ってやつはよ、もっとこ
う、額を地面にこすりつけてー」

「それじゃ話が違う」

と、ヒータの心情を口にしたのは彼女ではなく。えっ？と首を上げたヒータが見たものは。どうしようもなく憧れてしまった、男の顔だった。

ガラクタ男だったのだー

第四話 ネットレス（後書き）

ヒータの伏線回収にどんだけ時間かけてんの？って感じですが、それはご愛顧ということまで。

第五話 揺れる赤髪（前書き）

第零章とか・・・すいません。

第五話 揺れる赤髪

「それじゃ話が違う」

とヒータの心情を口にしたのは彼女自身ではなかった。えっ？と顔を上げたヒータが見たものは。横ざまに吹っ飛んでいくソバカスの身体だった。

「大袈裟だな。そんなに強くは殴ってはいない筈だ」

ガラクタ男。

「全てが丸く収まるようなら傍観してるつもりだったが……こ
うなったら仕方がない」

何時の間に。いや、いつから。

「……てめえ。やってくれたじゃねえか」

ソバカスがふらふらと、しかし怒気を滾らせながら起き上がる。

「それは俺のセリフだ。彼女を見逃してもらおうという約束には、こ
ういう事をしないという事も入っていたんだが？」

「けっ、だったらその契約書でもここに持ってこいや。そうすりゃ
納得してやる」

「……ほう、まだわかってないのか」

その声を聞いた時の身震いをヒータは今も忘れる事が出来ない。

「俺はもうキレてんだ」

ガラクタ男の顔は背になって見えなかったけど、見なくて良かったのだろうと思う。五人の、憐れを催すほどの引きつった表情を鮮明に覚えているだけに。

「ーま、いいか。さっきの一発は彼女が受けた屈辱の分。それでこの件はチャラにしよう。納得してくれるな？」

続いた言葉に彼らは一も二もなく頷き返す。

「そうか。なら良かった」

笑い、仲裁者はポンとひとつ手を叩いた。するとたったそれだけで場に張り詰めていた刃物のような気配が、何か幻術のように立ち消える。

「ところでだ。その問題が解決したところでもう一つ提案がある」

「な、何だよ」

「俺に何か命令したいことは無いか？」

「はあ？」

突拍子もない提案の内容に、当人以外の誰もが怪訝な顔をした。

「好きなようにひとつだけ俺に命令しても構わない。俺に出来る範

困らな。その代わりーそれと引き換えにネックレスは返してもらう」

「なら、てめえを好きだけ殴らせる！てめえは前から気に食わねえ奴だったんでよ！」

ソバカスと取り巻きが汚らしく笑う。

「ちよっー」

ようやく私は口が動いた。

「ちよつとあんた、なに考えてんのよ、そんな、」

「君は黙ってて」

思いのほか強い言い様に、つい押し黙る。でもここで引くわけにはいかない。

「こつ、このばか！やめなさい！そんな、そんなばかげたことー
大体これは私が蒔いた種で、だから私が」

「いいんだ。君は手を出すな。絶対にね」

制しても、彼の頑固とした声に身を打たれると、またしても動けなくなってしまう。

一度もこちらを見ぬまま少年はヒータ元を離れた。なす術もなく、その背中を見送る。立て続けの出来事に私はすっかり混乱していた。どうしたらいいかわからない。とにかく何かしなきゃと思って「

君は手を出すな」の呪縛に捉えられ、へたり込んだまま一步も動けない。相手よりずっと体重の軽い少年が無抵抗に宙を舞うたび、見栄も外聞もなく私は悲鳴をあげていたように思う。途中からは目も耳も塞いでしまっていたかもしれない。

そういう自分の無様さを気に留める余裕すらなかった。もう何が何だか分からなくなった。決壊した自分の感情の奔流に飲み込まれ、訳も分からず、ぼろぼろ涙を流していた。

ひとときわ景気よく少年の身体が吹き飛び、ようやくそこで彼はサンドバッグ役から開放された。私は上機嫌で去っていく五人には目もくれず、一目散に駆け寄った。

「ガラクタ男っ！」

彼は身体中泥まみれ、顔は特殊メイクでも施されたように腫れ上がっている。ただ、手にはしっかりとネックレスが握られていた。

「ごめんなさいっ！私が、こんな、私のせいで……」

「俺も馬鹿だよなあ」

少年が自嘲げに呟く。

「まだ顔も見たこともない親の形見をこんなにも守ろうとしてな……」

「俺はまだ何か期待してんのかな？このネックレスを持っていれば、いつか家族が実は生きていたーとか言っただけ俺を迎えに来るとか、な」

「そんな訳無いのにな。このネックレスがあつたところでどうにもならないというのに・・・俺のせいだー君には迷惑をかけた」

ガラクタ男がすまなそうに謝る。

「い、いや、私がー」

私はそんな彼の様子を見てまた泣きそうになる。今の彼はいつもと違って弱いのだ。風が吹けば飛んでいってしまう気がしてー

「そんな風に君に泣かれると、俺の立つ瀬が無いんだけどな・・・

」

少年と少女はしばらくその空き地で佇んでいたー

第五話 揺れる赤髪（後書き）

このヒータとの話の後に実はロイの記憶を失ったエピソードがあるのですが、それは第二章の後という事になります。実はプロットが少ししか完成していない（泣）時系列的に混乱させてしまい申し訳ないです。

第六話 初恋

「見た目は酷いだろうが、この手の腫れはどうってことない。ただ早く冷やさないと。治りが遅いから」

少年と少女はボロ屋敷にもどって来ていた。少年は口に入る水流に苦慮しながら、言いよこしてくる。

「彼に一発入れてチャラって事にしたがーあんなものじゃ君の気は済みそうにないからさ。だから、とりあえずこんな感じに決着をつけたんだが、どうだろう？今回の件これで水に流してくれないか
．．．？」

首をあげて、にこ、と笑いかけてくる。その顔はずいぶん変形していたけど。どうやら大事はなさそうで。ようやくほっとして、同時に抑えていた気持ちが急にあふれてきて。

「ばっ、ばっ！あなたのその、へらへらした顔を見ると私は腹がたってくるのよっ、このガラクタ男！」

ダメだ。また泣けてきてしまう。

「ーうわ。ダメなんだよ。俺、そんなふうに泣かれるのは。ほら、頼むから泣き止んでくれ」

両手で顔を覆ってるから見えるわけではないけど、彼が困り果てた表情をしているのがわかる。たぶん頭も掻いている。

「なぜそんなに泣く．．．怪我も無かったし。君がなく理由は何

処にもー」

「それ……」

私は指を指す。ネックレスを。

「親の形見何でしょっ！何でそんな物を私の為に差し出すのっ！」

私は泣きながら、怒る。スラムで生まれ育ったからこそ分かる。親の大切さ。その思い出のネックレスを私の為なんかに使わせているのがたまらなく嫌になる。

「どうしてーどうして最初からそういう大事な事を言わなかったのよっ！私に！」

「……だつてさ、」

そう呟いて。少年はその時、始めて年齢相応の子供らしい表情を見せた。拗ねるようにくちびるを尖らせ、そっぽを向いて、

「かつこ悪いじゃないか。そんな物に頼って生きているなんてさ」

「かつこ悪いとか、そんなのは問題にすることじゃないでしょ！」

「大問題だ。だって俺は、君にそういうところを見せたくない」

「えっー？」

不意に鼓動が跳ね上がった。同時に、意識を覆っていた憤りのもやが掻き消えてー

興奮のあまり気づかなかったことが次第に見えてきた。容赦のない青タン。半ば塞がったまぶた。餌をいっぱい詰め込んだハムスターみたいに膨らんだ頬。ひどい顔だった。高まっていた感情が予定とは違う方向に爆発してしまった。

「……ちえ」

無然として、少年がいつそう拗ねてしまう。

「そこまで笑うことないじゃないか」

「だ、だって、その顔、」

私は腹を抱えて悶絶した。私のせいで付いた傷なのに我ながらいい性格だけ。

その笑い声と共に心の隅に残っていたわだかまりが、ほこりくさい物置の窓を開け放ったようにすうっと空に溶けていって、

「……！！げほっ、げほっ」

笑いすぎて気管支に何か入った。

「だから、言わんこっちゃない。ーでもなんか、安心したー」

「……？」

背中をさすってくれる少年を見上げる。不細工で、だけどひどくい笑顔がそこにあった。

「ちゃんとそんなふうに笑えるのなら、君はもう大丈夫だよ」

「.....」

ああー

その瞬間、理解してしまった。ぜんぶ、すべて彼はわかっていたんだろうな、と。そして自分はこの少年に多分ずっと敵わないだろうな、と。それを意識した時、胸の奥にぽつんと温かいものが点じた。それはすぐに温度を増し、やがてせつないほど熱くなった。

「? どうした?」

彼の顔がすぐ近くにあった。

「? 大丈夫か?」

くちびるもまた、そこに。

身体は自然に動いた。

「ーえ?」

そっと、重ねた。

第七話 約束

彼の顔がすぐ近くにあった。

身体は自然に動いた。

そつと、重ねた。

「……………え？」

流石の彼もあつけにとられたようだった。魂の抜けたようにぴくりとも動かない。彼の動揺は遅れてやってきた。

「な、な……………なっ」

が、求めたヒータの方がもっと動揺していた。行為に及んではじめて自分のしたことに気づき、

「か、かんちがいしないでねっ！」

私の思考が白一色に塗りつぶされる。舌の先がもつれて上手く動いてくれない。

「今のはーそう、ちょっとしたあいさつっ！他の酔狂な腐った貴族の真似事をしただけっ！」

言わなきゃ、何か言わなきゃ。場を繋がないで。

「そう、いわば今回ののは、私を助けてくれたご褒美の様なものでー

「

言わなくちゃ。

「大したことじゃ無いんだから。こんなの他の国じゃ当たり前なんだから」

ちやんと言わなくちゃ。

「……でも初めてだったんだから」

言わなくちゃ、

「真似事だったとしても、ご褒美だったとしても、他の国では当たり前でもー私にとっては初めてだったんだから」

まともに顔を見られないけど、

「だからちゃんと責任はとってもらうんだから。言い逃れは許さないんだから」

見苦しくて、支離滅裂だけど。でも。言わなくちゃ。伝えななきゃ。

「い、いやだとは、言わせないからねっ!」

「.....」

「い、言わせないんだから.....」

「.....」

「あ、あの、ほんとにいやだった？あの、だったらその、ごめ」

少年の人差し指がその先を遮った。

「いやー嫌じゃない」

ぼりぼりと頭を掻きながら。明後日の方を向いて。

「ーほんとつに？」

「あ、ああ」

「ほんとにほんと？」

「ああ。本当だ」

「そう．．．それだったらいんだ．．．」

会話が途切れた。うなじまで赤くしてこちらと目を合わそうとしな
い少年を見ているとー今更ながらに羞恥の波がやってくる。

それを振り払うように、叫んだ。

「ー今は！」

彼の胸もとあたりに視線を固定して、

「今の私は、あんたに全然敵わないけど、でも！いつか必ず追いつ
いて見せるから！がんばって、追いついて、あんたをぎゃふんとい

わせてーそうして、あなたの隣に立てるだけの人間になるから！」

「……………ああ、楽しみにしてる」

「そついえばあなたの名前は？」

少女は後悔する。まだ彼の名前すら聞いていない。

「やっと聞いてくれたな。俺はロイ。ただのロイだ」

「君はー」

少女は君という言葉に過敏に反応する。

「君じゃない。私はヒータ。ヒータって名前があるんだからっ！」

「おおっ。そうか」

会話がまた途切れる。しかしそれは気まずさによるものではなく羞恥によるものだ。

「じゃあ、ロイ」

そんな張り詰めた雰囲気赤髪の少女は軽く切り裂く。

「さっきのロイの言葉、私は絶対忘れないからね！次にー次に会う時まで、私がロイなんて及びもつかないほどすごくなる時まで、絶対忘れないんだからっ！忘れてたら承知しないんだからっ！ぜつたい、ぜつたい、承知しないんだからっ！」

「ああ。忘れない。忘れないさ。ヒータ。約束する」

「もしヒータが俺を忘れても俺はヒータを好きでいよう。俺は、こんなにも君を好きになってしまった」

「これから先、俺とヒータの道は交わらないかもしれない。それでも、俺は君をーヒータを好きでいる」

ロイは深く頷いて私にまたあの笑顔を見せた。ひとたまりもなかった。風邪をひいたみたいに頭の中がぼおっとなつて、心が痛いほど息苦しくなつて、そして。

「待つてるよ。俺。その時まで」

今度は彼から顔を寄せてきた。ヒータは、拒まなかった。

その数日後。

「もう行くのか？ヒータ？」

私はあのボロ屋敷を出ようとしていた。彼の隣に立つ為、広い世界をみたいからだ。

「うん．．．」

ロイと出会う前とは違う、前向きな放浪生活をしに行くのだ。たまらなく嬉しい。だけど．．．ロイと離れるのはたまらなく寂しい。

私、やっぱりー

そんな時、ロイがポンつと私の頭に手を当てて髪をくしゃくしゃつとする。

髪の中に何か入れたようだ。

「何をするんだっ！ロイツ！」

手探りで私の髪の中から混入物を探す。それはネックレスだった。

「ロイ……これ……」

「それを俺だと思って行け。それでもうヒータなら大丈夫だから」

「ロイ……ありがとう……」

ロイが年相応の笑みを見せる。

「気にするな。その代わりにーお前が帰ってきたら、俺と旅をしよ
う」

「旅？」

「ヒータと一緒にどこまでも生きてたくて、こんなスラムじゃなくて
さ」

ロイが照れ臭そうに笑う。

「ダメ……か？」

「わ、わかった！」

「ロイが迷子にならない様に私もすっかり世界を見てくるっ！そしてたら私がロイを案内出来るねっ！」

「頼りにしてるぞ？ヒータ」

私は胸を反らせて、言う。

「任せなさいっ！」

「調子がいいな」

ロイが苦笑する。

「そろそろお別れだな。ヒータと過ごした時間とても楽しかった！また会おうな！」

「うんっ！」

別れのあいさつは済ませた。私はもうスラムを振り返らない。ネットワークを首に掛けて、私は最愛の人を思いながら、この国を出て行く。

「またね。ロイ」

少年と少女のスラムで芽生えた恋はこれにて了である。

少年と少女の恋は世界を舞台に動き始める。

第七話 約束（後書き）

過去編って面白いかな？自信無いんですけど
はあ。ヒータとロイを第二章では頻繁に出すかもしれないです。ア
メリアはしばらく会えないかも。王都がロイを拒んでいるので。ロ
イが王都に戻る日は来るのか、そしてヒータとの物語が第二章の
見所ですかね。サタンは変わりなくです（笑）サタンはロイの使
い魔なんで便利なキャラです（笑）

第八話 移住（前書き）

このまま第二章へいこうかな〜と考えていたのですが、ロイが何故、記憶を失ったのかというストーリーをそろそろ書かなきゃならないなあと思ひまして。書きたいと思ひます。視点は俺という一人称から分かるようにロイです。

第八話 移住

俺とヒータが別々の道を歩み始めてはや三日である。

ヒータは俺に頼りたくないと言って、俺と違う道を歩み始めたが、案外俺もたいしたことのない人間だ。

今は、俺がヒータに頼りたいな。そんな気分だ。何故かって？

スラム中から迷惑そうな目で見られているからだ。

前日の乱闘騒ぎが予想以上にスラム中に噂と

して回っていたらしく、スラムの子供を必要以上に刺激してしまう俺は住人にとって迷惑らしい。ただでさえ、スリや盗難が横行しているからな。これ以上の厄介事はスラムの住人も嫌なのだろう。

おかげで、俺はスラムを出て行く事になって

しまった。俺も必死に食い下がったが、駄目だった。所詮、五歳の子供。どれだけ頭を働かせたとしても自分の保身についての美辞麗句は言えなかった。

俺は荷物をまとめ終わり、スラムに背を向ける。計らずも俺もスラムを旅立つことになってしまった。

でも、時折スラムの様子も見なければな。「あいつ」が帰ってくるかもしれないし。

俺はクスッと笑う。どうやら俺はあいつに惚れすぎたらしい。あいつの顔を想像するだけで幸せになれそうだ。

幸い、知り合いのツテでセントラル近郊のローグ村に住んでいる住人に協力が得られるらしい。

ローグ村に住居を構える許可ももらったしな（自作のボロ屋敷）。

食いつ持が無いのが不安だが、それはおいおい考えよう。

俺はローグ村に向けて足を踏み出した。

ローグ村というのは小さな村だった。農民や木こりが住人の大半を占めているようだ。要するに平民による貧相な土地の簡素な村。スラムとそう大差ない。

平和な村だった。村の住人も俺をとて暖かく歓迎してくれた。過疎が進んでいた村なので、俺という若い労働力は貴重なようだ。

とある物好きな貴族がこの貧相な土地を村と言われるまで、まとめあげたらしい。確か、センターバード？ハート？そんな名前だ。

その貴族のおかげでここは平民の集落でありながら、未だに平定軍の影も見えない。争い事を嫌うローグの住人もありがたっていた。

この村の人材不足もあつてか、仕事はすぐみつかった。簡単な荷物運びと衛生管理の仕事だ。俺は持ち前の家事スキルを活かしてそれなりに頑張った。

結果。

「お〜い。ロイ、今夜どう？一杯？」

それなりに村の人と仲良くなった。スラムと違い同年代で話す相手は居なかったが。

「やめておこう。カルス。俺がまだ五歳という事を忘れていないか？俺は酒は飲めない」

「おめえが五歳とか詐欺だろ？いいじゃねえか」

「でも遠慮しておくよ。また今度頼む」

「わかったよ〜ロイのい・け・ず」

「もう酒が回ったのか？」

ここのみんなは明るくていいな。スラムとは違い生きるために必死で駆けずりまわらなくていい。

ヒータと一緒にここで暮らして行きたいな。

俺はそんな事を思いながら、本日のお仕事、薪割りに挑む。

それなりに金が溜まってきた。それは俺がこの村にきてからの年月も示しているようだった。

今日は俺の所に洗濯の依頼がきている。何故、自分で洗濯ぐらいできないのだろうか？

俺は村人に挨拶をしつつ、古着を受け取り川へと向かう。この時期の川は水温が低いが我慢するしかない。川へ洗濯へってやつだ。

川へ向かう途中、俺は村からちよつと離れた村に小屋を見つけた。

あれはなんだろうと思いつながら俺は今日の仕事を完遂した。

翌日、カルスに森の小屋の詳細を聞いた。

「へ？先日越してきたばあさんと子供じゃねえか？おめえとおんなじくれえの小さい可愛い女の子だったよ？」

カルスが真昼間から酒臭く言う。

「お！ロイ〜てめえ！その女の子に恋でもしたのかあ？ま、ローグじゃおめえと同年代なんていねえしな。話相手にでもしたらいいんじゃないねえか」

ガツはつはと笑うカルス。酒臭い。

しかし、俺と同じくらい女の子か・・・恋うんぬんについては否定させてもらうが。

カルスの言うとおり暇があったら、仲良くなって損はないか。よし、いつか会いに行こうかな。

「ヒータ以来、同年代の子と話をしてないからな。寂しさもあるってもんだ」

俺はそう、ひとりごちる。よし、とりあえず今日の仕事を完遂しよ

う。

翌日、余裕が出てきた俺は村からちょっと離れた森に向かう。小屋があった。

その小屋の周辺に一人の女の子がいた。どうやらカルスが言っていた少女のようだ。

少女の髪は黒。森の木々とともにその美しい黒髪がなびく。

まさに、幻想的である。俺なんかがしゃしゃり出ていいのだろうか、と迷うが俺は少女に向かって声をかける。

その少女はゆっくりと俺に顔を向ける。黒髪の長い髪をしたとても可愛い子だ。

これが、俺とレスティアの話の序章。

第八話 移住（後書き）

レスティアをやっと出せた！長かった

第九話 奥手

「君の名前は？」

俺は黒髪がよく映える少女にそう尋ねる。少女の体が俺の言葉にびくん、と反応する。

「……………誰ですか？」

少女の美しいソプラノボイスが木々のざわめきと共に響く。

「俺は、ロイ。最近、ローグにやってきたんだ。これから、よろしくな」

「私は…………レスティアって名前です。けど…………おばあちゃん知らない人とはよろしくしちゃダメって…………」

レスティアが俺を警戒しながら言う。あまり人付き合いとか得意じゃなさそうだ。多分、俺が怖いのだろう。早い話が内気で。

「なら、これからお互いを知っていけばいいんだ。そうしないと、いつまでたっても人は一人だ。たまには、相手に一步踏み出さなきゃ」

俺は、少し膝を曲げレスティアの目線でレスティアに語りかける。なるべく優しく。丁寧に。怖がられない様に。

「そ……………かな……………」

レスティアが戸惑いながらも、考える。

「そうさ。まずは俺と『よろしく』しよう。それとも迷惑か？」

子供の面倒をみてくれって、依頼の経験則から知識を総動員したんだが、失敗したかな？

「ううんっ。迷惑じゃないよ。でも私、他の人と話すなんておばあちゃん以外始めてで」

「そうか．．．じゃまずは俺と友達になってくれるか？」

「友達？」

「そう、友達」

「それって何？」

「俺もよくわからない」

「何それっ」

レスティアが苦笑する。その苦笑の音すら美しい。レスティアはそんな子だ。

「レスティアはいつも一人なのか？」

「私は一人が好きなんです」

「それはいけないな」

「そう．．．．．でしょうか」

「人生つてのはそういうもんだ。誰かと交わらなければいけない。俺はそれをある少女から教わった。たまには一人もいいかもしれないが、レスティアはその様子だと．．．．．一人の時が多いんだろ？」

「そうですね．．．．．」

「今日は幸いここに俺が居る。姫、何なりとご用をお申し付けください」

「ロイ？何やってるの？」

あどけない顔でレスティアが尋ねる。

「分からないか？レスティア？一緒に遊ぼうぜって言うてるんだ」

「私を誘ってくれるの？」

「他に誰もいないだろ。ほらっ」

「でも、ロイ。私は．．．．．」

反射的にレスティアは断ろうとして思わず息を呑んだ。

ロイの瞳だ。透き通るような、深くて黒い瞳。優しい目。見つめて
いるうちに、ためらいが雪のように溶けていった。

「いい．．．．．の？」

拒否するかわりに、レスティアは小さな声で尋ねた。

「こんな私を誘ってくれるの？」

「もちろんだ。嫌か？」

「ううんっ。ロイ。どうかよろしくねっ」

レスティアは警戒も忘れて輝くばかりの笑顔でロイの名を呼んだ。

レスティアは夕刻になるまでロイに遊んでもらった。

教えてもらった遊びはほとんど男の子の遊びらしいが、それでも私は構わない。

ロイの陽気な笑顔を見て、時折優しく頭を撫でてもらうだけで、なにも不足は無かった。

レスティアが飛んだり跳ねたりする度に、注意深く見守ってくれる黒い瞳。たまにつまずいて倒れたりすると、すかさず差し出される、温かい大きな手。

しかし幸せな時間ほど早く過ぎてしまう。

「さあて。そろそろ帰らないとな」

ロイのそんな言葉で私は凍りつく。

「帰っちゃうの?」

「ああ。今日はな。でも明日がある。明日、またレスティアの所へ来ていいかな?」

もちろんっ!

「いいよ。ロイならいつでも来て」

「仕事が終わる次第、行くよ。今日は楽しかった、レスティア」

「こちらこそ、ロイ」

ロイが私に背中を向け帰り始めた。ロイの背中を見ながら私は呟く。

「また、明日ね。ロイツ!」

今日、私に始めて友達が出来た。

第十話 親交（前書き）

このレスティアとロイの話はロイの過去を巡る伏線の全回収になっています。第一章の補完ストーリーと考えて下さい。

第十話 親交

俺はそれからレスティアと親交を深めていった。あいつを差し置いてこの少女と話すことに罪悪感を覚えなくてもないが、まあ、うん。仕方ない。

俺は軽い話相手が欲しかったんだが、あの日以来、頻繁にレスティアが俺の所に来て……

今ではかなり仲良くなった。最初の警戒はどこへやら。今では、俺にかなり気を許してくれている。

それは、素直に嬉しかった。

俺はいつもの仕事を終え、レスティアの所へ向かう。

「おつ。ロイ。また、レスティアちゃんの所かい？」

森に行く途中でカルスが冷やかに来る。酒臭い。

「ああ。そうだが？何だ？」

「若いつてのはいいね〜」

「勘ぐってるようだが、残念だな。俺とレスティアはそんな関係じゃない」

「またまた、拳式はいつですか〜」

「俺は五歳だ。それを忘れるなよ。カルス」

「へ〜い」

出来上がってるな。そっとしておこつ。

俺はレスティアの元へ向かう。いつも通りの日常。そんな日々が続く。

レスティアが俺に何かと密着したがる以外、ハプニングは無い何気ない日常。

ローグ村は俺にとって聖地かもしれない。今、あいつがここにいないことくらいしか、俺に不満は無い。

俺は満たされていた。幸せだった。

だが、俺には幸せなど似合わなかったのかもしれない。

レスティアと俺は交わらない運命だったのかもしれない。

そう、この幸せな日々が崩される日はもう、間近に迫っていた。

第十話 親交（後書き）

ロイとレスティアの物語はもうそろそろ終わりです。シリアスな感じになると思います。ロイが記憶を失う瞬間を一生懸命書きたいですね。だいたい、どうなるかはもう皆さんもお察しできた事でしょう。

第十一話 渴望

森の街道。容赦無く降り注ぐ豪雨の中。

「ぐっ．．．！」

無慈悲な攻撃にロイはうめき声を上げた。短剣で攻撃されたのだ。

五歳の俺にとってはとてつもない痛みだ。それを歯を食いしばって耐える。ここで俺が倒れれば、後ろにいる少女を襲撃者から守るものはいなくなってしまう。

何故、こんな辺鄙な田舎に盗賊まがいの者が何十人も襲いかかってきたのは謎だが、そんな事はどうでもいい。今は後ろにいるレスティアを守らなければ．．．

しかし．．．さつき少し刺されてしまった．．．俺の手から血が飛び出る。

「ロイ!? ロイ、ロイ! どうしたの、大丈夫!？」

ソプラノボイスが響く。その声は涙まじりになっていた。

だが、その声がロイに戦う意思を再び呼び戻した。この妹のような子の泣き顔だけは絶対に見たくないーその決意を新たにする。

「大丈夫だ。レスティア。なんでもないから」

レスティアに背を向けたままホラを吹く。

初めての实战。未だに体が痙攣をおこしている。呼吸も乱れたままだ。

相手は武装した盗賊が何人かだ。勝つのは難しい。

それでも、ロイは右手を強く握る。俺が最後の砦なのだ。この少女を守るのは俺しかない。

「はあああああ！」

その思いだけが俺を動かす。俺の拳が盗賊達に襲いかかる。

だが、襲撃者たちは、あらゆる面でロイを凌駕していたのだ。

人数。体力。経験。

ロイの攻撃は簡単に弾かれる。その勢いでロイの大勢が崩れる。

「悪いな」

盗賊がそう呟くと、短剣を容赦無くロイの首に向かわせる。

「まだだ！」

俺はそれを必死でかわす。スラムでのケンカ経験の賜物だ。

しかし、盗賊は上手だった。そんな俺の行動に驚きもせず、俺を剣の柄で殴りつける。

「かはっ！」

五歳にする攻撃ではない。ロイはもう限界だった。

(勝てない．．．！ 死ぬ．．．死ぬ．．．！)

少年の瞳が曇り始める。ロイが前のめりに倒れる。

「ロイ！？ やだ、死んじゃダメだ！そんな事は許しません、絶対に！ 立って、立ってよロイ！せめてロイだけでも逃げて！」

かろうじて、俺の意識がもったのはレスティアの美しい声のおかげだ。

とどめをさすつもりなのか、盗賊たちがレスティアに向かい始める。

「くっ．．．レスティア．．．」

「や．．．める．．．！ レスティアには近づくな．．．！」

俺は盗賊たちに呼びかける。だが、意味は無かった。

「誰か．．．！ 助けてくれ．．．レスティアを、誰か、誰かあ．．．！」

少年は叫んだ。

「レスティアを、離せええ？ええ！」

泥臭い少年がまた叫ぶ。そして、声が聞こえた。

(力を望むか？ 無双の者よ？)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7043x/>

タランティルス^の例外少年

2012年1月15日00時38分発行